
『転生者達は踊る』ネギま編

愛玩人形霧唾様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『転生者達は踊る』ネギま編

【Nコード】

N9296L

【作者名】

愛玩人形霧唾様

【あらすじ】

舞台は関東魔法協会本部 麻帆良学園。

いなかったはずの役者は『異世界から来た悪魔』、『虐殺者を秘めし精霊王』、『独りよがりの神童』、『哀れな咎人』、『冷酷な影』、『神を追い求める者』、『**を愛する傀儡操者』の計七名。役者は全員がエゴイスト。ぶつかり合うのは狂気と狂気。そこに正義も悪もありはしない。

始まりはいつだ？ 終わりはいつだ？ この物語は喜劇か悲劇か……。

さあ、幕は挙がった。転生者達よ、踊れ

注* 処女作です。

人物紹介（キリア・ラウクルス（前書き））

11月21日記載。

色々と手抜きです。追加して欲しい項目があれば言ってください。
パワーバランスについては現在本編に登場した全てのオリキャラ
の設定を投稿してから発表します。

人物紹介（キリア・ラウクルス

名前：キリア・ラウクルス

性別：女（転生以前は男）

年齢：不明（今後の展開を考えて記載してないだけ）

容姿：見た目16前後の美少女。埃を被ったようにくすんだ、灰色に近い白髪のスインテルに力強さと妖しさを兼ね備えた紫紺の瞳。体型は読者様の想像にお任せ。
胸がペツタンコではないとだけ言っておく。

戦闘スタイル

高い戦闘技術と濃い戦闘経験を活かした近接戦闘を主軸に、多彩な業を織り交せて戦うタイプ。

つと言っても、武器が武器で業も業だから敵を毒で状態異常にさせてじわじわといたぶって殺す悪趣味な戦法をする事もよくある。

高い近接戦闘のスキル。業のレパトリの多さ。今までの戦いで得た第六感とも言える危機察知能力。その他にも毒や狂気での精神的、肉体的な状態異常に切り札とも言える『竜魂装着』や『自己暗示』。そして揺るがない悪魔的な狂気。

上記の八つがキリアが持つ強みであり手札。

使用武器：トキシック・ファング。

通常は上位のギギネブラから作られる強力な毒を秘めた片手剣だが、素材にはモンスター最高峰：G級に枠組みされるギギネブラが使われている。

名称が上位そのままなのにも訳があるらしいが、今はまだそれを

言う訳にはいかない。

切れ味、強度、毒属性の高さ。どれをとっても片手剣の中ではトップクラスに位置し、キリアがその気になって振るえば上位モンスター¹の首を簡単に切り落とす事も可能。

使用防具：ネブラK一式

G級ギギネブラから作り出された防具。

性能は上位ギギネブラから作り出されたネブラG一式の遙か上をいく。

見た目はネブラG一式と何等変わりがないのでモンスターハンター¹世界の時にネブラGと嘘を付いていた時もあったり。これにも深い訳があるが、今は明かせない。

ちなみに言うとネブラKのKはキリアのK。

技&スキル（キリア・ラウクルス（前書き））

11月21日記載。

色々と手抜きです。追加して欲しい項目があれば言ってください。
パワーバランスについては現在本編に登場した全てのオリキャラ
の設定を投稿してから発表します。

技&スキル(キリア・ラウクルス)

名称：『毒鎖蛇』

キリアの気をトキシックフアングを通して毒に変換。それを圧縮して大蛇の形にしたもの。大きさは使用者が込めた気の量に比例して変わる。

物理的な威力と高い肉体的状態異常攻撃を兼ね備えた、キリアのよく使う業その一。

これの応用である『毒鎖蛇・八本、八俣遠呂智』ヤマタノオロチは単に同時に『毒鎖蛇』を八本出しただけの業であるため、特に記載する事はなし。『毒鎖蛇・蜷局』とくらは上記の『毒鎖蛇』を使用者を中心に球体状に蜷局を巻かせ、包み込む事で使用者を守る盾にする応用業。強度は使用者が込めた気の量に比例して変わる。

名称：『ヴェノム・レイン(毒の雨)』

名前の通り毒の雨を降らせる業。

物理的な威力は全くと言っても不思議ではない程だが、状態異常攻撃の一点に限ればこの業はキリアが使用する業の中でも一、二を争う程。

降らせる範囲は込めた気の量によって変わり、降らせた毒の効果は使用者の気分で色々なものになる。要は、使用者次第で精神的状態異常の毒でも肉体的状態異常の毒でも降らせれる。

本編内初使用の際には肉体的状態異常の毒を降らせて、暗殺者を溶かそうとしていた。

名称：『毒破』どくは

変換され、形作られた毒に余分な気を込めて爆発させる業。

勿論形作られた毒がなくても発動出来、その威力は込めた気の量に比例して変動する。

爆発自体に物理的威力や状態異常効果があり、爆発の際に爆破地点を中心に撒き散らされる煙にも状態異常効果がある鬼畜業。

キリアのよく使う業その二。

ちなみに言くと、『毒破・連鎖』は単に連続で『毒破』をするだけの応用業である。

名称：『ナイトメア・ゾーン』

キリアと仮面が作り出した半球状の紫紺のドーム。

中はキリアと仮面以外のありとあらゆる生命エネルギー（魔力や気。それに類似したもの）を強制的に吸収する鬼畜空間になっている。

その他にも外との通信を切断したり、外から入る事も中から出る事も出来なくする結界的機能もあるなんちゃってチート。

裏技とも言える隠し機能があるから余計にチート臭い。

が、これにも勿論リスクや使用制限がありその一つが使用者の許容量以上の生命エネルギーを吸収した場合、使用者自身が爆発する事。

まあ、このリスクは仮面のお陰であってないようなものになっていたりする。詳細な事はやがて書くだろう仮面の項目に記載する。

使用制限だが、これは『竜魂装着』した『ギギネブラ（毒霧纏う二面の悪魔）』状態でなければ生命エネルギー強制吸収効果や結界機能の性能が格段に落ち、隠し機能も使えなくなる事。

何故かと言われればこの『ナイトメア・ゾーン』自体がギギネブラの攻撃を真似て作られたものであり、その攻撃が本来ギギネブラにしか使用出来ない攻撃だからである。

故に『竜魂装着』で『ギギネブラ（毒霧纏う二面の悪魔）』状態にならなければ性能が格段に落ちる訳だ。

そして、『竜魂装着』自体が使用者に多大な反動を与えるために長時間『ナイトメア・ゾーン』を展開する事は使用者の自滅を意味する。

ちなみに言うと、真似た攻撃というのはギギネブラの『捕食攻撃』である。

何かあれ、エロくていいよね（ ）

名称：竜魂装着

本文にも書いた通り、武器や防具に眠る『竜』の魂を自らの気と混合し、『竜』と同質の気を精製。それを身に纏い、身体に再び貯蔵する事で装着した『竜』の魂の生前であるモンスターと似通った性質を一時的に自らに付加し、大幅な身体能力強化や気の総量の底上げなどをするためのモンスターハンターの世界に遥か昔から伝えられ続けた禁忌のスキル。

勿論これには強大なリスクがあり、乱用は出来ない。

人より何段も格上の生物と言っても何等不思議でも可笑しくもない竜と似た性質を自らに付加し、様々な力を得る訳だから反動がない訳がない。

使用者の許容量を越えた力を得る訳だし、竜の魂を自らに上乗せするのだから長時間の使用で魂に身体を支配される可能性もあるし、少し使用しただけで何時間も動けなくなる事もある。

最悪爆発の可能性もあり（笑）

まあ兎に角、まさに脆刃の剣のようなスキル。

キリアの場合はG級ギギネブラの魂を装着し、単独での毒の精製や、最大出力の『ナイトメア・ゾーン』の展開。総合的なステータスの大幅UP等を可能にする『ギギネブラ（毒霧纏う二面の悪魔）』状態になる。

見た目は後頭部に悪趣味な仮面を付けて、体中に純白と真紅のラインが走っている姿に変わる。

名称：リミットオーバー（限界突破）

これは単純なスキルだから本文を見ればわかると思うので、省略。

作者の怠け癖が発動したから省略した訳ではない。断じて

名称：裏表の相違

ややこしさに定評のあるスキル。

これは端的に言えば「矛盾した人格」を自己暗示で再現して、相手にその矛盾を見せ付ける事で「矛盾した思い」を抱かせ、錯乱するもの。

例え話だと、優し過ぎるA君と残酷過ぎるB君がいるとします。

CちゃんはA君の雰囲気心地良く感じていて、A君といると心が安らぎます。

その反面、CちゃんはB君の雰囲気嫌悪感を感じていて、B君を見るだけで心が壊れそうになります。

ある日Cちゃんは、A君の優しさとB君の残酷さの両方を兼ね備えた「矛盾した人」に会います。

心地良さと嫌悪感の両方を同時に感じたCちゃんは勿論困惑します。

上記の矛盾した人に自己暗示でなつて、上記の文でいうCちゃんと似た感覚を相手に抱かせて、困惑させる。みたいな。わかりにくかったらすいません。

ちなみに、『魂装着』はモンスターハンター世界熟練者の中でも限られた一部のハンターにしか出来ない設定です。

世界規模で見ても20いくかないか、それぐらいしか出来る人はいません。

自己暗示の方はキリアの過去に起因する部分が多いスキルなので、キリアの固有スキルと言っても過言ではないかと。

あんな過去持つてる人って、それこそキリアしか思い浮かばないww。

自己紹介と回想代わりの序章（前書き）

あらすじにも書きましたが、処女作なうえに作者は素人です。可笑しな文や矛盾や誤字などを見付けるかもしれませんが、そういう時は報告お願いします。

感想、批判、応援などしてくれたら嬉しいです。

自己紹介と回想代わりの序章

突然だが自己紹介でもしようと思う。僕の名前はキリア・ラウクルス。性別は元男だ。

……えっ？「何で元男なんて言ってるんだよ」だって？

それには結構深い事情があつて、懇切丁寧に説明するのはめんどくさ（ry）……げぶんげぶん、まあ結構な時間を使うので、簡潔且つわかりやすく要点だけ教えるところしよう。

あ…ありのまま今まで起こったことを話すぜ！『トラックに轢かれて気を失って目覚めた時には男の象徴がなくなった赤ちゃんになつてたんだ』な…なにを言ってるかわからねーと思うが俺も何をされたかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった。テンプレだとか性転換だとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ！もっと恐ろしい転生の片鱗を味わつたぜ！。

これでわかつてもらえたかな？ ……えっ？ わからないって？
ですよねーw。つて痛っ！ ちよっ！ 石投げないでっ！ 変な性癖に目覚めちゃう（ry）。

おっと、少し我を忘れてしまったようだ。今度はしっかりと説明するから石を投げないでくれよ？

さつき書いたようにトラックに轢かれて気絶して、気が付いたら男の象徴 『ゲイ・ボルグ』とも言う がなくなつて、

赤ちゃんになつてた。詰まるところ転生したら女になつてた、つて事。しかも地球ではない異世界、いやいや並行世界？ それとも遙か未来の地球？ まあともかく現代の地球ではない場所だ。ちなみに言つと転生した世界は皆さんご存知モンスターハンターの世界、ついでに言つと僕が転生した村は水没林の近くにある、砂漠の

街口ククラックから馬車なら三日程の距離にある小さな村だ。

まあ今はそんなこと置いといて。とにかく”俺”は転生した結果”私”になった訳だ。

まあ、一人称は気分が変わるが。

こうして僕の性別は女になり、転生後は平凡な日々を過ごし今に至る。何て平和な人生を送れるはずがなく。転生者の定めなのか非凡な才能を持っていて、それに目を付けたギルドのお偉いさん方が当時11歳であった僕を親から買収し、強制的にモンスターの狩りをする様になった。

自分で言うのも何だけど、確かに天才と言われる才能を持っていた事は確かだし、弱肉強食の世界で平和に暮らせるとは思ってたなかつたよ？ しかも村が水没林の近くだし、何時モンスターが襲撃して来ても可笑しくなかつた訳で、襲撃された時に抵抗なり逃げるなり出来るようにと毎日の体力作りは欠かさなかつたが。だからと言ってお偉いさん方の目に付けられるような事はしてない…はず。

水没林でのクエストの帰りに、村で休憩していたハンター達の軽い運動を、軽い気持ちで真似したのがいけなかつたのかな？ でもだからと言って僅か11歳の子供に生死の駆け引きを強要する大人ってどうよ？ しかも両親 あんなの親だと認めてないがなんて、こんな愛らしい幼女を売ったんだぜ？ そりゃあまあ一生遊んで暮らせる額の金を前にして揺らぐのはわかるけどさ…。まあ今となつてはどうでもいい事だが。

そんな波瀾万丈な幼少期を過ごし、厨二臭い称号をギルドから貰い、それなりに有名なハンターになった頃、驚くべき事を知った。

それが何かと言うと、転生者が自分だけではなく複数人いると言う事だ。しかも前世でのモンスターハンタートライで知り合ったフレンドが何人も転生していて。啞然としながらも何とか受け入れ、それまでの殺し合う生活から一転、まるでぬるま湯のような日常を

しばらく過ごしていたが。

神様はそんな日常が嫌いなのか、ぬるま湯のような日常から一転し、狂気と正気、悪と正義、捻くれ者と真っ直ぐな奴、その他にも色々混ざり合った混沌とした日常になる。否定し合い、拒絶し合い、奪い合い、壊し合い、殺し合う。

そんな日常がしばらく続くが、しばらくしてそれも落ち着きを取り戻した。

ギルドが提供するハンター専用の宿のキングルーム、所謂VIPルームに置いてある天蓋付きの、見るからに金の無駄使いなベッドに身体を預けて、今までの事を振り返りながら、ふと思ってしまう。

「何で心の中で自己紹介してんだろう。しかも回想なんかして、これじゃ只の痛い子か厨二病患者じゃないか」

そう言いながら自己嫌悪する。何やってんだろう僕は。少し前までの地獄のような日々が強烈過ぎて頭が可笑しくなったのかな？いや、もしかしたら元々可笑しかったのかも、だって考えても見なよ、平和な日本に住んでいた平凡な男が、ゲームの舞台で女として転生を果たし、前世では絶対にありえないような人生を送りながらもこうして正気を保っていられる。明らかに異常だろ？

本当は気付いてないだけで、とっくの昔に正気を捨てて狂気に囚われてるのかもしれないけどさ。

まああの血濡れた地獄のような日々にあつた確かな狂気の中では、可笑しくなっても何等不思議ではないのだけれど。

そうやって頭の中で色々考えていたら、良く五体満足でいられたなあと、自分で自分を褒めたくなった、そんなことはしないが。

「ん〜。そろそろ眠くなってきたな〜」

そう言っただけ目を閉じる。今日を生きられたことに安心感を覚えつつ、明日死ぬかもしれない事実には不安を思いながら。

この時はまだ知らなかった。この先にある物語を。舞台の幕は挙がり、転生者達は踊る。舞台は英雄の息子が働く学園。舞台を彩るは魔法の光。終幕は何時だ？

第0・5話：その頃の麻帆良学園の学園長室

とある世界のとある国、とある学園のとある一室で、三人の人影が会話をしていた。

「よく来てくれたのう、長旅ご苦労じゃ」

そう言ったのは人間とは思えない後頭部を持った老人。この学園

麻帆良学園　　の学園長、近衛近右衛門である。

「よく言うぜ、エヴァにあることないこと吹き込んで、俺に鬼畜外道のレッテルを貼ってやるって脅した張本人が」

それに対し不機嫌そうに返事をする金髪金目の二十代前半であるう青年、ラジル・アルファードは、目前の近右衛門を殺意すら含んだ眼光で睨みながら悪態をつく。

「すみません、ラジルさん。何度もやめとけって言ったんですが、僕じゃ止められなかつたんです」

申し訳なさそうに言う紳士的な雰囲気を纏う中年男性、タカミチ・T・高畑。何度も近右衛門に振り回されたのだろう、その顔には疲れが見える。

「過ぎた事に幾ら悪態をついてもどうにもならんじゃろっ？　ほら、元気を出すのじゃ」

「どの口が言うんだ、どの口が」

「この口じゃが？」

近衛門は悪びれる態度など見せず、減らず口を言う。呆れ果てたのか、深い溜め息を吐きながらもラジルは問う。

「はあ……それで、頼み事って何なんだよ？」

「それなんじゃが、今この麻帆良学園は人手不足でのう。来年にはメルディアナ魔法学校から卒業生がここに二人も来る、しかもその卒業生が……」

「ナギさんの子供達、ネギ・スプリングフィールド君とアリア・スプリングフィールドちゃん。英雄の血を利用しようと襲撃者も増えるでしょう、ですから」

「『紅き翼』の一員であり英雄の一人、『金色の精霊王』と呼ばれるお主を警備員として雇うことで、襲撃者達に対する制止力にしようと思つての、引き受けてくれるじゃるか？ 今ならエヴァンジェリンの家の近くに家を作つてやるぞ？」

矢継ぎ早に言葉を続ける近右衛門とタカミチ、それに対してラジルは呆れた表情をしながらも、どこか嬉しそうに了承の声を出す。

「どうせ断るって言つたらエヴァにあることないこと吹き込むって脅すくせに、よく言うぜ、本当。まああの一件も片付いたし、エヴァと好きな時に会えるなら願つたり叶つたりだ。その話、受けるぜ」

「感謝するぞい、ラジル君。それにしてもお主は、相変わらずエヴァンジェリンにお熱じゃのう」

了承の言葉に感謝の言葉を返しながらも、ラジルをいじるのをやめない近右衛門。それに対して顔を赤くしながらも反論するラジル。その光景を見てタカミチは苦笑いをしている。

「ばか！ そんなんじゃねーよ！ エヴァは俺の恩人であってだな、決して恋愛対象なんかじゃ……」

「本当かろう？ 嘘ついてるんじゃないじゃろうな？」

「うっ……嘘なんかついねえよ……」

「ははははっ……はあ……」

そう言っただけ目を逸らすラジル。どうやらその態度に満足したのか、急に真面目な顔付きになり、どこか壮観とした雰囲気を感じた近右衛門は口を開く。

「ラジル・アルファード。『紅き翼』の一員であり英雄の一人、『金色の精霊王』と呼ばれるお主を、本日付けで麻帆良学園女子中等部二年A組の副担任兼夜の警備員に任命する。わからないことはタカミチ君に聞くのじゃぞ？」と言っただけお主にわからない事などなさそうじゃが。ふおふおふおふおふおふお」

突然佇まいを直し口を開いた近右衛門に、タカミチはまたしても苦笑いしながら、ラジルはたっぷり三秒程フリーズし、その後再起動し近右衛門に詰め寄る。

「はあ！？ 夜の警備員は了承したが副担任なんて了承してないぞ！？ って言うか聞いてすらないぞ!？」

「だって言っていないもーん」

「妖怪爺が語尾にもんなんて付けるな！ だいたい俺は教育免許なんて持ってないぞ！？ 良いのかよ！？ そんなんで！？」

そう叫びながらラジルは近右衛門の胸倉を掴み、ぐらぐらと揺らす。近右衛門はまたしても悪びれもせず言う。

「そんなもの偽装すればいいのじゃ。そんな事より妖怪爺とは酷いと思わんかのう？」

「ぬらりひよんには妖怪爺で充分だ！ 大体そんなんでいいのかわ？ 仮にも聖職者だろ！？ 人様にものを教える立場だよな！？ 偽装なんかしていいのかわあああああ！？」

「ちよっ……、そのままじゃ儂死んじやう。ギブじゃギブ、のうお主聞いておるかのおおおおおお！？」

ラジルが近右衛門を揺らす音は、すでにぐらぐらの領域を越えており、例えるならぐわんぐわんの領域だ。流石に苦しいのか、近右衛門は必死に止めてくれるよう叫ぶが、今のラジルにはそんな声聞こえないようだ。

「答えるおおおおお！ お前の血は何色だああああああああああ！？」

「……」

「早く答えるうすのろがああああああああ！」

「ちよっ……！ ラジルさんやめて下さい！ 学園長のライフはもうゼロです！」

「H A ! N A ! S E !」 見るに耐え兼ねたのか、タカミチがラジルの止めようとするが、ラジルは止まらずに近右衛門の胸倉を掴みぐわんぐわんと揺さ振り続ける。そんな混沌としたシュールな空間に突如乱入者が現れる。

「ラジル！ 本当にラジルなんだな！？ 偽物とかじゃないよな！？」

扉を蹴破りラジル達がいる一室 学園長室 に入ってきた長い金色の髪に綺麗な蒼い目を持つ十歳程であろう少女は、近右衛門とタカミチには目も向けずにラジルに駆け寄りながら声を張り上げる。

「真正正銘本物のラジルだ。久しぶりだな、エヴァ」

さつきまで半ば暴走状態だったラジルは少女 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル を見ると瞬く間に近右衛門の胸倉から手を離し、必死に自分を止めようとしていたタカミチを振り払い、エヴァンジェリンに嬉しそうにはにかみながら返事をする。

「ラジル！ ラジル！ ずっと待っていたんだぞラジル！ ずっと会いたかったんだぞラジル！ ラジル！ ラジル！」

目に涙を浮かべながらラジルの名前を何度も呼ぶエヴァンジェリン。ラジルはそんな彼女を愛おしそうな目で見つめながら、胸元に飛び込んできた彼女を優しく受け止め、左手で背中を摩り、右手で頭を撫でる。

「待たせて悪かったな。エヴァの賞金取り消しに思ったよりも時間が掛かってさ」

「十五年も待たせるとは何事だ。賞金取り消しだって十五年も待たされるぐらいならしなくてよかったんだ……」

そう言うエヴァンジェリンにラジルは苦笑いを向ける。冒頭でラジルが言っていたあの一件とは、ラジルの胸の中にいる少女、エヴァンジェリンにかけられた賞金を取り消す事だったのだ。

なんとこの小さな少女は『闇の副音』と言われる賞金首で、見た目とは違い六百を超える年月を生きた『真相の吸血鬼』なのだ。その力を恐れられ、理不尽な理由で命を狙われる立場になった彼女を助ける為に、ラジルはせめて賞金だけでも消そうと最近まで各地を渡り歩いていたのだ。

「そう言うなエヴァ、俺はエヴァみたいな優しい娘が、理不尽な理由で命を狙われるのが嫌だったんだ。それに恩返しだってしてなかった、せめて賞金の取り消しぐらいしなきゃ俺の気が済まねえ」

苦笑いを浮かべながらも、瞳に強い意思を持って言うラジルの言葉に、エヴァンジェリンは顔を日照らせながらも口を開く。

「お前は馬鹿者だ……。でも、ありがとう」

「どういたしまして」

エヴァンジェリンの言葉に素直じゃないな〜等と思いつつも、その魅力すらある不器用な言葉に返事をする。感動の再会とはまさにこの事だろう。

「のう、タカミチ君や。儂さつきまでお花畑で、川の向こう側にいる死んだ爺様と会話をしていたはずなんじゃが、何時の間に学園長室に来たんじゃ？」

「ははっ……、夢でも見ていたんじゃないですか？ さつきまで気持ちよさそうに眠ってましたし」

「ふーむ、そうじゃったかのう？ どうにも記憶が曖昧じゃのう。まさかボケてしまったのかの？」

「そうですね、学園長。それと、ボケていたのは元からでしょう？」

「ふおっ！？ タカミチ君がくれたじゃと！？」

「やだなー、僕がくれる訳ないじゃないですか。その後頭部を叩き落としますよ？ ガクエンチョウ」

近右衛門とコント染みた会話をしながら、ラジルとエヴァンジェリンの感動の再会を眺めていると、ふとタカミチは思ってしまう。平和だなあ、と。

怯えるようにかくかくぶるぶる震える近右衛門は視界に入っていないようだ。

エヴァの頭を撫でながら背中を摩っていると、ふとついさっきまで忘れていた事を思い出してしまった。

「なあ、爺さん。俺を教師として使うとか言っていたけど、俺がナギとかラカンみたいな馬鹿だったらどうする気だったんだよ？」

「ふおっふおっふおっ、その点は抜かりなしじゃ、タカミチ君からお主は大層頭が良いと聞いておったからのう」

ちっ、タカミチめ。余計な事言いやがって。タカミチにジトつとした非難がましい視線を送ると、冷や汗をかきながら顔を逸らす。おい、口笛なんか吹くんじゃねえ、ぴゅーぴゅーうるさいから。

「なあ、ラジルがここで働くって話しは本当なのか？」

俺の胸の中にいるエヴァが、何か嬉しい事があったのだろうか？嬉々とした表情で俺に問い掛ける。

「ああ、夜の警備員だけをやる予定だったが、どうやら女子中等部の副担任もしなきゃいけないらしい」

そう言っつて爺さんとタカミチに刺々しい視線を向けるも、やはり冷や汗を流しながら顔を逸らされる。

おい、タカミチの口笛は、まあ良いとして。爺さんあんた、口笛吹けてねーよ、吹くんならちゃんと吹けよ。

「どこのクラスの副担任なんだ！？」

「女子中等部二年A組だよ。」

そういえば二年A組と言えば原作の主要キャラがひしめく魔境じゃないか、と言うことは俺にネギ坊主のサポートでもさせようって魂胆か？

まあ、俺の存在とか、ナギの子供が双子だとか、詠春の子供が双子だとか、原作とは違う所もあるから、必ずネギ坊主が二年A組の担任になるとは言い切れないけど。

「そうか！　じゃあ今度からはラジルも一緒に学校に行けるんだな
」

そう嬉々として言うエヴァ、俺と一緒にいられる事がそんなに嬉しいのだろうか？　自惚れてるだけかもしれないが、もしそうだったのなら俺は嬉しい。

ここでちょっととした自己紹介代わりの今までの境遇を説明しようと思う。あん？　痛い子だと？　仕方ねーだろ、電波を受信しちまつたんだから。

まあ適当に流し読みでもしてくれたら助かる。……あれ？　何言つてんだ俺は？　まあいいか。

気付いてる奴もいるかもしれねーが、俺は転生者だ。トラックに轢かれて死亡して、気付いたら神を名乗る変人がいて、なんだかなだあってそいつからチートな能力を貰って転生した。

転生後は二次創作でよくあるありきたりな展開で、『紅き翼』の一員となり大戦に参加し、色々あった結果英雄と呼ばれるようになった。

あん？　略し過ぎだど？　だってよお、テンプレ展開過ぎて書く事なんてそんなにないんだぜ？　仕方ないだろう？

そう心の中で意味不明なやり取りをしていると、爺さんとタカミチとエヴァが急に真面目な顔付きになる。……エヴァは少し不機嫌そうだ。

おいおい、まさか初日から侵入者か？ 勘弁してくれよ。

「学園長……、侵入者はどうやら世界樹広場に直接転移して来たようです」

「まずいのう、結界を無視して転移出来るほどの実力者が……、こちらにも転移で行かなければ時間遅れ……。じゃがエヴァンジェリンは封印のせいで転移が使えない、となると」

「ああ、わかってるよ。行けばいいんだろっか？」

「頼むぞい、ラジル君。出来れば拘束して連れて来てくれんかのう」

「了解りよーかい。報酬は弾んでもらうぜ？」

そう言っつて折角の再会を邪魔されて、不機嫌そうな顔になったエヴァの頭を撫で、神から貰った能力を使い転移をする。

「『風よ、我の声が聞こえるならば、汝等で我を包み込み、遙か遠い彼方まで飛ばしてみろ』」

そう言っつと俺の周りを風が吹き荒れる。

次の瞬間には世界樹広場に到着しているだろう。

襲撃者をどうやって拘束するかなどと考えながら、心地良い風に身を任せる。

舞台は神の木の下。スポットライトは月光。月の明かりに照らされた舞台上で、悪魔と精霊は出会う。

第一話・突然の展開と理不尽。そして昇華する狂気。（前書き）

先に言っておきますが、色々と酷いです。すみません……。

それと、本文の中で疑問に思う文があると思うのですが、後書きを見たら少しは納得出来ると思います。たぶん……

第一話：突然の展開と理不尽。そして昇華する狂気。

意識が浮上する。身体にこびりつく心地良い怠情感に名残惜しさを覚えつつも、違和感に気付いて目を開く。

「……………」

きつと今の僕は疑問符でいっぱいの間抜けな面をしているのだろう。まあ、仕方ないよね？ 目を開けたら馬鹿でかい木が佇んでいました。そんな意味不明な状況に立たされたら誰だって間抜けな面をすると僕は思う。

だがこのまま突っ立っていてもどうにもならないので、疑問を胸の奥に引っ込めて現状確認を始める。

「アイテムポーチは空っぽか……………」

真っ先に確認したアイテムポーチには、何も入っておらず空っぽだ。まあ、武器はあったし、何時の間にか防具も装備していたから、余程強い敵が来なけりや安心だ。

ん？ いや、待てよ。これがもし誘拐だとしたらむしろピンチ？ 誘拐までしたのに武器と防具をこの僕に渡す余裕がある。詰まり僕を打倒出来る程の強者、もしくはただの馬鹿のどちらかだが、ギルドが管理する宿、しかもキングルームの警備を潜り抜け、寝ていたとは言え僕に気付かれずに誘拐を成功させた人間が、後者である可能性などないに等しいだろう。と言う事は前者、僕を打破出来るであろう存在。

首筋にぞくぞくとした寒気を感じ、背筋が震える。恐らく誘拐犯は気配遮断に長けているのだろう。でなければキングルームの嚴重

な警備を抜ける事は不可能だし、警備を蹴散らして力付くで僕が泊まっていた一室に向かったのなら、その喧騒で寝ていたって飛び起きてしまうだろう。

……考えたくはないが、誰にも気付かれず悟られずに、警備を無力化した可能性もある。現実離れた憶測ではあるが、それを成し遂げる程の力を持った存在を僕は何人も知っている。

そう頭の中で色々考えていると、ふと可笑しな点に気付く。気配遮断に長けているにしろ、誰にも悟られずに警備を無力化出来る程の力を持っているにしてもだ。僕の殺害が目的なら何故見つけ次第殺さなかった？ 何故僕に殺し合いの道具を持たせたんだ？ 何故わざわざ誘拐した？

次々に浮かび上がる疑問、思えば可笑しい点が多過ぎる。まるで底無し沼に沈むような感覚に陥っていたら、ある可能性に辿り付いた。

「世界を…渡った？」

世界を渡った可能性、詰まり並行世界若しくは異世界に流れ着いた可能性。突拍子もない事だが、僕が転生した事だつて突拍子もない事だ。世界を渡る事だつてありえない事ではないはず。そこまで考えて改めて周囲の光景を見る。すると案の定、モンハンの世界では使われていない近代的な電灯などを見付ける。

「誘拐犯は世界と世界の境界線を無視出来る程の力を持った存在。若しくは誘拐犯などいなくて、何らかの事故で流れ着いたのどちらかって事か……」

溜め息が漏れる。無意識の内に腰に下げていた武器 『トキシック・ファンク』 に添えていた手を離す。

「はあ……、無駄に労力を使ったって？ 笑えない」

本当に笑えない。何が悲しくてこんな見知らぬ世界に訪問なんてしなくちゃいけないんだ。きつと神様は地味な顔をした眼鏡の陰険サディストなんだ。天才美少女ハンターである僕が嘆く姿を見て恍惚とした顔をしているに違いない。いつか神様にあつたら体中の穴から毒を流し込んで泣き喚かせて殺して下さいと言わせてやる。

ちよつと……、否、かなり危険な事を考えながらぼーっとしていると、何の前触れもなく変わった風の流れを肌で感じ取る。一箇所、風が徐々に集まる不可思議な光景を眺めつつ、軽く腰を落としいつでも動ける体制になり、何が起きても対応出来るようトキシックフアングの柄に手を添える。

そして次の瞬間には、一箇所に集中していた風が弾き飛び、金髪金目の青年が姿を現す。

「何の目的で麻帆良に侵入したのかは知らねえが、不法侵入でアウトだ。少し痛い目見てもらう……ぜ！」

異様な登場を果たした青年は、言葉と同時に地を蹴り水平に跳ぶ。瞬きの時間すらなく目前に着地した青年は、その勢いのままこちらに拳を振るってくる。

「幾ら称賛の言葉を並べたって表現出来ない程の超絶美少女にいきなり殴り掛かるって……君はどんな教育を受けて来たんだい？」

振るわれた拳を楽々と避けてそう言っていると、青年は一瞬驚きの表情を見せるが、直ぐに表情を引き締めて口を開く。

「さあ、な！ 少なくともナルシストな侵入者に慈悲を掛けるような教育は受けてないぜ！」

続けざまに振るわれる拳を避けながら、ナルシストなのは自覚しているのです、特に気にもせず口を開く。

「あっそう、良い教育を受けてたんだね」

そしてどうやら、会話から察するに僕は侵入者と見られているらしい。しかも侵入者に問答無用で襲い掛かる事から、ここは誰かの所有地であり、かなりVIPな人物若しくはかなり価値のある物があると言っているのだらう。そう考えると、先程はあんな言葉を言っていたが、いきなり殴り掛かってきた青年の判断は間違いではないだらう。

……それにしても麻帆良か。恐らくこの土地の名称なんだろうけど、どこかで聞いた気がする。うーん、何だっけ？ 頭に靄が掛かったみたいで思い出せない。

「ねえねえ、麻帆良って何さ？」

わからないなら聞いてみよう、と言う事で振るわれ続ける拳を掴んで固定してから疑問をぶつける。すると青年は驚愕と疑問が混ざり合った表情をするが、すぐに口端を吊り上げて口を開く。

「はんつ！ よく言うぜ。侵入先を知らない侵入者がいるってか？ つまんねえジョークだな！」

一度鼻で笑った後、嘲笑うかのように顔を歪めて皮肉を言うてる。

いや、侵入者じゃないんだけど。むしろ被害者なんです。と言いたい所だけど、どうせ信じてくれないだろうし、僕がこの青年の立場でも信じない。そこまで考えた所で青年が突然意味のわからない事を言い始める。

「光よ、我が声が聞こえるならば、光り輝く射手となりて降り注げ」

そして次の瞬間、掴んでいた拳とは逆の手から光が漏れだし、その光が形を持って襲い掛かってきた。それを左手で掴んでいた青年の右拳を離して、後ろに下がる事で避ける。見ればさっきまで僕が立っていた場所が軽く凹んでる。不可解な現象に少し驚きながらも直ぐに体制を立て直し、油断なく青年に視線を向けながらも考える。何だ今のは、気弾に似てはいるが気の類は感じなかった。代わりに得体の知れないナニかを感じた。まさか

「魔法使いとも言うのかい？ 笑えない」

荒唐無稽で目茶苦茶な憶測だが、もし目の前の青年が魔法使いなら不可解な現象にも納得出来る。

そこまで考えてふと思いつく。青年が言っていた麻帆良という言葉、侵入者に対する防衛、そして魔法。ここまで考えたら嫌でも思いついてしまう。前世で見た魔法先生ネギまという漫画。恐らくここはその漫画の舞台である麻帆良学園だろう。

「はあ、今度は魔法が飛び交う世界か。やっと平和になったと思っただのに、笑えない」

あの馬鹿でかい木はたぶん『神木・蟠桃』だろう。その目前に突如現れた僕、襲い掛かれるのが普通だ。

そこまで考えて可笑しな事に気付く。金髪金目の青年なんて原作にいたか？ そもそもネギまに出て来た魔法は、日本語で詠唱して発動出来るのか？ 新しく出て来た疑問に憶測を立てようとするが、目前の青年はそんな事気にせずに言葉　　恐らく詠唱の類を放つ。

「『風よ、我が声が聞こえるならば、猛る嵐となりて吹き荒れる』」

青年の言葉に反応して風の流れが変わり、瞬きの間すらなく圧倒的な暴力になった。そしてその暴力は僕に向けて突き進み、その身を喰らわんと牙を剥く。

「っ！」

迫る嵐は強大で、今の状態だと避けるのは不可能だと悟り、急いで小型の盾を構え、衝撃に耐えようと体制を整える。

「ぐっ！」

ここまでした所で嵐が盾に衝突して、強い衝撃に吹き飛ばされそうになるが、何とか耐える。気を抜いたら吹き飛ばされそうな嵐が数秒続く。それを数秒耐え続け、ようやく終わったかなどと思いつつながら青年に視線を向けると、僕に追撃せんとまた声を放つ。

「『雷よ、我が声が聞こえるならば、白き雷となりて敵を喰らえ』」

そして放たれる神々しい輝きを持つ白い雷は、先程放たれた嵐のせいで舞い上がる土煙の中にいる僕に向かって一直線に突き進んでくる。

「ぐ、うつ」

白い雷は盾で防いだが、続けざまに押し寄せた衝撃までは防ぎ切れず、何歩か後ろに下がってしまふ。

そして更なる追撃を与えんと青年は言葉を放つ。

「『光よ』」

今までの経験で養った危機察知能力が警告を鳴らす。早く逃げろ、と。

「『我が声が聞こえるならば』」

体中に悪寒が駆け巡る。未だ頭の中では警告が鳴り響いて止まらない。

「『天より降りる精霊王の威光となりて』」

身体に走る感覚に身を任せて足を動かそうとしたが、意思に反して足は動かない。

「『愚かな咎人に断罪を下せ』」

そう青年が唱えた瞬間。先程の嵐や雷などまるで兒戯に思える程に暴力的な光が溢れ、金色で闇夜を染めながら僕に降り注ぐ。そのさまは精霊王の威光に恥じない程に圧倒的だった。

金色の極光が闇を喰らいながら近付いてくる。周囲の音など聞こえない程に圧倒的過ぎる暴力に、半ば呆然として反応が遅れ、無防備なままにその身を光に包まれる。

闇夜を喰らい音を喰らい、ついには僕の身を喰らった極光は、気が狂う程の衝撃を僕に与える。気絶しそうになりながらも、その先にある死への小さな恐怖心から、きつく奥歯を噛み締める事で衝撃に堪える。

極光の中でふと思う。ああ、理不尽だ。本当に理不尽だ。確かに侵入者と誤解されても可笑しくないだろうけど、だからと言ってこんなに痛い思いをする事に納得が出来るはずがない。きつと気を失ったら、次に目覚める事は出来ない、若しくは目覚めた時にはそこは拷問部屋なんだろう。そんなのは嫌だ。だからと言って僕の身に起こった事を話しても、そんな事信じれる訳がないと一蹴されてしまっただろう。

いや、でも、もしもあの糞野郎 金髪金目の青年 が転生者だとしたら、信じてくれる可能性も出て来る。原作にはいなかった存在だ、転生者である可能性は高いだろうし。でも、信じてくれる可能性があったとしても、だからと言って必ずという訳ではないし、何より僕を傷付けたんだ。懇切丁寧に説明をして信じてくれたとしても、僕の鬱憤は解消出来ないし、その鬱憤をそのままにしておく気は毛頭ない。ならば、どうする？

簡単だ、無様に地べたを這い蹲らせて、屈服させればいい

そこまで考えた所で、自己暗示を始める。心の片隅にある生死を賭けた戦いで薄れ欠け小さくなった恐怖心をどんどん大きくさせていく。

辛い事は嫌だ。痛いのは嫌だ。苦しむ事は嫌だ。傷付くのは嫌だ。死ぬのは嫌だ。辛い事は怖い。痛いのは恐い。苦しむ事は怖

い。傷付くのは怖い。死ぬのは怖い。辛い事は嫌だ。辛い事は怖い。痛いの嫌だ。痛いの怖い。苦しむ事は嫌だ。苦しむ事は怖い。傷付くのは嫌だ。傷付くのは怖い。死ぬのは嫌だ。死ぬのは怖い。辛い事は嫌だ辛い事は怖い痛いの嫌だ痛いの怖い苦しむ事は嫌だ苦しむ事は怖い傷付くのは嫌だ傷付くのは怖い死ぬのは嫌だ死ぬのは怖いのは怖い

ひたすら自己暗示を続ける。やがて小さかった恐怖は膨れ上がり大きな恐怖となる。無意識に震える身体を抑えようとせず、恐怖が理性を壊すまで自己暗示を続ける。

何で僕がこんなに辛い思いをしなきゃいけないんだ？ 何でこんなに痛い思いをしなきゃいけないんだ？ 何でこんなに苦しい思いをしなきゃいけないんだ？ 何で傷付かなきゃいけないんだ？ 何でなんでなんでナンデナンでナンデナンデ

やがて金色の極光は消え、その衝撃で土煙が舞う。

誰が僕に辛い思いをさせた？ 誰が僕に痛い思いをさせた？ 誰が僕に苦しい思いをさせた？ 誰が僕を傷付けた？ 誰がだれガダれガダレガダレガダレガダレガ

土煙は晴れ、驚いた表情をしている金髪金目の青年が視界に入る。

あいつが僕に辛い思いをさせたんだな。あいつが僕に痛い思いをさせたんだな。あいつが僕に苦しい思いをさせたんだな。あいつが僕を傷付けたんだな

自己暗示で大きくなり過ぎた恐怖は、臨界点を突破して僕を破綻させる。目前の青年から死の気配すら漂っているように思えてくる。

このままだと殺られる

恐怖に蝕まれた精神は青年に異常な程に怯え、僕に明確な死をイメージさせる。

死ぬのは嫌だ。死ぬのは怖い。なら、どうする？

臨界点を突破して尚肥大し続ける恐怖は狂気へと昇華して、僕を飲み込む。

「殺られる前に、殺ってやる！」

S i d e ラジル

目を開けたら世界樹広場に到着していた。どうやら転移は成功したらしい。

視界に埃を被ったような白い髪を二つに縛ってツインテールにした、綺麗な紫紺の眼を持った美少女が映る。

油断なく構える姿は、華奢で色白な不健康そうな容姿とは裏腹に、幾度も死線を潜り抜けた強者の雰囲気纏っている。恐らく彼女が侵入者だろう。少し驚いた顔をしたが、直ぐに表情を元に戻した。

「何の目的で麻帆良に侵入したのかは知らねえが、不法侵入でアウトだ。少し痛い目見てもらおう……ぜ！」

言葉と同時に足の裏に溜めていた魔力を解放し、地を蹴る。すると、次の瞬間には侵入者に手が届く距離に着地をしていた。そして

そのまま勢いを殺さずに拳を振るう。

「幾ら称賛の言葉を並べたって表現出来ない程の超絶美少女にいきなり殴り掛かるって……君はどんな教育を受けて来たんだい？」

放たれた拳は空を切り、目標には当たらなかった。強者だと思っ
てはいたが、まさか今の一撃を簡単に避け、尚且つ口を開く余裕が
あるとは……。

どうやら予想以上の強者だったらしい。相手の力を計り間違える
とは……、まだまだ俺も未熟者だな。

「さあ、な！ 少なくともナルシストな侵入者に慈悲を掛けるよう
な教育は受けてないぜ！」

そんな事を言いながらも、ナルシストとは言えこんな美少女に暴
力を振るう事に罪悪感を感じる。だが美少女だからと言って慈悲
など掛けていたら、足を掬われて殺され兼ねない。

何よりこの麻帆良学園には、裏の世界のパワーバランスを崩すよ
うな人物や代物がある。それを奪われては多くの人が混乱に陥る。

だから鬼と呼ばれようが悪魔と呼ばれようが、侵入者に慈悲を掛
けてはいけない。冷酷にならなければいけない。

そう思う事で胸の内にある罪悪感を気にしないようにして、拳を
振るう。

「あっそう、良い教育を受けてたんだね」

その言葉に胸が痛んだ。幾ら敵対する者同士だとしても、慈悲を
掛ける事を忘れてはいけない。何故なら慈悲を忘れた人間は悪魔よ
りも恐ろしいから。

俺が言い出した事だが、その言葉を聞き、当たり前のように是認

の返事を返す少女に少し同情してしまう。きっと辛い人生を送って来たに違いない。その小さな身で人間の汚さを嫌と言う程思い知らされたに違いない。だからこんな歪みを感じる声をしているのだろう。もしかしたら今回の侵入だって半ば強制的にやらされた事なのかもしれない。

胸の奥にちりちりとした痛みを感じながらも、その少女に拳を何度も振るい続ける。その拳を少女は何かを考えているような表情をしながら楽々と避け続ける。

「ねえねえ、麻帆良って何さ？」

少女は振るわれ続ける拳を掴む。動かそうとしたがびくともしない、どうやら相当な馬鹿力のようだ。魔力で強化されていないとは言え、一般の成人男性を遥かに凌ぐ身体能力を持った俺がこの有様だ。強化してないのは少女も同じだし、恐らく接近戦では向こうに分があるのだろう。

まあ、今はそんな事を考えるよりこの少女に返事をしよう。

「はんつ！ よく言うぜ。侵入先を知らない侵入者がいるってか？ つまんねえジョークだな」

口から出る言葉は辛辣なのに、心の中では少女に同情を感じてる。そんな自分に嘲笑いたくなる。って言うかしているのだろう、口端が吊り上がるのが自分でもわかる。

もしかしたら、口ではああ言ってしまったが、本当に麻帆良が何なのか知らないのかもしれない。そう考えると少女が更に不憫に思えて来る。侵入先を知らない侵入者……、つまらないどころか、ジョークにもならないだろう。

見れば少女は何か言いたそうな顔をしているが、言っても無駄だとも思っただろう。顔に諦めの色を滲ませる。そんな顔を見て

いるとまた胸の奥がちりちりと痛む。

だけど大多数の日常のために、罪悪感など気にせず、目前の少女を倒さなければいけない。だから呼び掛ける。世界の一部である精霊達に、哀れな少女を倒すために。

「光よ、我が声が聞こえるならば、光り輝く射手となりて降り注げ」

次の瞬間には、掴まれていない左手の手の平から光が漏れだし、形を持って少女に襲い掛かる。それを少女は左手で掴んでいた俺の右拳を離し、バックステップをする事で避ける。避けられた事により空を虚しく通り過ぎた光は地面にぶつかりその輝きを消す。

光を避け後ろに下がった少女を視界に入れる。追撃せんと続けざまに詠唱を始めようとしたが、それよりも早く少女は口を開く。

「魔法使いとでも言うのかい？ 笑えない」

どこか納得出来ない表情で言われた言葉は、意味がわからない。魔法使いの存在を知らなかったのか？ だがあの身体能力や戦闘技術は、表の人間が持つようなものではない。だが裏の人間だとしたら、魔法使いの存在を知らない訳がない。考えても考えても納得出来る程の答えは出ない。

「はあ、今度は魔法が飛び交う世界か。やっと平和になったと思っただのに、笑えない」

どついう事だ？ 更に意味がわからなくなった。ネギまの世界には魔法が一般化した世界と、魔法が裏で使われる世界しか存在していないはず。魔法世界で過ごしていたならあんな言葉言わないだろうし、世界的に見ればやっと平和になったなんて言葉言える訳がな

い、魔法を知っている者からすれば常識の事だろう。それに、今度
はって……。不可解な点が多過ぎる。まあ、どうせ後で尋問紛いの
事をするから、その時に聞けば良いか。そう自己完結して、今度こ
そ詠唱を始める。

「『風よ、我が声が聞こえるならば、猛る嵐となりて吹き荒れる』」

そう言った瞬間には風の流れが変わり、次の瞬間には轟々と暴力
的な音をあげる強大な嵐へと風は変化した。その嵐は地を削りなが
ら進み、息を呑む少女を喰らわんと迫る。

「ぐっ！」

嵐は少女が構えた盾と衝突し、少女は呻き声をあげながらも衝撃
に耐える。

嵐は数秒続き、少女は数秒耐え続ける。そして嵐が消えたのを確
認した俺は、土煙の中にいる少女に追撃せんとまた詠唱を始める。

「『雷よ、我が声が聞こえるならば、白き雷となりて敵を喰らえ』」

そして放たれた白き雷を、少女は何歩か後退しながらも盾で防ぐ。
どうやらこのレベルの力では少女を倒す事は出来ないらしい。まあ、
何発も放つたらさすがに倒れるだろうが、どうせ倒さなきゃいけな
いのなら無駄に時間を掛けたくない。大技で決めてやる。

罪悪感を気にしないようにしながら、この戦いに終止符を打つで
あろう一撃を完成させるために口を開く。

「『光よ』」

本気で撃つたのなら山だって簡単に更地に出来る程の一撃だが、

先程の攻撃を防いでいたし、せいぜい気絶で済むだろう。

「『我が声が聞こえるならば』」

まあ、意識不明の重傷にはなるだろうが、それも能力を使えば簡単に治せるし、五体満足ではいられるだろう。

「『天より降りる精霊王の威光となりて』」

少女に重傷を負わせるであろう自分に嫌悪感を覚えるが、大多数のために仕方ないと割り切れないながらも気にしないようにする。

「『愚かな咎人に断罪を下せ』」

そして放たれた圧倒的過ぎる光は、闇夜を金色に照らしながら、半ば呆然とした表情を浮かべた少女に降り注ぐ。

金色の極光は闇夜を喰らい、反応が遅れて無防備な少女すら喰らう。

「っ！」

息を呑んだ。金色の光にその身を喰らわれた少女は、確かに無防備だった。

殺す気はなかったし、ぎりぎり気絶で済む威力になるよう加減もした。だがそれはあくまでも少女がちゃんと防御の姿勢を取れた時の話だ。無防備なままに受けたのならどうなるかなんて簡単にわかる。恐らく彼女は、死ぬ。

「いや、殺されたのか。この俺に」

爺さんから拘束して連れて来るよう頼まれたのに、ちゃんと防
御してくれる。なんて思い込んで、殺してしまった。

「くそっ、何でだよ」

本当に、何でなんだ。さっきまで暴力を振るう事に罪悪感を覚え
て、比類なしの歪みを感じさせる声に、少女の境遇を思い同情を感
じていたと言うのに。

何が大多数の日常のためだ。そのために犠牲になる人が持つ怒り
や憎しみや悲しみは、簡単に人を蝕む毒となる。それを知っていな
がら、俺はこの手で犠牲を作りだし、殺した。

もし、あの少女が生きていたとしても、あの爺さんの事だから殺
しはしないだろうが、最悪拷問を受けてしまう。生きていたにしろ
その先にあるのは拷問。そんな理不尽な事、認めれるはずがない。

英雄はヒーローではない。みんな笑ってハッピーエンドなど作れ
はしない。

昔見た本に書いてあった言葉を思い出す。ああ、確かにその通り
だ。英雄と呼ばれる俺が力を振るおうが、麻帆良に住んでいる人々
の日常を守れようが、その裏には一人の少女の犠牲がある。

「やっぱ慣れねえな。」

何人も犠牲にして、何人も傷付けて、何人も殺してきた。大多数
の日常のためなんて大義名分があるうと、その罪悪感は拭えない。
英雄と呼ばれようがそれは変わらない。きっと罪悪感を感じなくな
ったら、俺はまた(・・・)ただの虐殺者に成り下がってしまう。

そこまで考えて、頭を振るう。今はそんな事より、少女の生死を
確認しなくてはいけない。

金色の極光が消え、土煙が舞う。その先にあるのが物言わぬ冷た

い少女ではないように祈りながら、土煙が晴れるのを待つ。

そして土煙に包まれていた少女の影が徐々に見えはじめ、やがて土煙は晴れ、少女を月光の元に解放する。

視界に入った少女は、所々傷付きながらも、何とかその足で地に立っているような状態だった。

生きていた事に罪悪感が少しだけ薄れていくが、可笑しな事に気付いた。

それは徐々に消えていく傷でも、徐々に修復されていく服でもなく、いや、まあ、それも充分過ぎる程可笑しいんだろうけど

、歴戦の強者が持つ雰囲気には似つかわしくない怯えた表情。見れば身体もがくがくと震えている。

まるで親と離れ闇夜の中で一人だけになった子供のように怯える。そのさまに驚きながらも、もう動く事も困難であろう少女を気絶させるべく一歩を動かさそうとした時。

「殺られる前に、殺ってやる！」

そう言った少女は顔に恐怖を浮かび上がらせながらも、確かにその瞳に狂気を宿していた。

「自己暗示コード4444。合言葉は『毒霧の悪魔』。リミットオーバー（限界突破）・スタート（開始）」

腰に下げていた毒々しいレイピアのような剣を手に握りながら少女は何かを唱えた。そしてゆっくりと剣の切っ先を俺に向ける。

「死ね」

寒気が体中を駆け巡った。脳内に鳴り響く警告を聞いて、無我夢中で右に跳ぶ。すると、先程まで俺がいた場所には少女がいて、剣を振り下ろしている。見れば少女の剣が衝突した地面は綺麗に切断されていて、切断面からは毒々しい紫の煙が立ち上っている。

速い！ 見えなかったぞ、今！

さつきとは比べようがない程に速度を上げた少女は、振り下ろした剣をゆっくりと持ち上げてから、顔を俯かせながら俺の方向にひどく緩徐に顔を向ける

「ひいつ」

無意識の内に小さく悲鳴を上げる。少女は緩慢な動作でこちらに振り向く、俯く事で垂れた前髪のせいで顔が隠れ、かろうじて見える血走った紫紺の瞳は、狂気で爛々と輝いている。漂う紫の障気も助長して、その姿はまるで悪魔のようだった。

そしてその悪魔は、恐怖で引き攣った俺の顔を見て、にたあつと口の端を持ち上げる。

「ねえ、何でそんな顔をするの？」

疑問形の言葉だが、明らかに悪魔はこんな顔をしている訳を知っている。だからあんなに優越感に浸った顔をしているのだろう。

悪魔は緩徐な動きで一歩一歩とこちらに近づく。

「ねえねえ、何にそんなに怯えてるの？」

近付いて来る悪魔に、後退りしながら逃げようとするが、身体が

第一話：突然の展開と理不尽。そして昇華する狂気。（後書き）

可笑しな点がどこにあるかわかりました？ はい、全部ですね。すみません。

ええと、『気弾に似てはいるが気の類は感じなかった。』って文がありましたよね？ 何でモンハンの世界にいたのに気を知っているのか疑問に思う方もいると思いますが、この作品ではモンハンの世界にも気のある設定なのです。

独自解釈と捏造ですが、鬼人化や鬼人切り、大剣とハンマーの溜め攻撃は、気を武器に流すことで一時的に威力と強度を上げていると思います。それなら応用で身体強化とか気を飛ばす事も出来るかな？ と思いましたが……。まあ、まだまだ独自解釈と捏造設定はあるんですが、それはまた今度に説明させてもらいます。

最後に、こんな駄文を読んで下さってありがとうございます！

第二話・確認と質問と交渉（脅迫）前編（前書き）

相変わらず支離滅裂ですが、それでも良い方は読んで下さ
い。

それと、前以て言って置きますが今回は物凄く酷いですよ？ 色
々な意味で。あれ？ いつもの事か……？

第二話：確認と質問と交渉（脅迫）前編

「拍子抜けだよ。リミットオーバー（限界突破）まで使ったのに」

そう言っつてリミットオーバー（限界突破）を止める。リミットオーバー（限界突破）と言うのは、生物全てが持つであろう防衛本能が無意識下に身体に掛けた限界を、意図的に突破する事で身体能力を何倍にもする戦闘技法の事だ。まあ、長時間使用すると体中の血管が干切れたり、筋肉がはち切れたり、その他にも色々制限がある使い勝手が悪いものだが、短時間ならば副作用を気にせずの使用出来る。要は使い所を考えればそれなりに使える戦闘技法という事だ。……僕がさっきやったのは通常のリミットオーバー（限界突破）とは少し違うんだけどね。正確には自己暗示によって大きくさせた事で、狂気へと昇華した恐怖で精神と理性を蝕み、一時的に本能だけに忠実な狂人となる。詰まりは頭のネジを何十本も飛ばす事で肉体の限界を気にしない狂人になる。通常のリミットオーバー（限界突破）よりそうやる方が個人的には楽だから僕はそうやっている。メリットはどっちでも変わらないし、デメリットも狂う狂わないの違いしかない。それならより使いやすい方法を選ぶ。

「ふう」

息を吐きながら自己暗示で狂気へと昇華した恐怖心を心の奥底に沈めていく。途端に理性を壊した事で感じなくなっていた痛みが体中に駆け抜ける。

「ぐっ……」

その痛みを沈めるために体中に気を流し自然治癒力を高める。僕

は回復のエキスパートではないから、瞬時に傷が癒える訳でもないが、やらないよりはましだろう。

「はあ……、何で僕がこんな目に遭わなきゃいけないんだ」

溜息を付きながら、踏ん付けていた金髪金目の糞野郎から足を離す。ふと糞野郎を見遣ると、トキシックフアングで右脚を貫かれて地面に縫い付けられている。まあ、僕がやったただけどさ。

「うっわ、痛そー」

見れば糞野郎の右脚からこれでもかと言う程に血が溢れ出ている。もし自分が同じ事をされたらと考えたらぞつとする。だけど、まあ

「ざまあみる。僕に傷を付けた罰だ」

そう言つて口の端を吊り上げる。僕に歯向かうだけならまだしも、こんな華麗で可憐な美少女に傷を付けたんだ。それ相応の報復は当然の事だ。そう思いながら糞野郎を見ると、可笑しな事に気付く。

「ん？ 何で生きているんだ？」

頭を踏まれて脚を貫かれただけなら生きていても可笑しくはない。だが脚を貫いたトキシックフアングは強力な、それこそ龍にだって効く程の毒を刃に秘めている。それに掠っただけでも、対抗力が低い生き物なら殺せる。だが目の糞野郎は脚を貫かれたにもかかわらず、息をしている。まあ、苦しそうにはしてはいるが、トキシックフアングの毒をまともに受けて苦しむだけなんて可笑しい。それが大型のモンスターなら何等不思議ではないんだが、どう見てもこの糞野郎は人間だ。

いや、でも、この世界には『真祖の吸血鬼』なんてのがいたんだっけ？ 不老不死であり人間を遙かに越える力を保有するくせに、見た目は人間だから区別が付きにくい存在が。

「じゃあ、この糞野郎は真祖の吸血鬼？」

ふと出た疑問を解消するべく、糞野郎の脚に刺さったトキシックフアングの柄を掴む。

「真祖の吸血鬼なら簡単に傷が塞がるはずだったよね」

じゃあ、トキシックフアングを抜いたら直ぐに傷が塞がるはずだ。これで真祖の吸血鬼が確かめられる。

「よっ、と」

軽い掛け声とともにトキシックフアングを抜くが、血が吹き出るだけで傷は塞がらない。

「うーん……、真祖の吸血鬼ではないのか。じゃあ、何なんだろう？」

まあ、考えても仕方ないか。そう自己完結して血で濡れたトキシックフアングを振るう事で血を落とし、腰に下げる。そしてこれらの事を考える。

「まずは家と金が欲しいな」

無一文な上にここは見知らぬ世界と言っても過言ではない場所だ。当然知り合いなんていない訳がない。そんな状況で家を手に入れるなんて普通じゃ不可能だ。金だってそうだろう。だが、それは普通で

はの話しだ。普通ではないやり方なら、簡単に手に入れる事が出来る。

「じゃあ、先ずはあそこを探さなきゃね」

そう言ってさっきの戦闘で落とした盾を拾い腰に下げる。そしてとある人物に会うべく足を動かす。

「待ってるよ、ぬらりひょん」

これから行うのは外道の諸行。だからと言って良心が痛むなんて事はない。

「伊達に『毒霧の悪魔』なんて言われてないからね」

僕がギルドから貰った厨二臭い称号『毒霧の悪魔』。まあ、的を得ているし気に入ってるから文句はないんだけどね。

不様に地面に這い蹲る糞野郎の左足を掴んで引きずる。これから行う事にはこいつが必要不可欠だから、面倒臭くても連れて行かないといけない。

両足に力を溜め、足裏に気を送る。それが最高潮に至った瞬間に、地面を思いつ切り蹴る。それと同時に足裏の気を爆発させる。次の瞬間には、周りの光景など置き去りにして僕の身体は加速する。

それを何度も繰り返しながら、僕に左足を掴まれて引きずり回されてる不様な青年の事を考える。

先程の戦闘で見せた糞野郎が放った極光は、絶対的強者だけが放つ事を許される圧倒的な暴力を孕んでいた。恐らくは手加減でもしていたのであろう。そうでなければ自己暗示する暇すらなく死んでいた、そう思える程にあの光は強大だった。そこに至るまで幾度も死線を潜り抜ける過程が必要だ。だがあいつは、僕が放った狂気に

簡単に呑まれた。それは可笑しい事だろう。

絶対的強者なら狂気に揺るぎもせず君臨し続ける。歴戦の強者なら呑まれかけながらも立ち向かう。だが、あの糞野郎はどちらにも当て嵌まらなかった。

……恐らくだが、最初から強大な力を持って転生したんだろう。過程など経験せずに、強者になる結果だけを得た。そう考えるのが妥当だ。そして最初から圧倒的な力を持っていたから、そこに至る過程に必ずある死線を潜り抜ける数が極端に少なく、結果強大な力を持つてはいるが心はまだまだ脆弱なまま。なるほど、そう考えるとあんなに簡単に狂気に呑まれた事は何等可笑しくはない。むしろそれが普通だ。脆弱な精神に狂気を向けられたのなら、理性が崩壊しても可笑しくはないしね。

「それにしても……」

一度足を止めて周囲を見してみる。その際の急な停止に、左手で掴んでいた糞野郎は不自然な体制になったが無視だ無視。

「……ど……ど……」

迷った。いや、まあ、元から世界規模の迷子なだけだ。そこは気にしちゃ負けだよ？ 麻帆良の広大な土地を風潰しに回る事で目的の場所を探す予定だったんだけど、物凄く効率が悪い。色んな土地で狩りをしてきた経験で、土地勘はあると思ってたんだけど。どうにもそれらしい場所は見つからずに、何故か今は周囲が木で生い茂った場所にいる。恐らく森の中だろう。何時の間にこんな場所に……、恐るべし魔帆良！（誤字にあらす）

「ハンターが迷子になるって？ 笑えない……」

さつきから引きずられっぱなしでぼろぼろになった糞野郎は兎も角。こんな美麗で綺麗な美少女をこんな森に迷い込ませるとは……魔帆良（誤字にあらず）には良心が存在しないのか！？ いや、まあ、僕が言えるような事じゃないんだけどね。

「うーん……。風潰しに探し回ってたら夜が明けちゃうだろうし。どうしよう……。」

やっぱり風潰しに探すしかないのかな？ でも面倒臭いし時間が掛かるし。ん？ でも、あの方法なら簡単に見付かるかな？

「試す価値はあるよね」

そう言っただけで左手で掴んでいた糞野郎の左足を離す。そしてさつきと同じように足に力と気を溜める。それが最高潮に達した時に地面を蹴り、気を爆発させる。真上に跳んで、ある程度高い所に来たら落下する前に周囲を見渡す。

「邪気眼・発動！」

まあ、只単に気を目に集中させる事で視力を強化しただけなんだけどさ。いつもはこんな事言わないんだよ。けど何故か言わなきゃいけない気がして……。兎も角、高い位置から強化した視力で周りを見渡せば目的の場所がどこにあるかわかるかな？ なんて思っただけでみたんだけど、結果だけ言うとなんか分からなかった。仕方ないよね？ 建物が多過ぎてどれがどれかわからないんだよ。そんな事を考えながら地面に着地する。

さて、本格的に困ったぞ。やっぱり風潰しに探すしかないのか？ だけどそれじゃあ朝になっちゃうし……。

あーでもないこーでもないと考えていると、視界の端に地面に俯

せる糞野郎が入った。それを見て、思い付く。

はあ……、何で直ぐに思い付かなかつたんだ？ 最初からこの方法をしていたら無駄に労力を使わずに済んだのに。

そう思い、少しの自己嫌悪をしながら糞野郎に近付く。

「おい、起きろー。もう朝だよー」

いや、まだ朝じゃないんだけどね。何て言えばいいだろう……？
リ？

糞野郎の頬をぺちぺちと叩いて起こそうとするが、起きる気配はない。

この糞野郎……、こんなに素晴らしい素敵な美少女の愛らしい声に起きるよう促されてるのに、阿呆面下げて寝続けるとはどうゆう了見だ。いや、気絶させた張本人が言える事じゃないけどさ。

「うう、ん……？」

しばらくぺちぺちと頬を叩き続けていると、呻きながら糞野郎が目を開けたので、頬を叩くのをやめ、飛びっ切り爽やかな笑顔をしながら口を開く。

「ようやく起きたのか糞野郎。あまりにも起きるのが遅すぎたから、体中にこいつを突き刺した痛みで起こしてやるうかと思っただよ」

そう言っただ腰に下げていたトキシックファンクを手にとって、糞野郎に見せる。すると糞野郎は寝ぼけた顔を恐怖に歪んだ顔に変えて、悲鳴のような声をあげる。

「なっ、何でお前がここにいるんだよ！？」

「何でって言われても返事に困るんだけど……」

僕が君をここまで運んだから。とでも言えば良いのかな？ いやいやそれは可笑しい気がするし……。まあ、返事をしてやる義理もないし、真剣に考える必要もないよね。

「僕が何でここにいいのか、なんて疑問はどうでも良いから、ちょっと質問に答えてくれないかな？」

そう言いながら手に持ったトキシックファンクを糞野郎に見せる。疑問形で言った言葉だが実際は凶器での脅しだ。それに糞野郎は顔を青褪めさせて、瞳に恐怖を浮かべながらも、僕を鋭い眼光で睨んでいる。拒否の意思がありありと伝わっているが、当然の事だろう。幾ら心が脆くても、この糞野郎は敵対勢力の一人かもしれない僕に、安々と情報を教える馬鹿ではないはずだ。だが、まあ、教えてくれないとなると物凄く困るので、麻帆良に来た経緯を話して警戒を少しでも解く事にする。

「質問の前に、ここに来た経緯を話そうと思う。びっくりしないでね？」 『転生者』さん」

そう言っただけで、糞野郎は顔を驚愕に染めて声をあげる。

「っ！？ 何でその事を知ってたんだよ！？」

この反応を見るに、僕の推測はあながち間違いではないだろう。まあ、時間を無駄にする気はないので、糞野郎の疑問に軽く答える。そうでもしないと延々と疑問を口にし続けると思ったからだ。

「それは僕も転生者の一人で、原作を知っているからだよ」

そう言っただと、糞野郎は正に茫然自失と言ったような顔をす
るが、話が進まないから見なかつた事にする。

「説明が面倒だから簡略して話すと、僕はネギまではなくモンハン
の世界に転生したが、ある日起きたらここにいたって訳。理解した
？」

自分で言うのもあれだけど物凄く適当だと思う。まあ、意味は伝
わるし、こんなにも適当でも良いよね。

「あー、つまりあんたは気付いたら、世界を越えて麻帆良にいたっ
て事か？」

僕が言った適当過ぎる説明を聞いて、質問してくる糞野郎。未だ
茫然自失としているが、何とか情報を整理しようとしているみたい
だ。

「その通りだよ。それで、茫然としたり現状把握したりしていたら、
君が現れて僕に襲い掛かって来た訳だ」

そう言うと糞野郎は、先程の恐怖や疑問や警戒を忘れたように表
情を変える。

「すまん！ 謝って許される事じゃねえのはわかっているけど、そ
れでも謝らせてくれ！」

侵入者だと誤解して攻撃した事を謝っているのだろう。さっきま
でとは違って、罪悪感を感じているようだ。

「まあ、確かに許しはしないけどさ。それでも侵入者と誤解されても可笑しくなかったし、僕だって君を殺そうとしたんだ。あの場で君の判断は当然の事だし、謝られると気分が悪くなる」

「ってか普通の人間なら確実に死んでいたし、それなのに謝られると少しだけ罪悪感が……。ん？　なら何で許してやらないんだって？　それとこれとは話が別、幾ら罪悪感を感じようが、女神すら足元に及ばない程の美少女である僕を傷付けたんだ。自分勝手だと自覚はしているが、その事を許す気は毛頭ない。」

「だけど、ただの誤解で俺はあんたを傷付けたんだ！　俺の判断が当然だとしても、俺はそれが許せねえ！」

「……こんな奴を何て言うんだっけ？　お人好し？　自分が殺されかけたって言うのに、何でそんな事を言えるんだろ？　まあ、このままだと話が先に進まないだろうから、強引だけど話を変えよう。」

「謝罪は後で何度でも聞いてあげるから、幾つか質問に答えて欲しいんだけどさ？」

「ああ！　そういえば聞きたい事があつたんだよな？　俺に答えられる事なら何でも答えるぜ」

「さっきまでの警戒は何処へやら。物凄く協力的になった糞野郎に視線を向けて口を開く。」

「これは質問じゃなくて確認なんだけど、この世界はネギまの世界で、ここは麻帆良学園で合ってるよね？」

「その通りなんだけどよ。少し原作と違う所もあるんだよな」

「違う所って、具体的には？」

「俺とあんたの存在は勿論だが、他にも原作にはいなかった人物が何人かいるんだ」

まあ、別段気にする程でもないだろうし、他の事を優先しよう。

「これも確認なんだけど、君は普通の人間ではないよね？」

嵐を出したり雷を出したりしてる時点で普通じゃあないんだけど、その事について言っている訳ではない。

「どづいう意味で言ってるんだ？」

予想通りの返事を聞いて、前以て考えていた言葉を言う。

「君の右脚に突き刺した剣、トキシックファンゲって言うんだけどさ、龍種にだって効く強烈な毒を切断時に流す武器なんだ」そこまで言った所で糞野郎はあの時の痛みや恐怖を思い出したのか、顔色を真っ青に変えてがくがくと震える。そして僕は、そんな事気にせずに続きを口にする。

「耐性が低い生物なら掠っただけでもお陀仏。人間も例外ではないよ？ そんな武器に足を貫かれて、君は死ななかつた。って事は、普通の人間ではないって事でしょ？」

そう言っていると、糞野郎は震えを必死に抑えながら、口を開く。

「あつ、ああ。転生の時に自称神の変人に会ってな。その時に精霊

王の能力の一部である『精霊支配』って言う能力を貰って、それに伴って魂の格が上がったらしくて、不老不死に近い肉体になったんだ。まあ、真祖の吸血鬼程自然治癒力が高い訳でもないし。塵一つ残さずに燃やされたり、体中バラバラに切り刻まれたら死ぬらしいけど……」

そう言われて気付く。先程の戦闘や引きずった事で出来た傷が、何時の間にか消えている。まあ、服装はぼろぼろだけどね。

恐らく、魂の格が上がったってのは人間からその精霊王に近くなっただけだ。

「ってかそれ何てテンプレ展開だよ。自称神の変人については、そんな奴もいるんだな。程度しか思わなかった。」

「じゃあ次の質問。その『精霊支配』ってどんな能力なんだい？」

「世界中に存在する精霊達に言葉を媒体にして呼び掛ける事で、神秘を起こせる能力だ」

「こつこつとチートって言うんだろ。完全ではないけど不老不死の身体、精霊をノーリスクで使役する力。充分チートと言える力だ。」

恐らくだが、半ば不老不死だから死の気配に鈍感に生きていたんだろ。しかも『精霊支配』なんて強力な能力を最初から持っていたから、死の気配が近付いて来る事もなかったのだから。もしあったとしても、死への鈍感さ故に大した恐怖も感じてなかったかもしれない。そんな奴が、圧倒的な狂気を、死の気配を、その身で受け感じたんだ。あんな状態になるのが普通だ。

まあ、今はそんな事より最後の質問を優先しよう。

「最後の質問。これが一番聞きたい事なんだけど。学園長室はどこ

にあるの？」

僕が家と金を得るには学園長室に行く事が必須だ。いや、まあ、学園長に会えば良いんだけどさ。前世で見た二次創作なんかだと、こういう場合は学園長室にいると相場が決まっているでしょ？

「今回の事を報告しなきゃいけないから、今から学園長室に行くんだけどよ。一緒に来るか？」

理想通りの返事に、口端が持ち上がってしまう。こいつが相当なお人好しである事は今までの会話でわかっていた事だ。きっと今だって罪悪感に苛まれてるんだろう。しかもさっきの戦闘で心の奥底、それこそ本能に刻まれた僕への恐怖も相俟って、僕の機嫌を悪くしないように、自分が思う最善の判断を下し続けている。

そんな家畜同然の糞野郎に了承の言葉を返す。

「そうするよ」

「じゃあ、そのままじつとしてるよ」

そう言った糞野郎の言葉に従い動かないでいる。きつとこいつがさっき現れた時と同じ事でもして学園長室に移動するんだろう。そいつの何て言うんだっけ？ 転移？

「『風よ、我が声が聞こえるならば、汝等で我々を包み込み、遙か遠い彼方まで飛ばしてみろ』」

そう青年が口ずさむと、僕と糞野郎の周囲に風が吹く。そして一瞬視界がぶれると、目の前に人間離れた後頭部を持った、顎髭が長すぎる爺がいた。その他にも、眼鏡をかけた渋い男性と金髪青目

の幼女がいる。上から近衛、近右衛門、タカミチ・T・高畑、エヴァンジェリン・A・Kマクダウェルだろう。

「やあぬらりひょん。少し頼みたい事があるんだけど、勿論聞いてくれるよね?」

さて、楽しい愉しい交渉（脅迫）の始まりだ。

第二話：確認と質問と交渉（脅迫）前編（後書き）

どうも！ 【混沌脳】と【厨二脳】と言うレアスキルを持った霧
啞です。

第2話を書いていたら何時の間にか。キリアがどんどん自意識過
剰自己中心的鬼畜外道な捻くれ者に……。

しかも『金色の精霊王』なんて大層な通り名を持つラジルはどん
どんへたれキャラに……。

や、でも、キリアがこうなったのにも訳があるんですよ？ この
先ラジルがかっこよく思えてくる展開だってあるんですよ？ 本当
ですよ？

それと、第一話のキリアとラジルの戦闘を見て、仮にも英雄の一
人で、『金色の精霊王』なんて呼ばれてるラジルが、あんな状態に
なった事に違和感を覚える方もいると思うので、例え話を。

モンスターハンターを改造データでやり続けた少年Aと。何の改
造もせずに自分の力でやり続けた少女B。どちらが本当に狩りが上
手いかは言わずもがなですよ？ しかも少年Aは改造せずにプレ
イする事不安とかその他諸々に正常な判断を出来ないでいる。対
して少女Bはいつも通りで何等変わらないプレイ。こうなると上手
い上手くない以前の問題になります。

ラジルが少年Aだとするとキリアは少女Bです。上手く伝わった
かな？ まあ、こんな事言つと最強チート主人公の大半を否定して
いるようにも聞こえるかと思いますが。他の作者様の作品を否定してい
る訳ではないので悪しからず。

まあ、何はともあれ自分は退散します。それではまた次回に！

第三話・確認と質問と交渉（後編）（前書き）

相変わらずの駄文ですいません（殴）

第三話：確認と質問と交渉（後編）

「やあぬらりひょん。少し頼みたい事があるんだけど、勿論聞いてくれるよね？」

ぬらりひょん達は糞野郎を見て一瞬驚いたが、僕の言葉を聞いて顔を警戒のそれに変える。まあ、疑問と驚愕は隠し切れてないし、高畑は茫然としているし、マクダウエルは未だ驚愕した表情だけだね。

そしてぬらりひょんは、僕に鋭い視線を向けながら口を開く。

「お主……、何者じゃ？ 何の目的でここに来た？」

そう問うぬらりひょんは、老いぼれとは思えない程の殺気を声に宿している。だからと言って怯んだりはいないけどさ。

「ああ、そういえば自己紹介を忘れていたね」

要求だけを突き付けて、頼まれる側の質問に答えないのは失礼だろう。それ以前に、名前すら知らない奴の要求など一蹴するのが当たり前だ。そう思って口を開いたんだけど

「ラジル！」

驚愕から立ち直ったマクダウエルの声に遮られてしまう。視線の先を見るに、どうやらラジルと言うのはあの糞野郎らしい。まあ、名前を知った所で、糞野郎は糞野郎のままだけだね。

「おいラジル！ 大丈夫なのか！？」

そう言ったのは金髪青目の美少女、マクダウエルだ。糞野郎に近付きながら、安否を確認している。傷が癒えたとは言え、糞野郎の服装はぼろぼろだし、右足の部分は血で真っ赤だ。心配するのも無理ないと思う。

まあ、今はそんな事置いといて、さっさと話を進めよう。そう思つて口を開こうとして、先に糞野郎が言葉を放ったせいで、またしても言いそびれる。

「ああ、もう大丈夫だぜ」

「大丈夫な訳あるか！ 顔が真っ青だぞ!？」

天使ですら神を拝むのを止めて視姦してしまう程の美少女である僕の、綺麗過ぎてつい崇拜してしまう美声を二度も遮るとは何事だ。まあ、物凄く心配しているように見えるから、さすがの僕でも空気を読んで黙る事にする。今直ぐに話を進めなきゃいけないって訳でもないし、マクダウエルはまだ僕に害を与えてはいないからね。基本僕は、自分に害を与えていない奴には人並みに優しい……と自分では思っている。まあ、あくまでも人並みだし、必要なら幾らでも最低な人間になる。

害を与えた奴に関しては……、糞野郎との会話を見ればわかるよね？

「ちょっと調子が悪いみたいだな。まあ、直ぐに元気になるって」

「嘘だつ！」

糞野郎の言葉を聞いて、どこぞの鉈女みたいに叫ぶマクダウエル。確かに、調子が悪いようには見えない。どちらかと言うと、ナニカ

に怯えているように見える。って言うか、僕に怯えてるんだろっね。まあ、ちよつと前よりはマシで、震える事はないけど、顔色が変わる程度にはさっきの戦闘が尾を引いているんだろっ。

「嘘じゃねえよ。本当に大丈夫だから」

それにしても、どうしてこつも怯えを否定しているのだろう。一瞬疑問に思ったが、糞野郎には糞野郎なりの考えがあるのだろうと自己完結する。

「っ……。後で詳しく聞かせてもらっぞ」

少し、いや、かなり不服そうにそう言ったマクダウエル。急ぐ必要はないのだけど、だからと言って何時までもぐだぐだとする気もないので、さっさと話を進めようと口を開く。

「はじめまして、僕の名前はキリア・ラウクルス」

取り敢えずまずは自己紹介をする。別に名前ぐらい教えても何のリスクもないし、って言うかこの世界に僕は存在していなかったのだから、名前から身元を調べようとしても何もわからない。

一瞬あの厨二臭い称号も言おうと思いはしたが、この世界に僕が来たのはついさっきだから、知名度なんて存在すらしないだろっと思っって言っのを止めた。

「僕の名前は近衛近右衛門じゃ。関東魔法協会の長であり、ここ麻帆良学園の学園長をしておる」

僕を鋭い眼光で射ぬきながらそう返すぬらりひょん。さて、軽い自己紹介も終わったし、ようやく交渉の始まりだ。

「さっきの質問の答えは、前者はちよつと特殊な超絶美少女。後者はどちら（・・・）の事を言っているのかわからないから、答え辛いんだけど？」

実際はちよつとではなく、物凄く特殊なだけだね。どちら（・・・）と言うのは、麻帆良学園に来た目的を聞いているのか、学園長室に来た目的を聞いているのか、って事だ。

「……ふむ、ちよつと特殊のう。その身に巣くう狂気は、ちよつと特殊なだけで自我を保てる程度ではないじゃろに。後者に就いては、どちらもと答えておくぞい」

どうやら、ちよつと特殊なだけとは思っていないらしい。その証拠に疑惑の視線を僕に向けている。それにしても、さすがは一組織を束ねる立場にいる人物だとも言えば良いのか、会って一時間も経っていないのに、僕の狂気に気付いた。戦闘以外では基本的に抑えているんだけど、それでも気付いた洞察力には感心してしまう。

「さあ？ それを決めるのは僕（一個人）ではなく大多数だろう？ 質問の答えは、麻帆良に来たのは全くの事故、だから目的はないよ。学園長室に来たのは、帰る手段がわからないから、手段が見付かるまでは麻帆良に居座らせてもらおうと思っただけ」

思った事を口にする。殺人鬼（一個人）が人殺しは楽しい遊びだと声を張り上げてても、周囲（大多数）がそれを否定すれば人殺しは楽しい遊びではなくなる。それと同じで、僕が自分をちよつと特殊なだけだと主張しても、ぬらりひょんが僕をちよつと特殊なだけではないと主張しても、結局はその他大勢の主張でどちらが正しいか決まる。まあ、僕は自分の事をちよつと特殊なだけとは思ってない

けど、口で言うだけなら誰にでも出来るし。こういう軽口の叩き合いは交渉の場に付き物だ。

それと、モンハンの世界に戻る方法がないと断言するには、まだ早いと思いわからないと言ったが、恐らく今はそんな技術はないだろう。原作でもなかったし。

「確かに、それもそうじゃな。それにしても、ふむ……。」

僕の考えに同意したぬらりひょんは、そのまま何かを考え始める。まあ、僕をどうするかを考えているんだろっけどさ。

「真偽はともかくとしても、儂はお主を麻帆良に居座らせるのは断固として反対じゃ」

予想通り過ぎる答えに、心の中でほくそ笑みながら、一応理由を聞いておく。

「理由を聞いてもいいかな？」

「どうせ見当ぐらいは付いているじゃろっに」

そう言った学園長の言葉に、少し驚いた。どうやら僕が思っていた以上の洞察力を持っていたようだ。

「確認ぐらいしても罰は当たらないでしょう？」

「それもそうじゃな。幾つか理由があるのじゃが、特に大きい理由を挙げるとするかのおう。まあ、至極単純なんじゃが、麻帆良にお主と言っ不確定要素を置きたくない。これが理由じゃ」

またしても予想通りだ。今の正確な時期はわからないが、高畑とマクダウエルがいるという事は、近衛木乃香がいる可能性も低くはないだろう。もしいかなかったとしても、『神木・蟠桃』や図書館島、麻帆良に住まう人々などを守るために、不確定要素である僕を拒絶すると考えるのは難しい事ではない。

まあ、ようやくこれで交渉（脅迫）のために必要な事は聞いた。後はひたすらお話し（脅す）するだけ。

「なるほどなるほど。尤もな理由だね」

その口に出して言うと同時に、殺気を放出する。

「ッ！」

先程まで茫然としていた高畑が、殺気に反応してなのか僕に居合拳を放つ。それを僕は拳を伸ばせば届く距離まで近付いた瞬間に、放たれた拳圧とでも言うべきものに自らの拳をぶつける事で相殺する。

「危ないな！。命を奪われる瞬間でも、つい見惚れてしまうような美少女に向かって拳を振るう事が、麻帆良では常識なの？」

そんな常識の学園ある訳ないんだけどね。もしあったとしたら、きっと犯罪行為が多発しているんだろう。

「まあ、どうでもいいよね」

うん、至極どうでもいい。今はぬらりひょんを脅迫する事の方が優先順位が高いし。

「ねえ、ぬらりひょん。不確定要素は置きたくないんだよね？」

そう問うとぬらりひょんは、不思議そうな顔で返事をしてくる。

「さっき言ったじゃろうに。置きたくないに決まっておろう」

「じゃあ、例えばの話だけど、もしもその不確定要素が、要求を断るならここに住む人々を皆殺しに言ったら、どうする？」

僕がそう言った瞬間、空気が凍った。いや、まあ、物理的な意味ではなくて、比喻表現なんだけどね。

「……何を言いたいのじゃ？」

「だーから、もしも僕が要求を断るなら麻帆良に住む人々を皆殺しに言ったとして、それでも拒絶するのかい？」

ぬらりひょん達は僕に殺気を孕んだ視線を向けている。そして僕は、そんな事にせず言葉が続ける。

「もしそんな展開になったら、拒絶する選択はお勧め出来ないよ。守るために遠ざけたはずなのに、その結果守らなきゃいけない対象が皆殺しにされる。本末転倒も甚だしい結末だよね」

僕の言葉を聞いてなのか、ぬらりひょん達の表情がどんどん険しくなっていく。対して僕は、無意識に吊り上がる口端を抑える事が出来ずに、嗤う。きっと僕は今、悪魔のような笑みを顔に浮かばせているだろう。

「さて、それじゃあもう一度聞くよ。僕を麻帆良に滞在させる気は

ないかな？」

より一層強烈な殺気を放って、暗に了承せねば皆殺しだと示しながら言う。それに対してぬらりひよんは、苦渋な顔をしながら口を開く。

「ぬう、仕方あるまい……か。」

そう言ったぬらりひよんに、高畑が荒々しい声を挙げる。

「了承するのですかっ！？ 学園長！」

非難を含んだ声に、ぬらりひよんは怒鳴り返す。

「止むを得んじやろうが！ こうでもしないと麻帆良が血の海になるのじゃぞっ!？」

「ぐ、う……」

その言葉を聞いて押し黙る高畑。計画通りとでも言えば良いのか、麻帆良の住人を人質に取った事で断る事が出来なくなったぬらりひよん。その姿を見てより一層口端を吊り上げる。

「くくく……」。了承されたと見て問題ないよね？」

口から溢れる唾い声がどうにも止まらない。

一応のため確認はする。

「そうじゃ。じゃが、今の麻帆良に空いている部屋はないぞ？ 今日は野宿してもらおう事になるぞ？」

ふむ、野宿か。ハンター生活で慣れてるし、問題ないか。そう思
い、口を開こうとして

「爺さん、俺から提案があるんだが」

糞野郎が先に言葉を放ったせいで言いそびれる。二度ある事は三
度あると言っけど、正にその通りだと思う。

「ほう、申してみい」

「俺が住む事になる家に住ませるってのはどうだ？ エヴァの家が
近くにあるから、何かあっても直ぐに気付けるだろ？」

「ふむ、それもそうじゃが、それだとラジル君はどこに住むのじゃ
？」

「あー、エヴァの家に居候でもする」

「なるほど、ではそれで行く事にしようかの。二人共それで良いか
の？」

会話から察するに、どうやら

僕は糞野郎が住む予定だった家に住む事になるらしい。マクダウエ
ルの家が近くにあるらしいし、そこに糞野郎が居候するらしいから、
万が一の事態にも迅速に対応出来るとでも考えたのだろう。糞野郎
にしては良い案を出したようだ。断る理由もないし、これで良いだ
ろうと思いい口を開く。

「僕はそれで構わないよ」

「私もそれで構わない」

さて、これで当分の生活はぬらりひよんが保障してくれるだろう。麻帆良に住む守るべき人々を人質に取られたんだ。立っての行動はしないはず。

「悪魔め……」

ふと小さな声が聞こえた。その方向に顔を向けると、苦虫を何百匹も噛み潰したような顔をしている高畑が視界に入る。敵意を孕んだ視線で僕を睨んでいる。

「確かに僕は悪魔のような奴だろうね」

自覚はしている。だからと言ってこの性格を直しはしないけどさ。

第三話：確認と質問と交渉（後編）（後書き）

くっ、キリアが爆走（迷走）を止めてくれない……。
こんな奴が主人公の小説はなかないないと断言出来ます（笑）。
ってかこんな主人公っでありだと思えますか？ww
そして今回も色々と酷い……。まあ、もう書く事がないので今回はこれで退散します。

次回『第？話：確認と質問と交渉（脅迫）の裏側』
程好く期待しながら待って下さい！

第2・5〜3・5話：確認と質問と交渉（脅迫）の裏側（前書き）

今回は第2話をラジルの視点で、第三話をぬらりひょん（学園長）の視点で書いたものです。

別に読まなくても良かったりしますww。そんな訳で始まりまーす

第2・5〜3・5話：確認と質問と交渉（脅迫）の裏側

Side ラジル

微睡みに沈んでいた意識が、軽く頬を叩かれる感覚に気付き、浮上する。

「うう、ん……？」

拭えない怠情感のせいなのか、上手く頭は働かず、視界はぼやける。

確か俺は侵入者を迎撃、若しくは捕縛するために世界樹広場に転移して……。それから……。

どうにもそこまでしか覚えていない。いや、思い出せないのかも。しれない。思い出そうとすればする程不快感が大きくなっていく。それでも思い出そうとして

「ようやく起きたのか糞野郎。あまりにも起きるのが遅すぎたから、体中にこいつを突き刺した痛みで起こしてやるうかと思ったよ」

頭上から聞こえた声に一度思考を中断して、その方向に視線を向けようとする。何故か脳内に鳴り響く、止める、と言う警告を無視して顔を上げてみれば、並の男なら確実に惚れてしまっただろうと思える程の笑顔でこちらを見下ろしている、所謂美少女がいた。

ってか、目が笑ってねえし、何この娘コワイ。なんて何時もだったら思っていたかもしれないが、そんな事よりもようやく思い出した先程の出来事と、物騒な事を言いながら毒々しい剣をちらちらとこちらに見せてくる目が笑っていない少女を見て、そんな事を思う余裕なんかなくなった。

「なっ、何でお前がここにいるんだよ!？」

何とか喉から絞り出した声は、まるで悲鳴のようだと自分でも思っ
てしまう程に情けなかった。

「何でって言われても返事に困るんだけど……」

そう言った少女は少し考える仕草を見せたが、直ぐに何でもなか
つたでも言うような顔になり、口を開いた。

「僕が何でここにいるのか、なんて疑問はどうでもいいから、ちょ
つと質問に答えてくれないかい？」

そう言った少女は、またしても剣をちらちらと見せてくる。俺の
右脚を貫いた剣を見て、つい先程感じた恐怖を思い出し身体が竦ん
でしまう。それでも、何者かもわからない奴に情報を渡す訳にはい
かないと思い、精一杯睨む事で拒絶の意を示す。

「質問の前に、ここに来た経緯を話そうと思う。びっくりしないで
ね? 『転生者』さん」

少女から放たれた言葉に驚愕する。無意識に疑問が口から出てし
まうのは当然の事だろう。

「っ!? 何でその事を知ってたんだよ!？」

「それは僕も転生者の一人で、原作を知っているからだよ」

少女が出した答えは、疑問を解消出来るし納得も出来る。だが、

それでも、茫然自失としてしまうのは仕方ない事だろう。少女はそんな俺の顔を一目見てから、何事もなかったかのように話を続ける。

「説明が面倒だから簡略して話すと、僕はネギまでではなくモンハンの世界に転生したが、ある日起きたらここにいたって訳。理解した？」

またしても少女の言葉に驚愕する。だがそれでも、何とか情報を整理しようと頭を働かせる。そして、確認のために口を開く。

「あー、つまりあなたは気付いたら、世界を越えて麻帆良にいたって事か？」

そう口にしてある事に気付く。気付いたら麻帆良にいたって事は、被害者と言っても可笑しくない少女を、全くの誤解で俺が傷付けたって事だよな？

「その通りだよ。それで、茫然としたり現状把握したりしていたら、君が現れて僕に襲い掛かって来たって訳だ」

その言葉を聞いて、恐怖や警戒や疑問が頭から吹っ飛び、その代わりに罪悪感が出て来る。そして気付いたら、口が勝手に動いていた。

「すまん！ 謝って許される事じゃねえのはわかっているけど、それでも謝らせてくれ！」

罪悪感に身を任せるままに言った謝罪を聞き、どこか不満そうな顔をした少女。

「まあ、確かに許しはしないけどさ。それでも侵入者と誤解されても可笑しくなかったし、僕だって君を殺そうとしたんだ。あの場で君の判断は当然の事だし、謝られると気分が悪くなる」

居心地が悪そうにそう言った少女の言葉を聞き、安心する。もしこれで、許すなどと言われたら罪悪感で自殺したくなる。まあ、しないけど、それぐらいの罪悪感を感じてしまう。それがとても怖かった。

そして、俺の行動を当然な事だと言い切った少女に視線を向けて口を開く。

「だけど！ ただの誤解で俺はあんたを傷付けたんだ！ 俺の判断が当然だとしても、俺はそれが許せねえ！」

今言った事は偽り無き本心だ。どんな大義名分があるうと、それが当然の事だろうと、誤解で罪無き人を傷付けたんだ。そんな自分を許せる訳ない。

「謝罪は後で何度でも聞いてあげるから、幾つか質問に答えて欲しいんだけどさ？」

俺の言った事に呆れでもしたのか、物凄く呆れた表情な少女。その少女の言葉を聞き、そういえば質問があっただなと思いつく。

「ああ！ そういえば聞きたい事があっただよな？ 俺に答えられる事なら何でも答えるぜ」

誤解で少女を傷付けた罪悪感があったからなのか、出来るだけ質問に答えたいと思うてしまう。

「これは質問じゃなくて確認なんだけど、この世界はネギまの世界でここは麻帆良学園で合ってるよね？」

「その通りなんだけどよ。少し原作と違う所もあるんだよな」

「違う所って、具体的には？」

「俺とあなたの存在は勿論だが、他にも原作にはいなかった存在が何人かいるんだ」

そう俺が答えると、少女は一瞬何かを考えているような顔をしたが、直ぐに何事もなかったような顔になり、口を開く。

「これも確認なんだけど、君は普通の人間ではないよね？」

少女の言葉を聞き、何を見てそう聞いたのかわからない。だから聞いてみる事にする。

「どっという意味で言ってんだ？」

そう問うと少女は、間髪入れず口を開く。

「君の右脚を突き刺した剣、トキシックファンゲって言うんだけどさ、龍種にだって効く強烈な毒を切断時に流す武器なんだ」

その言葉を聞き、剣 トキシックファンゲ が俺の右脚を貫き、地面に縫い付けた時の痛みを思い出す。今はもう治ってはいるが、それでも脳裏からあの痛みが離れない。しかもその剣がそんなに物騒な代物だと知り、身が竦み上がってしまう。

そして、脳裏から離れない痛みから連想したのは、狂気を瞳に宿

し、殺意を纏った悍ましい悪魔の姿。近くにいるだけで生存本能を掻き立てられる禍々しい雰囲気。理性なんてかなくなり捨てたくなる程に感じた恐怖。

鮮明に浮かんだ光景に、体中からさーっと血の気が引いて行くのがわかる。無意識にがくがくと身体が震える。そんな情けない姿の俺を見ても、どうでもいいと思ったのか、少女は気にせず口を動かす。

「耐性が低い生物なら掠っただけでもお陀仏。人間も例外ではないよ？ そんな武器に足を貫かれて、君は死ななかつた。って事は、普通の人間ではないって事でしょ？」

必死に震えを抑えようとしながら、少女が求める答えを口に出す。

「あつ、ああ。転生の時に自称神の変人に会ってな。その時に精霊王の能力の一部である『精霊支配』って言う能力を貰って、それに伴って魂の格が上がったらしくて、不老不死に近い肉体になったんだ。まあ、真祖の吸血鬼程自然治癒力が高い訳でもないし、塵一つ残さずに燃やされたり、体中バラバラに切り刻まれたら死ぬらしいけど……」

そう言うつと少女は、未だ震えが抑まらない俺を見て、何かを考える仕草を見せるが、直ぐに表情を戻し口を開く。

「じゃあ次の質問。その精霊支配ってどんな能力なんだい？」

そう問い掛けて来た少女に、返事をするために口を動かす。

「世界中に存在する精霊達に言葉を媒体に呼び掛ける事で、神秘を起こせる能力だ」

「最後の質問。これが一番聞きたい事なんだけど。学園長室はどこにあるの?」

何かに納得したかのような顔をした後、最後の質問をしてくる少女。学園長室に行きたいのだろうか？ 俺は爺さんに今回の事を報告しに行くのだから、もし行きたいのならついでに連れて行こう。否、連れて行かないといけない。と、何故かそう思ってしまう。

「今回の事を報告しなきゃいけないから、今から学園長室に行くんだけどよ。一緒に来るか?」

俺がそう提案すると、何故か少女は嘲笑いを顔に浮かべる。それを疑問に思いながら見ていると、少女はこちらに嗜虐的な目を向けて、口を開く。

「そうするよ」

「じゃあ、そのままじっとしてろよ」

普段の俺なら絶対に疑問を問うだろうが、何故か今はそんな事する気は起きずに、少女が求めるままに行動する。

「『風よ、我が声が聞こえるならば、汝等で我々を包み込み、遥か遠い彼方まで飛ばしてみろ』」

Side out

ラジル君が世界樹広場に転移してから、決して短いとは言えない時間が過ぎた。あの紅き翼の一員であり、英雄の一人でもあるラジル君が侵入者に遅れを取るとは思わんが。侵入者は高位の魔法使い、若しくはバツクに高位の魔法使いがいる。そんな侵入者を相手にしたら、そこらの有象無象な魔法使いではるくに抵抗も出来ずに殺されるのが落ちじゃろうが、ラジル君の金色の精霊王などという通り名は見かけ倒しではない。苦戦はするかもしれんが無事にここ

学園長室 に戻ってくるじゃろう。

そんな事を考えながらエヴァンジェリンを見遣る。ラジル君が世界樹広場に転移してしばらくの間は、何事もなく何時も通りの不遜な態度であったが、なかなか戻って来ないラジル君が心配なようで、今は落ち着きなくソワソワとしておる。

「のう、エヴァンジェリンや。ラジル君が心配なのはわかるが、もう少し落ち着いてはどうかのう？」

「うっ、うるさい！ 私は落ち着いておるわっ！」

その様子を見兼ねて儂が声を掛けるが、返って来たのは否定の言葉。

相変わらず素直じゃないのう。などと思いつながらエヴァンジェリンを生暖かい目で見てみると、突如学園長室に風が吹く。

ようやく戻って来おったか。などと思いつながら風がどんどん集まってくる場所を見遣る。エヴァが顔に喜色を滲ませているのが視界の端に映る。

そして、一箇所に集まっていた風が弾ける。随分と遅かったのう、とラジル君に言おうと口を開こうとして、その直後に視界に入った光景に口を開く直前そのまま固まる。

どうしてそうなったのかと言うと、視界に入ったのがラジル君だけではなく、もう一人いたからだ。そこまでは、まあ良しとするにしても、ラジル君の服装はぼろぼろで、右脚の部分は真っ赤に染まっておる。多分血に濡れたからじゃろう。それに対してもう一人の少女は服装にすら何一つ傷がない。

考えるに少女は侵入者じゃろう。そしてラジル君を無傷であそこまでぼろぼろに出来る程の実力者。もしそうだとしたら、そんな彼女が何故ここに来るのじゃ？ そう疑問に思った時、少女が口を開いた。

「やあぬらりひょん。少し頼みたい事があるんだけど、勿論聞いてくれるよね？」

驚く程綺麗じゃが、漠然とした歪みを感じる声でそう言った少女。その言葉に警戒の念を抱きながら口を開く。

「お主……、何者じゃ？ 何の目的でここに来た？」

隠しているようじゃが、それでも僅かに少女から漏れ出す狂気に気付く。それに少なくはない嫌悪感を抱きながら問う。

「ああ、そういうえば自己紹介を忘れていたね」

「ラジル！」

そう返事をして、そのまま言葉を続けようと動かされた少女の口は、エヴァンジェリンの声に遮られ閉じる事になる。

つい先程までラジル君の有様を見てフリーズしていたが、どうやら驚愕から立ち直ったらしい。

「おいラジル！ 大丈夫なのか！？」

ラジル君に近付きながらそう言ったエヴァンジェリンは、それはもう心配そうにラジル君を見ている。

そして少女はそんな事関係ないとばかりに口を開こうとするが、今度はラジル君の声に遮られてしまう。

「ああ、もう大丈夫だぜ」

ラジル君はそう言ったが、その言葉はラジル君の顔色を見れば直ぐに嘘だとわかるようなもので、エヴァンジェリンもそれを否定する。

「大丈夫な訳あるか！ 顔が真っ青だぞ！？」

エヴァンジェリンの言葉の通り、決してラジル君は大丈夫そうな顔色ではない。どちらかと言うと大丈夫ではない顔色をしておる。

「ちょっと調子が悪いみたいだな。まあ、直ぐに元気になるって」

そう言ったラジル君の顔は調子が悪いとかではなく。どちらかと言うとナニカに恐怖している顔じゃ。恐らくじゃがこの少女にであらう。その推測を裏付けるように、ラジル君の少女を見る目は恐怖で染まっている。

「嘘だっ！」

麻帆良学園の生徒に勧められたアニメで見た、鉈を振り回す物騒な少女のようにそう言ったエヴァンジェリン。本当の事を話せと言外に要求しているのじゃろうな。

「嘘じゃねえよ。本当に大丈夫だから」

それに対してそう返事をするラジル君。エヴァンジェリンに心配を掛けたくないのじゃろうが、その行為事態がエヴァンジェリンの心配を加速させていると気付かんのじゃろうかのう。

「っ……。後で詳しく聞かせてもらおうぞ」

物凄く不服そうにそう言ったエヴァンジェリン。どうせ最終的には泣き落としてもされて真実を語る事になるのになのう。どうにもラジル君はエヴァンジェリンが絡むと馬鹿になるようで、前例があると言つのに泣き落としを予想出来ない。いや、もしかすると、エヴァンジェリンの泣き顔を見るためだけに嘘を付いているのかもしれない。ラジル君……、何て恐ろしい奴なんじゃ！

「はじめまして、僕の名前はキリア・ラウクルス」

そんな阿呆な事を考えていたら、少女が話し掛けて来た。その声にふざける事を止めて、顔を真剣なそれに変える。

「僕の名は近衛近右衛門じゃ。関東魔法協会の長であり、ここ麻帆良学園の学園長をしてる」

名乗られて名乗り返さないのはいかんと思い、どうせ知っておるんじやろうが名乗る。やはり自分の口で名乗る事は大切じゃ。

「さっきの質問の答えは、前者はちょっと特殊な超絶美少女。後者はどちら（・・・）の事を言っているのかわからないから、答え辛いんだけど？」

確かに美少女なのは認めるが、だからと言ってその言葉に付き合う気はないので無視しておくでしょう。

それにしてもちょっと特殊……、のう。儂が少女から感じた狂気は、ちょっと特殊なだけでは耐え切れずに精神が壊れてしまうと思える程じゃったが、口で言うだけなら誰にでも出来る。今はその戯事に付き合っつてやるとしようかのう。

「……ふむ、ちょっと特殊のう。その身に巣くう狂気は、ちょっと特殊なだけで自我を保てる程度ではないじゃろに。後者については、どちらもと答えておくぞい」

「さあ？ それを決めるのは僕（一個人）ではなく大多数だろう？ 質問の答えは、麻帆良に来たのは全くの事故、だから目的はないよ。学園長室に来たのは、帰る手段がわからないから、手段が見付かるまでは麻帆良に居座らせてもらおうと思っつてね」

「確かに、それもそうじゃな。それにしても、ふむ……」

儂の言葉にそう返した少女。なるほどなるほど、確かに一理あるのう。

そう思いながら質問の答えに疑問を抱く。どうにも判断材料が少ないので、この中で一番少女といた時間が長いであろうラジル君に尋ねてみる事にする。っと言っても、どんぐりの背比べなんじゃが。

「（ラジル君から見て、この少女が本当に事故で麻帆良に来たのかどうか。意見を聞かせてくれんかのう？）」

初歩的な魔法である念話を使い、少女には聞こえぬように尋ねる。念話がどんな魔法なのかと言うと、魔力で思考と思考の間に一時的なパイプを作る事で、口にせずとも対話が出来る魔法じゃ。

「（俺は嘘じゃねえと思うぜ）」

「（ほう？ 理由を聞かせてくれんかのう？）」

「（故意で麻帆良に侵入したなら、態々（わざわざ）学園長室に何か来ねえだろ？ 暗殺目的なら顔が見られている時点で失敗だし、第一それなら俺に学園長室はどこかなんて聞かねえだろうし）」

ふむ……、ラジル君の意見を聞くに、この少女は本当に事故で麻帆良に来た可能性が高いじやろう。そしてそれを侵入者と誤解していた儂達。

この少女はどうやら被害者と言っても可笑しくないらしいのう。まあ、だからと言って了承する気にはならんが。この少女に巣くう狂気は、必ず麻帆良に大きな損害を出すじやろう。只でさえ今は忙しい時なんじゃ。不確定要素は少ない方が良いに決まっておる。そう考え、口を開く。

「真偽はともかくとしても、儂はお主を麻帆良に居座らせるのは断固として反対じゃ」

「理由を聞いてもいいかな？」

儂にそう問い掛けてくる少女。儂の人を見る目が正しければ、そんなもの容易に考えつく程頭が良いじやろうに。

「どうせ検討ぐらいは付いているじゃろつに」

儂がそう言つと、少女は驚愕したような顔をする。と言つても、ほんの少しびっくりした程度じゃが。

「確認ぐらいしても罰は当たらないでしょう？」

「それもそうじゃな。幾つか理由があるのじゃが、特に大きい理由を挙げるとするかのおう。まあ、至極単純なんじゃが、麻帆良にお主と言つ不確定要素を置きたくない。これが理由じゃ」

「なるほどなるほど。尤もな理由だね」

少女の言つた事に返事をして、更にそれに返事をした少女の言葉は何等問題ないのじゃが、問題なのは少女が全身から放出する殺気。

「ッ！」

それに反応してなのか、先程までラジル君のぼろぼろな姿を見て茫然としていたタカミチ君が、少女に向けて居合拳を放つ。

「危ないな」。命を狙われる瞬間でも、つい見惚れてしまうような美少女に向かつて拳を振るう事が、麻帆良での常識なの？」

そんな常識では断じてない。と言いたい所じゃが、麻帆良全体に張られた結界の影響で歪められた認識のせいで、麻帆良学園の外の人間から見たら頭が残念になっている生徒が多数おるし、ラジル君とタカミチ君が少女に襲い掛かった事も事実なので否定し辛い。

「まあ、どうでもいいよね」

本当にどうでもいいようにそう言った少女は、口を閉じる事なく続けて口を動かす。

「ねえ、ぬらりひょん。不確定要素は置きたくないんだよね？」

その言葉を聞き、顔に疑問符が出る。先程も言った通りその通りじゃ。何故その事を掘り返すのか不思議に思いながらも口を開く。

「さっき言ったじゃろつに。置きたくないに決まっておろつ」

「じゃあ、例えばの話だけど、もしもその不確定要素が、要求を断るならここに住む人々を皆殺しにすると言ったら、どうする？」

少女が言った言葉に、思考する事すら忘れて固まる。視界の端にラジル君やタカミチ君、エヴァンジェリンが驚愕で固まっている姿が入る。

「何を言いたいのじゃ……？」

「だーかーら、もしも僕が要求を断るなら麻帆良に住む人々を皆殺しにすると言ったらとして、それでも拒絶するのかい？」

少女の言葉を聞き、無意識に殺気を含んだ眼光で睨んでしまう。どうやらそれはタカミチ君も同じようじゃ。エヴァンジェリンは麻帆良に住む人々にそんな愛着がある訳でもないの、きつい視線で見ているだけ。ラジル君は儂やタカミチ君と同じように少女を睨んでいるのじゃが、それでもその目には恐怖が見える。

そんな儂達の反応などどうでもいいように、無関心にちらりと見

るだけで直ぐに口を開く。

「もしそんな展開になったら、拒絶する選択はお勧め出来ないよ。守るために遠ざけたはずなのに、その結果守らなきゃいけない対象が皆殺しにされる。本末転倒も甚だしい結末だよね」

少女が言葉を放つにつれて顔が強張っていきのがわかる。そんな儂を見てなのか、悪魔のように凄惨な笑みをする少女。

そして少女は、まるでそれ事態が猛毒のように感じるほどに強烈な殺気を放つ。

「さて、それじゃあもう一度聞くよ。僕を麻帆良に滞在させる気はないかな？」

そう問う少女は、断れば皆殺しだと言外に示していた。

どうする？ どうすれば良いのじゃ！？ この悪魔のような少女は、ラジル君を無傷で倒せる程の実力者じゃ。そんな化け物染みた奴を相手に、ここにいる四人で戦ったとしても負ける可能性がある。もし勝てたとしても逃げられる事が容易に予想出来る。ならばここはこの少女の要求を呑むしかない。不確定要素を抱え込む危険性よりも、麻帆良に住んでいる人々の命の方が大切に決まっておるからこのう……。

「ぬう、仕方あるまい……か」

了承の意と取っても良い儂の言葉に、タカミチ君が怒声を挙げる。

「了承するのですかっ！？ 学園長！」

「止むを得んじやろうが！ こうでもしないと麻帆良が血の海にな

るのじゃぞっ!？」

儂とて情けない気持ちでいっぱいなのじゃ。じゃがしかし、こうでもしないと罪無き人々の命が散ってしまう……。そんな心境の時に怒鳴られて、つい怒鳴り返してしまっ。

「ぐ、う……………」

苦汁を舐めたような表情をして押し黙るタカミチ君。そして苦渋な表情をしているであろう儂。そんな儂達の情けない姿を見てなのか、悪魔はよりいっそう口の端を吊り上げて、嗤う。

「くくく…………、了承されたと見て問題はないよね？」

嗜虐的な嗤い声を挙げて、そう確認してきた悪魔。その凄惨な少女を睨みながら口を開く。

「そうじゃ。じゃが、今の麻帆良に空いている部屋はないぞ？ 今日は野宿してもらおう事になるぞ？」

儂の言葉は事実で、今空いている部屋は麻帆良にはどこにもない。その気になれば直ぐに空き部屋の二つや三つ作れるのじゃが、情けないんじゃが精一杯の抵抗で野宿させてやる事にする。

「爺さん、俺から提案があるんだが」

ラジル君の言葉に、少しの期待を持ちながら口を開く。

「ほう、申してみい」

「俺が住む事になる家に住ませるってのはどうだ？ エヴァの家が近くにあるから、何かあっても直ぐに気付けるだろ？」

なかなか良い案じゃと思った。いつもの儂なら容易に考えつく案じゃとは思うが、それでも気付かせてくれたラジル君には感謝せんとこのう。じゃが良い案でも、一つ疑問が残る。

「ふむ、それもそうじゃが、それだとラジル君はどこに住むのじゃ？」

疑問を口にする。もしやラジル君は、この少女と一つ屋根の下で一緒に暮らすなどと言う積もりでは……！？

「あー、エヴァの家に居候でもする」

その言葉を聞き、安心半分不安半分になる。もしやラジル君……、ペドフェリアなのかのう？ じゃが、それでも納得は出来た。

「なるほど、ではそれで行く事にしようかの。二人共それで良いかの？」

確認を取る。二人にしては願ってもない事じゃろうが、それでも一応は取った方が良いじゃろう。

「僕はそれで構わないよ」

「私もそれで構わない」

予想通りの了承の意。それを聞いて、後はこの少女をラジル君達に家まで案内させて、その次はこれから先の事を考えなくてはなら

ない。

表立つての行動をしては麻帆良に住む人々が殺されかねんから
う……。さて、どうしたものか。

「悪魔め……」

ふと聞こえたタカミチ君の声に、思わず同意してしまう。見れば
タカミチ君は苦虫を何百匹も噛み潰したような表情をしている。そ
の声を聞いたからなのか、タカミチ君の表情を見てなのか、悪魔は
愉快そうな音色で言う。

「確かに僕は悪魔のような奴だろうね」

そう言った悪魔の顔には、見るもの全てを恐怖させるような、邪
悪な笑みが浮かんでいた。

その後は、ラジル君達に家に帰るついでに少女を案内してくれと
頼み。タカミチ君とこの先の予定を話し合い、しばらくはあの少女
の様子見する方針に決まった。

ああ、明日からどうなる事やら。

第四話：嫌がらせっぱい事とヤンデレっぱいあいつの決意

今僕は木が鬱蒼と立ち並ぶ森の中にいる。そして目の前にあるのはそれなりにでかいログハウス。今日から僕が住む家だ。

ぬらりひよんとの交渉が終わり糞野郎の転移でここまで来たのはいいけど、いざしばらく住む事になる家を目の前にすると疲れがどつと押し寄せてくる。

その糞野郎は転移で僕をここに送ったら直ぐにマクダウエルと共に転移をしてどこかへ行った。きつとマクダウエルの家に言ったんだろう。

「眠いし、さっさと家に入って寝よう」

一人になって緊張が解けたからなのか、先程からとてつもない疲労感と眠気を感じる。

まあ、このまま突っ立ってても疲労感と眠気が大きくなっていくだけだし、早く夢の中にダイブしよう。そう思い玄関の取っ手を掴むが

「……………あれ？」

鍵でも掛かっているのか幾らノブを回そうとしてもがちゃがちゃと金属音がなるだけ、ついイラっとしてしまっ。

そりゃあ、こんな森の中だからって家の管理を怠るのは無用心だし、鍵を掛けておくのが普通だよな。

「はあ……………」

そんな事にも気付かなかった自分と、鍵を渡さなかったぬらりひ

よんに沸々と怒りが込み上げてくる。

でも、このままだと折角手に入れた家を目の前にして野宿する事になる。それは嫌だと思い、ノブを掴んでいた手を離してから数歩下がる。

「ていつ」

軽い掛け声を放つと同時に右足を前に突き出す。僕が放った前蹴りは目前にある扉にぶち当たり、その衝撃で扉を吹っ飛ばす。

今直ぐにでも寝たいから学園長室に鍵を貰いに行く気にはなれないし、そうなれば力技しかないよね？

そして蹴り飛ばした扉の上を通り家の中に入る。

目に付いた階段を登るとドアを幾つか見付けたので、取り合えず一番近くにあるドアを開く。その先にあつた真新しい部屋に置いてあるベッドを見て、次の瞬間には何故かベッドの上にあった。

あ…ありのまま今起こつた事を話すぜ！『ベッドを見たら無意識の内に身体が動いてたんだ』な…何を言ってるかわからねーと思うが俺も何をしたのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった。ルパンダイブだとか無我の境地だとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ！もっと恐ろしい無意識の片鱗を味わつたぜ！

そんな阿呆な事を考えながら目を閉じる。

ぬらりひょん達は急速な事態に付いて来れずに、僕に何かする余裕がないだろうから安心して眠れる。

まあ、明日もそうだとは言えないから今の内に惰眠を貪っておこう。

Side ラジル

「へえー、良い家じゃないか」

目前にあるログハウスを見ながら言う。原作で見た事はあるが、実物を自分の目で見るとつい感嘆してしまう。

「ふん、当たり前だ。何せこの『闇の副音』が住む家だからな」

薄っぺらい胸を逸らし得意げにそう言ったエヴァを見てみると、胸の奥から沸々と生暖かいナニカが溢れてくる。と言っても不快ではなく、むしろ癒される。

個人的な意見だが、エヴァ程加護欲を掻き立てられる者は世界広しと言えど二つとして存在しないだろう。世間では悪の代名詞として恐れられているが、そんなものは只の偏見だ。俺から言わせれば癒しの代名詞と言っても過言ではない。

「だけどよう。『闇の副音』に相応しいとは言えねえよな」

どちらかと言えば夢見る少女に相応しい家だと思っ俺は間違っていないはず。原作通りなら家の中は人形やぬいぐるみで埋め尽くされているだろうし、もしそうなら夢見る少女の家と言っても不自然ではない。

まあ、俺からすればエヴァは癒しの代名詞だから、そんな家に住んでいても不自然ではない。むしろベストマッチしている。

「む……、言われて見れば、確かに悪の代名詞に相応しいとは言えないな」

「だろう？ どっちかつつーと夢見る少女に相応しい家だと思うぜ」

「……馬鹿にしてるのか？ 喧嘩なら買うぞ？」

どうやらエヴァは、夢見る少女に相応しい家と言われたのが不快だったらしい。額に青筋を浮かべこめかみをひくひくとさせて不機嫌そうな顔をしている。

「わりい。馬鹿にしてる訳じゃなかったんだけどよう」

誇りある悪と自分で言ってる分、夢見る少女に相応しい家などと言われるのは不快なのだろう。そこまで考えなかった自分に落ち度があるので素直に謝る。

「ふん、まあいい。それにしても……」

そこで一旦言葉を区切るエヴァについて疑問めいた視線を送る。それに気付いてないのか、気にしてないだけなのか、そんな事に構わずエヴァは口を動かす。

「変わらないな……」

先程の不機嫌そうな顔とは一転、嬉しそうに微笑みながらこちらに顔を向けたエヴァの言葉を聞き、嬉しさ半分遣る瀬無さ半分の矛盾した思いが生まれる。

他人の身勝手な欲望のせいで真祖の吸血鬼にされ、世間から化物と呼ばれ幾度も殺されそうになり、信じた者すら真祖の吸血鬼である事を知ったら手の平を返す。死すら許されない残酷過ぎる人生を歩みながらも、エヴァは壊れる事なく現実を生き続けた。

そんな少女が出会えた永遠の時を生きる男、すなわち俺。そして

今日からしばらくはそんな俺と一緒に暮らせるんだ。それが嬉しいんだろう。

そんな俺が変わってなくて嬉しいんだろう。

俺がエヴァを嬉しくさせていると考えたら俺まで嬉しくなる。エヴァが嬉しそうにしているだけで全てがどうでも良くなる。……世間ではヤンデレと呼ばれても可笑しくない事だが、俺にとってエヴァは何よりも優先しなきゃいけない存在だ。エヴァのためならヤンデレなどと呼ばれても痛くも痒くもない。むしろそれすら幸福に感じるだろう。

そしてそんな思いとは裏腹に、エヴァの境遇を考えると遣る瀬無さで胸がはち切れそうになる。

俺がもっと早くにエヴァと会っていれば今よりは救われたかもしれないねえのに。そもそも自称神に出会った時に、エヴァが真祖の吸血鬼になる前の時期に送ってくれと頼んでいたら、もしかしたら残酷過ぎる現実からエヴァを助ける事も出来たかもしれない……

そこまで考えて、ふと聞こえた声に思考を中断する。

「おい！ どうしたラジル？」

思考の海に沈んでいたせいで上の空だった俺を心配してか、エヴァが心配げにこちらを見上げている。その愛らしい姿に一瞬固まってしまった俺は可笑しくないよな？

「……っ！ 危つく理性が飛びかけたぜ……」

くっ、これがエヴァの力か……。何て恐ろしいんだ！

「とっ、突然何を言い出すんだ！ この馬鹿者が！」

俺のちよつと危険な発言を聞いてか、エヴァの顔は林檎のように真っ赤になる。そんな萌えを圧縮したような姿にまた理性が飛びかける。そんな素晴らし過ぎるエヴァの口から出た罵倒を気持ち良いと感じてしまった俺は変態なのか……？

「すまねえ、少し気が動転してたみてえだ」

まあ、エヴァの素敵過ぎる行動を見ていたら気が動転するのも仕方ない事だよな？

「……キリア・ラウクルスだったな？ あいつのせいなのか？」

そんな俺の態度を見て、何を勘違いしたのかそう問い掛けてくるエヴァ。まあ、でも、一概に勘違いとは言えねえんだけどよ。

「そうかもしれねえけど、断言は出来ねえな」

半分は貴女のせいです。と言いたい所だが、そんな事言っただけでぶざけてるのかと罵倒されるのが落ちだ。まあ照れ隠しだろうから不快とは思わないけど、むしろ幸せに感じるだろう。

「そうか……。そう言えば、世界樹広場で何があったのかまだ聞いていないぞ。キリキリと吐け」

思い出す事すら嫌なんだが、そう言ったエヴァから 全て吐かなければ……わかるな？ と暗に示している黒い空気が吹き出てるように感じたので、仕方なく口を開く事にする。

「エヴァからすればどうって事ないかもしれねえぞ？」

一応の確認を取る。死の気配に恐怖して、狂気に恐怖して、それを放つ悪魔に恐怖した。そんな事、六百以上の時を生きたエヴァからすればくだらない事だろう。

「良いから言え」

予想通りの言葉を聞き、失望されるかもしれないと思いながらも言葉を放つ。

「迎撃しようとして、逆に迎撃された。ただそれだけだ」

不安を感じつつ言った俺の言葉を聞き、エヴァは呆れたように溜息を付く。それを聞いて絶望が胸の奥から溢れ出そうになるが、それよりも早くに耳に届いた言葉に驚愕した事で絶望が治まる。

「はあ……、察するに今まで感じた事のないナニカを感じて、それに恐怖したと？」

「　　っ!？」

随分と的を得た言葉に絶望の代わりに驚愕と疑問が溢れる。そんな俺の姿を見ながらエヴァは言葉を続ける。

「ナニカが死の気配なのか痛みなのか、はたまた狂気なのかはわからないが、どちらにせよそれに恐怖するのは恥ずべき事ではないだろうに。いいか、良く聞け。歴戦の強者と言えどそれに恐怖しない奴はいない。大小の差はあれど心のどこかで恐れてしまうから、殺されぬよう戦う、傷付かぬよう最善の判断を下す、狂気に吞まれぬ

よう抗う。その結果最小限のリスクで壊れずに勝利し続けた故の歴戦の強者だ。恐怖心こそが歴戦の強者を作り出すファクターと言っても過言ではない。そして歴戦の強者になったからと言って恐怖心はなくならない。だから恐れながらも戦い続けるんだ。そして、その恐怖を形作る要因である死や傷や狂気を恐れないのは破綻者や狂人、絶対的強者のみだ。不死であろうと例外ではない。ならば、力を持っただけの弱者である貴様が恐怖しようとは何等可笑しい事はないだろう。それが正常なんだ。だから、恐怖に打ち勝てるようになるまではどれだけ自分を情けなく感じてても気にする事はない。それでも気にしてしまうのなら私が背を押してやろう。肩を支えてやろう。手を握ってやろう。胸元を貸してやろう。いずれ恐怖に打ち勝てるようになるまでは私がそうしてやる」

挑発的に口端を吊り上げるエヴァの言葉を聞き、どんどんと恐怖心が薄れていくのがわかる。

嗚呼、救われた

「ありがとな……。そこまで言ってくれたエヴァのためにも、頑張らねえといけねえな」

「ふん、当然だ。この私にここまで言わせたんだ。頑張ってくれな」と困る」

残酷な現実には生き続けた不器用で心優しい少女。俺を二度も救ってくれた恩人。その人の顔を眺めながら、決意する。

あの悪魔の事だ。遠くない未来に麻帆良学園に多大な害を齎すだろう。

もし、その時にエヴァが悪魔の毒牙に冒されそうになるのならば、

差し違えても悪魔を殺す。

悪魔への恐怖は小さくなって尚胸に蔓延っている。殺されるのは怖い。傷付くのは怖い。狂気に吞まれるのは怖い。悪魔が怖い。

でも、それ以上にエヴァが悪魔の毒牙に冒されるのが怖い。だから、そうならないために何だっしてやる。その結果俺が死のうと、エヴァを守れたのなら本望だ。

「おかえりなさいませマスター。遅かったですね」

「茶々丸か、今帰ったぞ。色々あつて大分遅くなったがな」

思考の海に沈んでいると、ふと先程までいなかったはずの音が聞こえた。その方向に顔を向ければ緑髪の人型ロボットが視界に入る。エヴァが言ったように茶々丸だろう。

「そうなんですか。所でマスター、失礼ですがこの方はどなたですか？」

こちらに無機質な目を向けながらエヴァに問い掛ける茶々丸。そりゃあこんな夜遅くに仕える主が見知らぬ男と一緒に帰って来たら疑問に思うのは当然だよな。

「そういえば話してなかったな。こいつはラジル・アルフードだ。茶々丸も知っているだろう？ それと、今日からこいつが家に住む事になっている」

「ああ、マスターがまるで恋する乙女のように話していた方ですね。はじめまして、マスターの従者をさせていただいてる茶々丸と言う者です。今後ともマスターをよろしく願います」

「ラジル・アルファードだ。知っているだろうけど、『金色の精霊王』なんて呼ばれてる。こっちこそエヴァをよろしく頼むぜ」

茶々丸にそう返す。挨拶は人間関係を円滑にする大切な事だろ？
それにしても……

「エヴァ……、そんなに俺を想ってたんだな」

単純な嬉しさと喜びを感じる。それとは反して15年も待たせた
罪悪感も感じる。

「もっ、文句でもあるのか？」

恥ずかしそうにそう言ったエヴァを見ていたらつい微笑んでしま
う。

大胆不適なエヴァも好きだけど、こういうエヴァも好きだ。って
言うか、どんなエヴァも好きだ。

「なっ、何を笑っておる！ ええいつ、生暖かい視線を向けるな！
！」

どうやらそんな俺が気に食わないらしく、顔を真っ赤にして怒鳴
ってくる。

それに対して更に微笑みを深くした俺は正常なはず。

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに。高画質高音質で録画しな
ければ……！」

「何をしておる茶々丸！ 今すぐ止める、録画を止めるんだー！」

「だが断ります」

「このポケロボめ！ 巻いてやる、巻いてやるー！」

「そんなに巻いてはいけませんマスター」

そんなこんなで家に入り、その後はエヴァが提案した宴を楽しんでから寝た。チャチャゼロと会うのは久しぶりだが、変わっていないかったと記しておく。

明日から教える立場として働かなければいけないくせに記念すべき初日を前に何で酒飲んでるんだよ。とか自分でも思ったけど、エヴァの嬉しそうな顔を見たら断る気なんて起きなかつたんだ。仕方ない事だよな？

第五話：羞恥心と暗殺者の危険性とちよつとした回想（前書き）

終始キリア視点です。

第五話：羞恥心と暗殺者の危険性とちよつとした回想

ふと聞こえた小鳥のちゅんちゅんという鳴き声に、意識がまどろみから浮上する。

身を包む布団の温もりについて二度寝してしまいそうになるけど、その結果寝首を搔かれるなんて事になるのも嫌なのでベッドの上で上半身を起こす。

そのまま布団を退けてベッドから降りようとしますが、どうにも昨夜の疲れが残っているからなのか意識がぼんやりとしている。そのせいでつい動きを止めて、足だけをベッドから降ろした体勢でぼつとしてしまう。

「んう」

しばらくぼつとした後、ようやく意識が完璧に覚醒し始めたので、今度こそベッドから降りる。

そして一つ伸びをしてから、部屋を出る。そのまま足を動かし階段を降りて、リビングと思われる部屋に到着した所で足を止めて目に付いたソファアに座り、考える。

昨日は後手になったが故に対応に遅れて、ぬらりひょん達は特に何も出来なかったけど、これから先もそうだと絶対には言えない。

もしかしたら間接的に僕を殺そうとするかもしれない。暗殺者をけしか喉けたり、食べ物や飲み物に毒を入れるなどして気付かれぬよう服毒させたりと、その他にも幾らでも方法がある。『毒霧の悪魔』なんて呼ばれてる分、僕はそれなりに毒に詳しいから簡単には毒で死ぬなんて事にはならないと思うけど、暗殺者が襲撃して来たとなれば必ず大丈夫とは言えない。それが一流ともなれば尚更だ。

職業選択 possible のゲームなどではなめられがちで、魔法使いや剣士

と言った職業を選ぶ人が多いけど、だからと言って現実で暗殺者が魔法使いや剣士に劣っているとは絶対に言えない。むしろ一流ともなると、同じく一流の剣士であろうと瞬く間に殺してしまう事もある。決して誇大表現ではなく、根拠だつてある。

ハイスペックな空間把握能力に判断能力、数多ある戦法、ハイスペックな殺戮技巧や狙撃技術など。危険性を挙げだしたらきりがない。そんな廃スペック（誤字にあらず）な上に地形を完全に把握し、利用して、その場で一番効率的に目標を殺す戦法を取るなどと、「こんな奴に勝てる訳なくね？」と大半の奴ならつい言ってしまうたくなる程の存在。それが『一流の暗殺者』だ。

まあ、今言つた事はおまけ　おまけで片付けられるレベルであるかはさておき　でしかなく。それよりも危険な、暗殺者の真骨頂と言つても良い至高の業がある。それが何なのかと言つと、気配遮断技術だ。暗殺者の常套手段であり、暗殺者にとって極めるべき業。それを極め、気配の完全な遮断をものにさえしてしまえば、歴戦の強者を殺す事だつて容易い。……不意をつけただけどさ。そして、それを極めたのが一流の暗殺者だ。

個人的な意見だけど、『暗』　闇より出る　”殺”　戮　”者”』とは良く言つたものだと思う。

そんな敵に回したくはない奴が僕を殺しに来たのなら、正直どうなるかはわからない。その上麻帆良マホウに来てからまだまだ日が浅い現状で、麻帆良を完璧に把握している一流の暗殺者が来た日には、『キリア終了のお知らせ』が流れるかもしれない。

まあ、でも、一流の暗殺者なんて物騒な奴は世界広しと言えど二桁もない。つて言うか、一人もない時だつてあるかもしれない。……この世界ではどうなのか知らないんだけどね。

少なくとも、モンハンの世界では一人だけだつたよ？　ここまで暗殺者に脅威を感じているのも、もしかしなくてもあいつのせいかもしれない。だつてさ、聞いてくれよ。リミットオーバー（限界突

破)と独自に開発した気での身体強化を併用しているとは言え、同時に四撃を放てる程の、この僕ですら化け物と思ってしまうほどの殺戮技巧に加えて、高レベルの空間把握能力に判断能力。これだけですら充分過ぎる程のチート要素を孕んでいるのに、完全な気配の遮断もものにしてしているような化け物。勝てる気がするかい？僕はしない。

まあ、さすがに一流の暗殺者がそんな人外スペックな奴ばかりだとは思わないけど。……具体的に言うと、同時に四撃放てるような奴ばかりだとは思わないけど。完全な気配の遮断だけでも充分過ぎる程危険なのだ。散歩をしていたら後ろからグサツ、なんて死に方はしたくないし。警戒しておいて損はないはず。

……そういえば、そんな化け物染みた暗殺者と渡り合う奴が何人もモンハンの世界にいたんだっけ。その内の何人かと、多対一で仲間がいるとは言え戦っていた過去の僕を「良く生き残った」と褒めなくなる。仲間を含め僕も、人間止めたような戦闘能力を持っていたけど、それと一人で渡り合い。あまつさえ苦戦させるような連中が化け物の枠に収まるのか……、凄く疑問に思えてくる。

僕がモンハン世界でトップクラスの实力者ならば、『血濡れの餓狼』、『閃光の剣聖』、『紅蓮の破砕者』、『猛る鬼神』、『見えざる恐怖』、『朱の騎士王』、『この六人……、つまりは化け物の枠に収まるのかすら疑問な奴らは、果たして何なんだろ？

まあ、そんな事今更考えてもどうにもならないよね。って言うか話が脱線してるし……。

兎にも角にも今は、来るかもしれない一流の暗殺者をより安全且つより楽に退けるために行動を始めないとね。

「そうと決まったら早速行動しないてぐぐぐ……」

座っていたソファから腰を上げて声を出すが、自らの腹部からなつた音に遮られる。

他に人はこの部屋にはいないけど、それでも羞恥心で頬が赤く染まってしまうのは何でだろうね？

「……その前に腹^{はら}拵^{じゆ}えしなきゃね」

取り敢えずこの空腹感を満たすために食べ物を捜す。そのついでにこの家を探索する。もし暗殺者に寝首を掻かれた時、自分の家に何かあるのかを、自分の家はどんな構造なのかを把握しきれてないせいで自分の家を利用して死ぬ。そんな間抜けな死に様は嫌過ぎる。これから住む家だし嫌でも把握していくと思うけど、早いに越した事はないからね。

「ふむ、これだけあればしばらくは大丈夫……かな？」

しばらく探索を続けて、ある程度家の構造や物を把握してからリビングに戻り、探索し始めて一番に見付けた冷蔵庫の中を見て言う。実を言うと食べ物も冷蔵庫の中にしかなかった。昨日扉をぶつ飛ばしたせいで出来た、元はそこに扉があった穴を通り家の中に侵入してくる風の温度から考えると、今は夏の後半若しくは秋の前半、若しくはその中間程の季節だろうから冷蔵庫で保管しなきゃ大抵の食料は腐るし、当然と言っちゃ当然の事だね。

その冷蔵庫の中には結構な量の食料や調味料、その他にも色んな飲み物やアイスにお菓子と言った多種多様な物が揃っていたが、如何せんハンターと言った職業柄「食える時は狩りに支障^{きた}を来す一歩手前まで食べ」がモットーなので、これだけの食べ物を目前にしても不安が残る。まあ、でも、先程からほとんど主張が激しくなっている腹部のためにも、今は取り敢えず食べよう。

「んー、今から米を炊くなんて悠長な事やってられないし、今日はパンだね」

冷蔵庫の中から食パンとベーコンを数枚、卵を数個取り出して、それを持ったまま探索の時に見付けたキッチンに向かう。キッチンに到着した後は食パンを焼いてトーストにしたり、卵とベーコンを焼いてベーコンエッグにしたりするだけの簡単な調理をする。

それが終わったら皿に盛ってからリビングに運ぶ。そして机に並べてからソファアに座る。

「いただきます」

手を合わせて、日本人特有の食前の挨拶をする。別に元日本産まれ日本育ちな日本人だからと言う訳ではなく、単純にこれに含まれたつい嘲笑いしたくなるような意味が好きだからだ。

食べられる家畜に、食べられる自然に、食べられる生命に、そのどれかを育てた人々に感謝を。

素晴らしく素敵で純粹な、つい嘲笑いしたくなる意味でしょ？

転生後まだ二桁も年が経っていない頃に放り出された、生死を賭けた弱肉強食の世界。そこでのルールはたった一つ、『狩るか狩られるか』。

その唯一絶対のルールは、未だ肉体年齢が二桁に届いていない”ちよっと特殊なだけ”の幼い少女であった僕を、「例外など存在しない」とでも言うように縛り上げ、弱肉強食の世界に引きずり込んだ。

元の理由は僕を売った屑共とギルドのお偉いさん方だけど、その日常から逃れなくなったのは一つだけのルールのせいだ。

幾度も見た狩り殺される他人達。それを見る度に前世での死んだ

時の痛みが脳裏を過ぎり、僕の恐怖心を刺激していく。そして殺される夢を見るようになり、終いには目に映るもの全てが自分を殺そうとしていると本気で思い始めていた。

心弱き者が一度狩場に出向いたら、唯一絶対のルールに縛られ負の連鎖から逃れないようになる。明日は自分が殺（狩）られるかもしれない、だからと言って逃げ出してもいつかは弱者として殺（狩）られる。それなら今の内に自分を磨き、殺（狩）られる立場から殺（狩）られる立場に少しでも早くなれば良い。だからそうなるまでは生き残るためにどんな残酷な事でもしてやる。そう思って行動していた結果『毒霧の悪魔』なんて呼ばれる事になった。

そして、他者が狩り殺される光景、何度も何度も見る悪夢、行き過ぎた被害妄想、弱肉強食の世界。それらに精神を擦り減らし続け、最終的に辿り着いた打開策は自己暗示だった。

来る日も来る日も自己暗示を続けていた。雨の日も風の日も雪の日も晴れの日も、春も夏も秋も冬もどんな時も自己暗示を続けた。

僕は絶対的強者なんだ。誰にも殺（狩）れはしない、僕が殺（狩）る立場なんだ

そうして続けた自己暗示は本能すら押し込み僕の弱い心を覆う鎧となった。そうなるまで見た悪夢の回数は四千四百四十四回。今ではリミットオーバー（限界突破）の始動キーと言っても良い数字だけど、ちゃんとした理由もある。四千四百四十四回の悪夢をより鮮明に思い出すためだ。合言葉の『毒霧の悪魔』は、死の恐怖に蝕まれていた時の、自己暗示など使わない『毒霧の悪魔（過去の僕）』により簡単に、より完璧になりきるため。

まあ、そんな訳で自己暗示で自分は『絶対的強者』だと思つ事に

よって死の恐怖から逃れはしたけど、勿論そんな幻想はふとした拍子で簡単に壊れる。そしてまた死の恐怖に捕われてそれから逃れるために自己暗示をする。自分で言うのもあれだけど救いようのない愚者だったと思う。

そんな危険で不安定な物凄く特殊な少女に何があって今の僕になるのかと言うと、そこには感動的でありながら悲壮的な出来事がある。……、ってまた話が脱線してるね。

まあ、何が言いたかったのかと言うと、そんな人生を送って来た僕からすればいただきますの意味を語られても嘲笑いをくれてやりたくなるが、それでもその純粋な言葉に憧れのような感情を覚えてつい食前に言ってしまう素晴らしくも嘲笑いしたくなる素敵な言葉なのだと言いたかった訳だ。

「「ごちそうさまでした」

考えながらも身体は動いていたらしく、気が付いたら綺麗になっていた皿を見て食後の挨拶をする。その後は当初の目的でもあった麻帆良学園の探索をする。僕の今着ているもの、つまりはギギネブラの素材を使った坊具は、現代ではコスプレと呼ばれるような見た目なので人目を引くかもしれないけど、それは避けたいので気配を消せるだけ消し、長時間の移動に支障を来さないレベルでの限界の速度で移動して、屋根の上や路地裏などの目が届き難い場所を移動するようにする。何人かには見られたかもしれないけど、それは仕方ない事だと割り切る。

そして昼飯を食べるために一度家に帰ったりしながらも、ある程度ここを把握するまでは駆け続けた。

第五話：羞恥心と暗殺者の危険性とちょっとした回想（後書き）

霧唾（作者）「くっくっくっ……、はーっはっはっはっ！」

ラジル「おっ、おい霧唾！いきなり笑い出してどうしたんだ？
気でも狂ったのか？」

キリア（キャラ）「気が狂っているのは今更だと思っただけど」

ラジル「酷い事言うなお前。こんな奴でも俺達の産みの親なんだぜ
？ 認めたくねえけどよう」

霧唾「ラジル！君の方が酷い事言ってるから！……まあ、そんな事は置いて、一言言わせてもらうよ。『やつちまったZE』
。もう笑うしかない！ハーツはっはっハーツはっ！」

キリア「語尾になんて付けないですよ。物凄く……、具体的に言う
と虫ずが走る程気持ち悪いから」（身震いしながら）

ラジル「俺も同意するぜ。物凄い激しさで同意するぜ。略してはげ
どするぜ。大事過ぎる事だから三度言っただぜ」

霧唾「えっ？ 幾ら何でもひど過ぎじゃない？ ってかラジル！
三度も言わなくて良いから！」

ラジル「だって……、なあ？」

キリア「糞野郎と同意見なのは嫌だけど、それでも……、ねえ？」

霧唾「何で意味深に同意し合っただよ……。それよりも、何をやり
ちまったか聞かないの？」

キリア「どうせ、気が付いたら指が勝手に動いていて暗殺者襲撃フ
ラグを建ててしまったとかでしょうに」

霧唾「なっ、何でわかったんだよ！？ 自分の考えに入っただけすらい
なかった読心術を覚えたと言っても言うのか！？」

ラジル「あんなあからさまだと馬鹿ですら気付くだろうよ」

霧唾「それは自覚してるけどさ、それでも指が勝手に動いた件は納
得いかない！ 普通気付かないものじゃないに！」

キリア「霧唾……。君は大切な事を忘れてる」

霧唾「なっ、何さ？ いきなり真面目な顔をして……」

キリア「それは」「俺達は極端に言うとお前に操られるだけの人形
お前の意思一つでどんな行動だって取れるんだ。笑いを取るうとし
てこの展開になるよう俺達を動かしたのはお前の意思、詰まり！
お前が疑問に思う必要なんてねえんだ！」

霧唾&キリア「……」

ラジル「……あれ？ 霧唾は兎も角、何でキリアは黙っているんだ
？」

キリア「はあ、鬼ですら聴き入る程の美声を遮っというて、言うに事
かいてそう聞かない？」

霧唾「ばれては仕方あるまいて！ そうだ、その通りだラジル！
我こそが、この作品での神なのだ！」

ラジル「相変わらずのナルシストっぷりだなおい。霧唾は……、駄目だこいつ、もうどうにもならないの域だな」

霧唾「ふん！ その態度がいつまで続くかね？ トラップカード発動！ 『裸人への覚醒』発動！」

裸人「な、なにいつ！？ 台詞の前に付く固有名詞が裸人になっただと！？」

霧唾「くはははははは！ これが作者の力だ！」

裸人「くそっ、だが感想の返信の時とは違うぜ！ 今回は力付くでラジルに戻してやる！」

霧唾「ならば恐れずして掛かって来い！ その先にあるのは裸人としての快樂だがな！ はっハッはっハッはっハッ！」

キリア「馬鹿と糞野郎が暴走したから今からは僕が今回の話の捕捉をするよ。暗殺者諸々は上記の通りに暗殺者襲撃フラグ……、と言つても本文に書かれた人外スペックの奴ではないんだけどね。僕の過去の事や、少しだけ書かれた化け物の枠に収まるかすら疑問な六人などは、霧唾曰く来るべきモンハン編のための布石らしいよ」

霧唾「何故だ！？ 何故絶望的戦力差でありながら諦めず戦い続ける！？ その先にあるのは裸人としての快樂だけだと言うのに！」

裸人「勝手に決め付くんじゃねえ！ 絶望的戦力差だろうとなあ、
護りたいものがあんだよ！ だから、諦めずに戦い続けるんだ！」

霧唾「愚かだ！ 不確かな希望に縋り付き、見えぬ未来に諦めなど
せず戦い続けるだと！？ 確かにそれは美点だろう。だがそれ以上
に愚かな事だ！ どうせお前は裸人として死ぬんだよ！ だから、
さっさと諦めて裸人としての快楽に目覚めろ！」

裸人「そんな人生糞喰らえだ！ 愚かだろうとなあ……、人間は諦
めず戦い続ける事で、理不尽を跳ね退け化け物を倒してきたんだ！
だから、俺も理不尽てめえに諦めはしねえ！」

キリア「シリアスなのかギャグなのかわからない展開が繰り広げら
れてるけど、見なかった事にしよう。読者の皆もそうするんだよ？
悪魔との約束だ。それじゃ、次回の『第六話：副担任な俺と生徒
な彼女達。そしてもう一人の転生者』でまた会おうね。ばいばい」

第六話・副担任な俺と生徒な彼女達。そしてもう一人の転生者（前書き）

かなりあれな転生者登場！ の回（殴）

第六話：副担任な俺と生徒な彼女達。そしてもう一人の転生者

「くそつ、頭がいてえ……」

空が明るくなり始める頃までエヴァ達と酒飲みをしていたからなのか、物凄く頭がいてえ。

不完全だとは言え、不老不死の俺が二日酔いになるとはな……。

「就任前日に酒なんて飲むからですよ」

俺の横を歩いていたタカミチが苦笑いしながらそう言ってくる。

今俺達は麻帆良学園女子中等部の校舎を歩いている。わかっているとは思うが、二年A組の教室……つまり原作でネギが受け持つクラスの教室に向かって、だ。

「仕方ねえだろ。あんなに嬉しそうなのエヴァの顔を見たら断る気なんか起きねえんだよ」

「相変わらずエヴァには甘いんですね」

もう一度言うが、仕方ねえだろ。考えてみるよ。後光が見える程の輝く笑顔で「ラジル！ 今日朝まで飲むぞ！」なんて言われるんだぜ？ 断れるか？ 俺は断れねえ。むしろ喜々として賛成するぜ。

「ああ、そういえばラジルさん。これを」

そう言って何かの資料らしきものを俺に渡すタカミチ。それが何なのか疑問に思い口を開く。

「何だ、これは？」

「クラス名簿ですよ。目を通しておいて下さいね」

「おう、わかったぜ」

早速とでも言えば良いのか、クラス名簿を開く。そしてそこにあった原作には存在しなかった人物の顔写真を見付け、その人物の名を思わず呟いてしまう。

「このえくれは近衛紅葉……」

『紅き翼』の一員であり英雄でもある、現在は関西呪術協会のトップに君臨している近衛詠春の子供。そして関東魔法協会のトップつまりあの爺さんの孫娘でもある、裏表問わずの超VIPな人物。それと同時に、利用されれば裏のパワーバランスを簡単に崩される重要人物。

そして、原作には存在しなかった人物。転生者がどうかはわからねえが、それはこれから副担任として接する内に判断していけば良いだろう。

これは俺がエヴァの賞金取り消しに各地を渡り歩いていた時に知った事だが、何でも『千の呪文の男』サウザンドマスター ナギ・スプリングフィールドすら上回る莫大な魔力保持者であり、それと同時に莫大な気の所有者。その他にも符術に関しては近代稀に見る才を持つ天才少女らしい。

だが、そんな天才少女にも欠点だってある。これも各地を渡り歩いていた時に知った事だが、魔法を使えない体質らしい。

ナギを越える膨大な魔力を持ちながらも、それを完全に使う事が出来ない。宝の持ち腐れとは正にこの事だと思う。

まあ、それを補って余りある気の量や符術の才があるから、弱い訳ではなく、強いらしい。

そして、その事を皮肉られて『欠落神童』なんて呼ばれている逸話には事欠かない人物。

「ラジルさん。僕が呼んだら入って来て下さい」

俺の呟きが耳に入らなかったのだろうタカミチがそう言うて来る。つてか、何時の間にか目的地に到着していたらしく、二年A組であるう教室の扉が目の前にある。

「おつ」

それに短い返事をするとうタカミチは教室の中に入っていく。それを見送った後、呟く。

「あー、くそつ、頭がいてえ」

廊下まで届く教室からの喧騒に頭が痛くなる。正直に言えば今すぐにも静かな場所に行き、このうるさい教室から離れたいが、就任前日に酒なんか飲んでいた俺が悪いんだし、我慢するしかない。

そのまましばらく頭痛と格闘していたが、ふと聞こえたタカミチの声を聞き、教室の扉を開き中に入る。

そしてそのまま足を進めて、教卓の前で足を止める。

「今日からこのクラスの副担任をする事になったラジル・アルファードだ。至らねえ点もあるだろうが、よろしく頼む」

「彼は教師になったばかりで、麻帆良に来たのもつい最近だから、皆、あまり困らせないようにするんだよ」

俺が自己紹介をしても、タカミチの補足説明を聞いても、何故か目に映る32人の少女達は黙ったまま。

そういえば俺が教室に入ってから、さっきまでの喧騒が嘘のように静かになつたな。

それ等に疑問を持った俺はタカミチに向けて口を開く。

「なあタカミチ。どうしてこんなに静かなんだよ？」

俺がそう聞きながらタカミチに視線を向けると、苦笑いしているタカミチの姿が視界に入る。

それに疑問を持ち、口を動かそうとした瞬間、大声　否、轟音が鳴り響いた。

「かつ……、かつこいいいいいいいいいい……！」

その轟音は校舎全体を揺るがしたと思える程に強烈で、俺はそれを耳を塞ぐ事も出来ずに聞いた。聞いてしまった。

二日酔いの俺が聞いてしまったんだ。後は、わかるな？

「　　っ！　頭がいてえ。物凄く………」

一瞬気絶したぞ。二日酔いとは言え、声だけで人を一瞬気絶させるとは……、さすが2・Aとでも言えば良いのか？

そしてその2・Aの生徒達は、俺の頭痛を気にせず　　と言いか知らないんだろうが　　に、ゆきなだれ雪雪崩のような激しい勢いでこちらに近付き、嵐のような勢いで質問をしてくる。

勿論の事、聖徳大使ではない俺はそんな勢いでぶつけられる質問の全てに返事する事など出来ない。

「頭がいてえ……。半端なく」

これからこの元気過ぎる少女達と毎日のように会うのかと思うと、二日酔いとは別の意味で頭痛がする。

いや、まあ、元気なのは良い事だぜ？ だけどよう、限度ってもんがあんだろ？

Side out

Side 紅葉

突然だが、私は所謂転生者なのだ。

近衛詠春の娘として、近衛近右衛門の孫娘として、近衛木乃香の双子の姉として転生した私は、勿論の事、平凡とは程遠い天才少女だ。

後は、わかるな？ そう、私は、私こそが主人公なのだよ！

何やら他にも転生者っぽい奴は数人いたが、そんな奴らは決して主人公にはなりえないのだ！ 何故なら、私のような華麗で美麗で綺麗で気高い少女が、最も主人公に相応しいからなのだよ！

……まあ、前世で見た在り来たりなチートでハーレムな二次創作の主人公のようにはならなかったのだが。それでも幼い頃から共にいた木乃香や刹那は私に好意を寄せている。……何い、光源氏だと？ 良いではないか！ 光源氏万歳！

「早速質問。名前と身長と体重は？」

「名前はさっき言っただろうが」

「お約束って奴だよ。ほら、答えてよ」

「わあつたよ。名前はラジル・アルファード。身長は大体185前後。体重は60前後だ」

そして、そんな私の前では金髪金目のラジル・アルファードと名乗る青年が麻帆良のパパラッチこと朝倉和美に質問されている。

「身長と体重が曖昧なのは何で？ まあ、良いや。次の質問、出身は？」

何と言う事なのだ！ 主人公である私の前でどこその二次創作の主人公のように質問されている不埒な輩がいるだと！？

……ん？ そういえば、ラジル・アルファードと言えばあの『金色の精霊王』の本名ではないか！ 見た目も噂通り金髪金目のイケメン。まさかあ奴が『金色の精霊王』なのか！

ええいつ！ 私を置いて主人公っぽい通り名で呼ばれおつてからに！ ……かつこいいではないか。

「じゃあ、これが最後の質問。このクラスで好みの人は何？」

「……おい、黙秘権は通用すんのか？」

「通用しないよ。ほら、さっさとぶつちやけて」

……ふう、少し気が動転していたみたいなのだよ。落ち着かなければ……。

そう思い、ふと教室を見回すとある人物が視界に入る。

な、にい……？ どこそこの二次創作の主人公のように質問されている不埒な輩に、あのエヴァンジェリンが熱い視線を向けているだと！？

ありえん！ この私がとってもあれな勢いでアタックしていた時は、心底邪魔そうに追い払われ、相手にすらしてくれなかったと言うのに！？

「あー、エヴァだな」

「……もしかしてラジル先生ってロリコン？」

「馬鹿、ちげえよ！」

『金色の精霊王』の言葉を聞き、満足げな表情をするエヴァンジェリンが視界に入る。

何故なのだあああ！？ 何故っ、私には見向きすらしてくれなかったのに、『金色の精霊王』の言葉を聞いてそんな顔をするのだ！？

私の通り名がかっこよくないからなのか！？ 『欠落神童』だからなのか！？

……それとも、私は主人公ではないからなのか？ 否！ 私こそが主人公なのだ！ 『金色の精霊王』など主人公ではないのだ！

『欠落神童』こそが主人公だと『金色の精霊王』に証明しようではないか！ 勿論実力行使なのだかな！

爺上が今日の12時に新しい警備員との顔合わせを兼ねた歓迎会をすると言っていたしな！ その時はこの私があ奴の相手をするように爺上とOHANASIしなくてはな！

ふはははは！ 見ているよ『金色の精霊王』！ 主人公はこの私、『欠落神童』こと近衛紅葉なのだ！

裸人「いやいやいやいや、何だよこれ！ 何で最後に物凄くマッチョになつて見るからにやばい禪一丁になるんだよ!？」

霧唾「龍夜から裸人の胃袋に送られたドーピングコンソメスープと、裸人が履くように転移された見るからにあれな禪を有効活用しようと思つて、ほんの少しの遊び心で撮影した激レア（色んな意味で）ムービーだよ？ 何か可笑しい事あつた？」

裸人「あるからな！ 可笑しい所が満載だからな！ 第一、俺こんな事してねえぜ!？」

霧唾「そんなに可笑しいかなー？ まあ、良いか。裸人にその時の記憶がないのは、自分の邪気眼にある108個の能力の一つ、暗示で操つていたから当然でしょう?」

裸人「何を当たり前の事を聞いてるんだよこいつ。みたいな顔で言うんじゃねえ！ つかてめえ、そんな非道な事して心が痛まねえの!？」

霧唾「だつて裸人に対する良心なんて持ち合わせちゃいないし……」

裸人「喧嘩売つてんのかゴラアツ!」

霧唾「えー？ 買えるのー?」

裸人「買えるからな！ 買えねえ訳ねえからな!」

霧唾「じゃあ、一兆円払つてね」

裸人「金取るのかよ!？ つーかたけえよ!」

キリア「さつきからうるさいよ」

紅葉「そうなのだ！ 私を置いて話を進めるな、なのだ！」

霧唾「ごめんごめん。何故かさつきから裸人が突っ掛かって来てさ」

裸人「そうさせてるのはためえだろうがよ！」

キリア「あれ……、どうしたんだい裸人。まさか他称裸人から自称裸人にジョブチェンジしたのかい？」

裸人「はっ？ 何言ってるんだよ？」

紅葉「貴様、主人公であるこの私にそんなみすばらしい姿を見せるな、なのだ！」

裸人「……なっ、何で禪一兆になってるんだよ！？ しかも物凄くマッチョだし！ 何時の間にしたんだよ！」

霧唾「気付いてなかったの？ ってか、あの撮影はついさつきしたからそのままの状態なのは当たり前前の事だろうに」

裸人「これも全部、霧唾と龍夜のせいだ！ 何時か絶対ぎゃふんと言わせてやる！」

霧唾「ぎゃふんｗｗｗｗ」

？「ほう？ それは聞き捨てならんなー」

裸人「………は？ え？ え？ 何、でここに……？ って、や

めっ、アッ——！！

第七話：二つの歓迎会。 欠落神童の力と精霊王の暴力。（前編）（前書き）

心なしかキリア視点よりラジル視点の方が多い気がするこの頃。

注*意図的に描写してない点があります。

第七話：二つの歓迎会。欠落神童の力と精霊王の暴力。（前編）

月が雲に覆われ、空を闇が支配した深夜に、麻帆良学園の敷地内にある世界樹広場で、所々が傷付いた巫女装束を身に纏ったポロポロの少女の叫び声が響き渡った。

「なっ、何なのだソレは！」

恐怖で引き攣った言葉に、少女と向かい合う金色の光を纏った青年が言葉を返す。

「『アーマー・オブ・スピリット（精霊の鎧）』だ。『金色の精霊王（俺）』を『金色の精霊王（俺）』たら占める要因の一つ。精霊王だけが身に纏う事を許される至高の防具」

「精霊王だけが……だと？ ふざけるな！ ならば何故人間である貴様がソレを身に纏っている！ 戯言も大概にするのだ！」

金色の光を身に纏った青年 『金色の精霊王』と呼ばれるラジール・アルファードの返答を耳に入れ、巫女装束に身を包んだ少女 近衛紅葉が発した声には、否定的な言葉遣いとは不釣り合いの焦燥感が含まれている。

「戯言かどうか、試してみろよ？」

「言われずとも、そうするのだ！」

近衛紅葉はそう言うと同時に、腰を軽く落として足を半開きにし、両手を前に突き出す。

それを聞き、見て、近衛紅葉は自らの勝利を確信した。

それも仕方がないだろう。何せ『相剋球・鬼神殺し』は彼女が持つ最強の技。それが当たったのだ。

仮にラジル・アルファードが纏う金色の光が、彼の言う通り精霊王だけが身に纏う事を許される至高の防具などと言う大層な物であったとしても、『相剋球・鬼神殺し』には至高の防具であるうと壊せる破壊力がある。故にラジル・アルファードが纏う光が彼の言う通りの代物であったとしても、それごとラジル・アルファードを壊したと近衛紅葉は考えていた。それが精霊王の脅威から逃れるための無意識下での勘違いだとは気付かずに

「ふははははは！ 私の勝ちなのだ！ この私の、勝ちなのだ！
やはり、主人公は『金色の精霊王』などではなく、この私なのだ！
『欠落神童』、近衛紅葉なのだ！」

漆黒の空に向けて顔を上げて、喜びや嬉しさ、自信や誇りがありありと見て取れる眼を月を覆い隠す雲に向け、高らかに嗤い声をあげる近衛紅葉。

その姿は不気味でありながらも、作り物めいた美しさを放っている。だが、そんな光景は、突如響き渡った声に終わりを告げられる。

「はんっ、その程度か」

「っ！」

土煙の中から響く声を聞き、近衛紅葉は息を呑む。

そして、声が聞こえた方向　土煙に驚愕で満ちた視線を向けて、ヒステリックな怒声をあげる。

「何故、貴様はまだ立っているのだ！？　可笑しい、可笑し過ぎる

心底呆れたとでも言うような盛大な溜め息を吐く。

「はあ……。もう良い、自称主人公はさっさと舞台から降りろ」

土煙の中からその姿を現したラジル・アルファードは、そう言いながら右手を前に出す。

「『精霊達よ、王足る我が声の下に集い、ありとあらゆる障害を破壊へ導く絶対の剣と化せ』」

その言葉が発せられた次の瞬間、突き出されたラジル・アルファードの右手に金色に輝く光が収束されていく。

「『具現せよ！ ソード・オブ・スピリット（精霊の剣）！』」

収束された金色の光は、月の光にも劣らぬ圧倒的な存在感を醸し出す大剣を形作った。

「刮目しろ！ この剣こそが精霊王だけが振るう事を許される至高の武器！ 『金色の精霊王（俺）』を『金色の精霊王（俺）』たらしめる要因の一つだ！」

その大剣を腰部で構えながらそう言ったラジル・アルファード。

金色の光を身に纏い、金色の光を手を持った、月光を浴びるその姿は、『金色の精霊王』などと言う大層な通り名に恥じめ威風堂々とした雰囲気醸し出して、その姿を見た近衛紅葉は声を張り上げる元気もなくなったのか、茫然自失としながら蚊の鳴くような小さな呟きを漏らす。

「化け、物……め」

近衛紅葉の眩きはラジル・アルファードには届かず、彼女に化物と言われた彼は何事もなかったように口を動かす。

「恨むんだったら、不機嫌な俺に突っ掛かった自分の愚かさ^{てめえ}を恨みやがれ！ 『ムーンライト・ルイン（破滅の月光）！』」

言葉と同時に左下から右上に振り抜かれた『スピリット・オブ・ソード（精霊の剣）』。

その刀芯から放たれた金色の月光は圧倒的暴力となり、振るわれた『スピリット・オブ・ソード（精霊の剣）』の軌道を真つ直ぐと突き進む。

はてさて、金色の月光が牙を突き立てるのは未だ茫然自失としている近衛紅葉なのか……。

時は数時間前に遡り、場面は麻帆良学園女子中等部の屋上に変わる。

Side ラジル

「はあ……………」

漸く^{やうやく}副担任の仕事が終わり、気分転換に屋上に来た。

そして、今日一日を振り返ってみると、つい溜め息を吐いてしま
う。

だってよお、2・Aの生徒達は何の躊躇ためらいもなく俺にダイレクト
アタックしてくるし。……まあ、ただ大声を出してるだけなんだが、
二日酔いの俺にはきつい。

その他にもロリコン疑惑が立つは、近衛紅葉らしき奴には物つ凄
い眼光で睨まれるはで、兎とにかに角疲れた。

「……ん？」

しばらく屋上でぼーっとしていたら、ふと屋上にある扉の奥
階段から足音が聞こえた。

誰だろう。と疑問に思い、その方向に視線を向ける。

そして、足音が消えると同時に校舎内と繋がっている扉が開き、
そこから綺麗な黒髪を腰部にまで真っ直ぐに伸ばし、くりくりとし
た漆黒の瞳を持つ、人形と見間違うような端正な容姿の美少女が出
て来た。

「ふっはっはっはっ！ 良く聞け『金色の精霊王』！ 一度し
か言わぬのだ。今日の夜12時に世界樹広場に来い！」

「……は？」

屋上に来て早々にそう言った美少女 近衛紅葉。

その言葉を聞き、つい間抜けな声を出してしまうのは仕方ねえだ
ろ？ いきなりこんな事言われたら、鉄仮面でもなけりや間抜けな
声を出すだろうよ。

「爺上が貴様の歓迎会をすると言っておるのだ！ 粹な計らいであ
らうっ。」

いきなりの呼び出しに困惑していた俺に、近衛紅葉はそう言う。その言葉を聞き、納得する。

つまりあれだろ？ 麻帆良に住む裏の関係者達との顔合わせって事だろう。

テンプレ乙。とでも言えば良いのか？

「じゃあ、そう言う事だから、絶対に来るのだぞ！」

そう言いながら、返事も聞かずに屋上の扉を潜り校舎の中に入っていく近衛紅葉。

……何て言うか、忙しい奴だな。

「あつ、忘れていたのだ。今すぐ教室に来るのだぞ——————！」

屋上から去ったと思いきや、又しても屋上に来てそう言った近衛紅葉。

そして、言い終わるとまた屋上から去っていく……。

「忙しいどころじゃねえぞ……。くそつ、頭がいてえ」

二日酔いはまだ続いてんだぞちきしょう……。

それにしても、教室に会い……。か。又してもテンプレ展開で歓迎会か？ きつとそうだろうな……。

またあのうるさい教室に行くのは二日酔いの状態では抵抗があるが、それでも歓迎会だとしたら折角の厚意を無下にしたくはねえし、行くとするか。

「「ようこそ！ ラジル先生ーっ！」」

そんなこんなで2 - Aの教室前に着いて、扉を開いた瞬間、爆音に劣らぬ大声が響き渡った。

「っ」

その声を聞き、又しても一瞬気絶した俺。

おいおいおい、もしかしたら狙ってやってんじゃねえだろうな…。

「ほらほら！ 主役はこっちだよ！」

頭に響く声に痛みを感じて右手で頭を抑えていると、麻帆良のパラッチ 朝倉和美に背を押されて教室の中心に置いてある椅子に座らせられる。

「おやおや？ ラジル先生どうしたネ。もしかや二日酔いかナ？」

ギァアギァアとうるさい声に頭を抑えていると、麻帆良の最強頭脳チャオリンシエンこと超鈴音が話し掛けてきた。

近い未来に敵対するかもしれないねえ要注意人物だが、それでも今は只の一生徒だ。なら、俺は副担任らしく接しなきゃいけないな。…教師生活初日を二日酔いで過ごした俺が真まごも面な副担任として接しられんのかと聞かれたら返答に困るけど…。

「おい、何でてめえが知ってたんだよ！」

「麻帆良の最強頭脳を舐めてはいけないネ。そんな事、ちょっと集中して見るだけで丸わかりヨ」

そう言われて少し納得してしまった俺がいる。
さすが、麻帆良の最強頭脳とでも言えば良いのか？

「ええ、ラジル先生は不良教師なの？」

「お姉ちゃん、そんな事言ったら駄目ですよ！」

超鈴音の言葉を聞いてか、中学二年生にはどうしても見えない、
見た目が小学生な双子 恐らく鳴滝姉妹がそう言う。

……なあ、初日を二日酔いで過ごす副担任って不良教師とは言わ
ねえよ……な？

「これこれ風香殿。あまりラジル殿を困らせてはいかんでござるよ」

不良教師なのかそうでないのか考えていると、鳴滝姉妹とは対称
的な意味で中学生には見えない、語尾にござるを付けるエセ忍者の
声が聞こえた。

恐らく いや、絶対に長瀬楓だろうな。

「ラジル先生！っ！ ほれ、肉まん食うアル！」

「がぼっ！？」

長瀬楓に注意されている鳴滝姉妹。と言う微笑ましい光景を眺め
ていると、突如耳に入った声と共に口に肉まんを突っ込まれる。

「むがっ！ むがご！」

喉に突っ掛かる肉まんのせいで自分でも理解不可能の声をだして

しまつ。

ちよつ、本気と書いてマジと読む勢いで苦しくなってきたぞ！
誰でも良いから水をくれーーーーー！

「何をやっているんだラジル……。ほれ、水でも飲め」

俺の心の叫びが聞こえたからなのか、エヴァが呆れたような顔をしながらも水を持って来てくれた。

俺はそれを物凄い勢いで飲んでから、肉まん地獄から救ってくれたエヴァに満面の笑顔で感謝の意を示す。

「ありがとうエヴァ！ 愛してるぜ！」

「ふんつ、感謝される程の事ではな……い」

「どうしたんだエヴァ？」

尻すぽ窄みの言葉に疑問を持って俺はそう問う。

何故か顔が赤いけど、どうしたんだ？ 周りの生徒達は何故かキヤーカーとつるさいし……。

「なつ、何を突然言い出すかーーーーー！」

エヴァの顔が何故赤いのか考えていると、突然エヴァが叫び声をあげる。

その音量は校舎中に響く程大きくて……後は、わかるな？ 薄れかける意識の中ふと耳に聞こえた言葉を否定したいと思しながらも、沈んでいく意識に逆らう事も出来ず、否定出来ないまま俺は気絶した。

「ラジル先生って……やっぱりロリコン？」

そして、次に目覚めた時には、既に歓迎会は終わっていた。……
散々だぜ。

第八話：二つの歓迎会。欠落神童の力と精霊王の暴力。（中編）（前書き）

七月十一日

・ S a d e を S i d e に修正。

・ 『スピリット・オブ・〜』を『〜』・オブ・スピリット』に修正。

第八話：二つの歓迎会。 欠落神童の力と精霊王の暴力。（中編）

突然だが、一人の男の話をしよう。

その男は何の取り柄もない平凡　　何の取り柄もない事を平凡
と言つて良いのかは定かではないが　　な男だった。

そんな凡人が歩んだ人生は、塵程も珍しくもない在り来たりな人生。その人生を知っている人からすれば、未来でも変わらないと断言出来る程に。

だが、そんな人生にある日転機が訪れる。

そのきっかけは目の前でまだ十にも満たぬ子供がトラックに轢かれそうな場面に出会くわした事だ。

平凡過ぎる男はその事態を見て正義感でも湧いたのか、己の命など顧みずにその子供を助けた。

そして、子供を助けた代償はその男の命であった。

だが、男は自らの死を悲しむでもなく、理不尽な死に憤慨するでもなく、ましてや喜ぶでもなく。ただ、嗤わらった。

平凡過ぎる男が歩んだ平凡過ぎる人生の終わりは、決して平凡とは言えない最期だった。とその男は自らを嘲笑う。

そして男は自らを嘲笑いながら息を引き取った。

そのまま男の意思は消え失せるはずだった。だが、死んだ男は再び目覚めた。

そこは天国でも地獄でもなく、生前に住んでいた家でも死に際を過ごしたアスファルトでもなく、ただただ空虚なだけの空間だった。数秒か数分か数時間か、数日か数ヶ月か数年かもわからなくなる程に何も無い空間。

しばらくその空間でぼーっとしていた男の目の前に、突如神を名乗るナニカが現れた。

そして、そのナニカは平凡な男にこう問うた。

今再び、生を掴む気はないか？

それに対し、平凡過ぎる男はこう返した。

掴めるんだったら、もう一度生を掴みてえ

その答えを聞き、ナニカは満足そうに嗤った。その嘲笑いを隠そうともせず、ナニカは言葉を放つ。

ならば、今一度掴んでみせる。その生を手放すか否かは貴様の自由だ。そうだ、餓別代わりに異能チカラをくれてやるう。これさえあれば生きる事も楽になるだろう

そう言ったナニカの言葉を聞いた直後、平凡過ぎる男の意識が暗転した。

そして次に目覚めた時には、その男は平凡などではなく、明らかに特殊な男になっていた。

その平凡な男から特殊な男に変わった男が目覚めて一番に体験した事は、戦争だった。

右を見れば切り合う者達。左を見れば殴り合う者達。後ろを見れば突き刺し合う者達。前を見れば殺し合う者達。上を見れば空を飛びながら火を放ち、風を起こし、水を流し、雷を轟かし、光を輝かし、闇を生み出し、それらを使い滅ぼし合う者達。

残酷で残酷で冷酷で非現実的な戦場。

目覚めたらその場にいた男は特殊な体験をして、特殊な能力を持つて、特殊な体質になりはしたが、未だ精神は平凡なままだった。勿論、平凡な精神の持ち主がその場で平常心を保てる訳がなく、その男の自我は壊れた。

その後の事を男はあまり覚えていない。だが、全てを覚えてない訳ではない。

大戦が終わった事により再び平常心を取り戻した男は、記憶の断片にある自らの非道な行いに絶望した。

自らの前に立ち塞がるのならばどれだけ幼い少女だろうと殺した。自らに敵対するのならばどれだけ美しい女性だろうと殺した。

自らの生を邪魔するのならばどれだけ無垢な少年だろうと殺した。殺す、こゝろす、クロス。ひたすら殺す。

夢に見た自らの姿は、英雄などと持て囃されて良い筈がない只の虐殺者だった。

それなのに、出会う人々は自らを英雄だと持て囃し、讃える。

それがどれだけ残酷な事だろうか。

その事に取り戻した平常心を擦り減らされた男は、まるで十二力に取り憑かれたように人助けを始めた。

来る日も来る日も困っている人を助ける。その行いはもしかしたら罪拭いだったのかもしれない。

だが、いくら助けても男は罪の意識を拭えなかった。

それでもひたすら助け続けた男は、ある日崖から落ちそうな少女を助ける。

助けた男と助けられた少女。その二人が惹かれ合うのは、もしかしたら必然だったのかもしれない。

永遠の時を生きる少女と男。思い出したくもない過去を持つ少女と男。認めたくない現実を体験した少女と男。人とは掛け離れた肉体を持つ少女と男。

その二人は互いに寄り添い合い、傷を舐め合い、惹かれ合った。

だが、それでも男は少女と共にいる事に苦痛を感じていた。

少女が嫌いな訳でも不愉快な訳でもない。

虐殺者の分際で幸せなど手に入れてはいけない。虐殺者は虐殺者らしく過去の行いを悔い続け、罪拭いのためにひたすら人助けをしていけば良い

そう男は思っていた故に、少女から離れようとした。だが、少女はそんな事許さなかった。

もう良い、貴様は充分助けたんだ。だから、今は自分のために動いて良いんだぞ

少女が言ったその言葉に顔を歪めた男は、それでも助けなくてはいけないと主張する。それに対して少女がした行動とは、全力の張り手だった。

この戯け者が！ 貴様は只自らの胸中に潜む虐殺者から逃げているだけだ！ 怖いのだろう！？ 再び虐殺者になるかもしれない自分が！ 貴様は仮にも英雄だろう！？ ならば、虐殺者を恐れるのではなく、立ち向かってみせる！

その言葉を聞き、茫然自失となっている男に少女は続けざまにこう言った。

何、もしも貴様が再び虐殺者に成り果てたのなら、その時はこの私が正気に戻してやる

……じゃあ、その時は頼むぜ

この後の話は少女と男 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとラジル・アルファードだけの秘密。

だが、一つだけ教えよう。この日からエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはラジル・アルファードにとって何よりも優先すべき者となった。

そんな少女が化け物などと言われている場面を見たら、彼 ラジ

ル・アルファードがどうなるかは、わかるな？

「殺されてえのか、てめえら」

S i d e タカミチ

「殺されてえのか、てめえら」

ラジルさんの憤怒に染まった声を聞き、胸中から焦燥感が湧き出てくる。

不味い不味い不味い。不味いぞ！

あれは脅しなんかじゃない。本気で殺す気だ。

くそっ、あれだけきつくエヴァの悪口は言うなと注意していたのに、どうして化け物なんて言うんだ彼等は！

……今それを考えても後の祭りだ。今はラジルさんを落ち着かせよう。

「ラジルさん！ 落ち着いて下さい。何も殺す必要はないでしょう！」

「俺は落ち着いている。あいつらはエヴァに化け物なんて言ったんだ。万死ですら足らねえ」

どこが落ち着いているんですか！ そう言おうとしたが、それよりも先に耳に入った言葉に遮られる。

「なっ、何故貴方の方が化け物を庇うのですか！ 理解出来ません！」

魔法先生の一人がそう言った事により、所々でそうだとそうだと賛同の声があがる。

馬鹿！ 今ラジルさんにそんな事言ったら

「ちっ、てめえら。本気で死にてえようだな」

こうなるのに！

そして、その言葉を放った後、ラジルさんは続けて口を動かす。

「

、

」

「っ！？」

辛うじて聞こえた言葉の断片を聞き、驚愕する。

まさか、アレをする気なのか！？ アレはもう使わないとラジルさん自身が決めたはずなのに！

アレを止めようと今から動いたとして、間に合うか？ 否、アレが先に発動する！

くそっ、ただでさえ人手不足の上、悪魔（彼女）のせいで一杯一杯なのに！ 此処に来て人手不足が悪化するような事になったら、関東魔法協会 延いては麻帆良が歴史上最大の危機に曝される事に！

「やめんかラジル！」

どうにかしてアレの発動を止めようと思考していたら、先程化け物と言われた彼女 エヴァがラジルさんに制止の声をあげる。

人任せだけど、これでラジルさんが止まってくれたら……。

「何で止めんだよエヴァ！ あいつらはエヴァに化け物なんて言ったんだぞ！？」

「そんな事を一々気にするな。第一、あいつらなど殺す価値もないだろう」

「……ちっ、おいてめえら。今回はエヴァに免じて見逃してやる。だが、次はねえぞ？」

ラジルさんの言葉を聞き、安心半分不安半分の何とも言えない感覚を覚える。

恐らく彼等はまたエヴァの事を化け物と罵るだろう。そうなれば間違いなくラジルさんの逆鱗に触れる事になる。そうなればきっとラジルさんは止まらない。今度こそエヴァを化け物と罵った彼等は殺される。

そうならないよう、今まで以上に注意を厳しくしないと……。

「くっ、私としたことが寝坊してしまうとは……。何たる不覚なのだ！」

ラジルさんが放った言葉のせいなのか、先程とは打って変わって静かになったここ。世界樹広場に、突如鈴の音色のように透き通った声が響き渡る。

その方向に視線を向ければ、巫女服を着た小学生と見間違いそうな少女。近衛紅葉と、麻帆良学園女子中等部の制服を着た黒い髪をサイドポニーにした少女。桜咲刹那が視界に入った。

「起こしてくれと言っておったのに、何故起こさなかったのだ刹那
—————！」

「どれだけ起こそうと四苦八苦しても起きなかったのは紅葉お嬢様でしょう!？」

「むうー、私のせいにする気なのだな! ええいつ、後でお仕置きなのだー!」

「そんな理不尽な!」

「反論は聞かぬのだー!」

手をじたばたと忙しく動かしながら声を張り上げるさまは、正直言わなくとも中学生にはとても見えない。

刹那君も刹那君で、否定的な言葉を言っているがその声には仄かな喜色が滲んでいる。

その光景を眺めて相変わらずだなーなどと思う反面、空気読めよとつい声に出したくなってしまふ。

「む? どうしたのだ貴様等、やけに静かではないか」

漸く、とでも言えば良いのか、周囲の静けさに気付き、疑問の声をあげる紅葉君。

それに答えたのはラジルさんでも僕でもなく、黒い髪を腰辺りまで伸ばした褐色の肌の少女 龍宮真名。まあ、少女と表現すると違和感を覚える程にグラマーな、中学生らしからぬ肉付きだけど。

「と、言う訳だよ」

「ほうほう、そんな事があったのだな」

事情を聞き終えた紅葉君はそう言った後、如何にも人を馬鹿にし

たような嘲笑を浮かべ、口を開く。

「英雄の一人ともあるうお方が、たったそれだけの事で癩癩を起すとは……。存外に、英雄様は底が浅いのだな！」

「くっ、紅葉お嬢様！ そのような事を言っではいけません！」

皮肉げな嘲笑とともに放たれた言葉を聞き、驚愕しながらも刹那君が口を慎むように言う。

そして、刹那君の声に一拍遅れて僕も口を開く。

「紅葉君！ 君は何て事を言うんだ！」

ラジルさんにとってエヴァは何よりも大事な人。それこそ、ラジルさん自身の命よりも……。

そのエヴァを目の前で化け物と罵られた事を、たったそれだけの事などと言われたら、間違いなく彼は怒る。

しかも、エヴァが罵られたのはつい先程で、ラジルさんはその時の鬱憤を晴らしてはいない。

そうなれば紅葉君が言った言葉は自殺行為とも取れる。故に、これ以上の暴言を言わせないようにしないと……。

そう思っ言っただけど、

「何、真実を言っただまでのだ！ はーっはっはっはっはっはっ！」

僕の 否、僕達が放った言葉の返答は、ラジルさんの機嫌を更に悪くする一言だった。

「てめえ、人が黙ってりゃあぬけぬけと……。たったそれだけの事だど？ てめえは化け物って言われる辛さがわかってそう言ってん

のか、ああ、！？」

彼 否、『紅き翼』に所属している殆どが化け物と言われても可笑しくない戦闘力を有している。

『英雄』のネームバリューがあるからこそ大衆はあまりそう言わないが、それでも彼等を化け物と言う人は決して少なくない。

だからこそ、彼等は化け物と言われる辛さを知っている。しかもエヴァは望んで化け物になった訳ではない。エヴァを化け物と罵る人間達の一部にそうさせられた。

そのエヴァを化け物にした一部の人間と同じ枠組みに入る人間に化け物と言われる。その事をたったそれだけの事と言われれば彼が怒るのも仕方ないし、正直言えば僕もかなりムカツと来た。

しかも、ラジルさんにとってエヴァは何よりも大事な人だ。それこそ、ラジルさん自身の命よりも……。そうだったのにはそれなりの理由があるのを僕は知っている。その理由を知っているからこそラジルさんの気持ちもわからなくはない。

きっと彼は今にでも紅葉君を完膚なきまでに潰したいんだろう。

その気持ちもわからなくはない。だが、紅葉君はあんなのでも関西呪術協会の長 詠春さんの娘だ。そんなVIPな人物が、関西呪術協会の一部にとって敵地とも言える麻帆良で重傷を負ったとなれば、関西呪術協会が黙ってはいない。もしかしなくとも東と西の間にある亀裂が致命的なものになり、大きな抗争が始まるだろう。

それは絶対に避けたい。だから、ラジルさんがまだ何もしてない今の中に紅葉君に前言撤回させてラジルさんの怒りを沈めなくてはいけない。そう思い口を開こうとするが、紅葉君の発した言葉を聞き、言葉が詰まる。

「知っている訳がないのだ。何故なら私は貴様等と違って化け物ではないからな！」

まだ、あの娘はラジルさんの神経を逆撫でる気なのか！？
一瞬驚愕するも、直ぐにあの減らず口を止めようと声をあげる。

「いい加減にしろ紅葉君！ 今すぐ前言撤回するんだ！」

「むう、先程からうるさいのだタカミチ。大体、何故前言撤回しなければいけないのだ？」

僕の声聞き、心底不愉快そうにそう言った紅葉君。後半は心底不思議そうに言った事から、たぶん事の重大さをわかっていないのだろう。

「うるさくさせてるのは君だ」「もう良いぜタカミチ」「

再び口を動かして発した声は、ラジルさんが発した背筋が凍る程に無機質な声に遮られる。

その声は過去 大戦時の壊れていたラジルさんを連想させ、その声を聞き、焦燥感ではなく絶望感が胸中から湧き出る。

だがそれでも、未だ大戦時のラジルさん程ではない。今ならまだ間に合う！ そう自分に言い聞かせる事で自らを奮起させ、声を張り上げる。

「ラジルさん！ まさか紅葉君を殺そうなんて思ってますか！？」
？ それがどれだけ危険な事かわかってますか！？」

あの無機質な声とは裏腹に、ラジルさんの瞳は今直ぐ紅葉君を殺してしまおうと思える程に強烈な怒りを秘めている。その瞳を見て最悪の事態が脳裏を駆け、つい確認してしまう。

「殺しはしねえよ。それがどれだけ危険な事態を引き起こすかわか

つてるからな……」

その声を聞き安心する反面、疑念が沸く。

ラジルさんはエヴァに異常な程に依存してるし、それに比例してエヴァをとっても大切にしている。

それこそ、エヴァを研究材料にしようとした違法の魔法使いと、その魔法使いが雇った護衛を塵にする程に……。それ事態は何て事はない。訳ではないが、まだ自己防衛で片付けれる。だが、問題なのは塵にされた魔法使いとその護衛ではなく、それを迎撃した時の周囲への被害……。噂では地形を変えた程と言われている。

その噂を鵜呑みにする訳ではないが、それでもオーバーキルだったのは確かだとラジルさん本人が言っていた。

そんな人が殺しはしない？ 否、そんな人だからこそ、抗争の可能性を考慮して殺しはしない……。か。

僕の予想が正しければ、ラジルさんはきっと

「殺しはしねえが、死なない程度に痛み付けてやる。言っても聞かねえ糞餓鬼には、暴力で教えるしかねえだろ？」

死なない程度に痛み付ける気だ。

「ふんっ、良い度胸ではないか『金色の精霊王』。『欠落神童』の力を以て、その減らず口を悲鳴に変えてやるのだ！」

減らず口はどっちだと言いたい所だが、一触即発の状況でそんな事を言っても一蹴されるだけだ。

あー、もう！ こんな時に学園長は何をやっているんだ！

「ふおっふおっふおっふおっ、すまぬのう。少し遅れてしまったわ
い」

僕の心の叫びを聞いてか、漸く世界樹広場に現れた学園長。その学園長が放った脳天気な言葉に苛々しながらも声をかける。

「少し所ではないでしょう！　今まで何をしてたんですか！？」

「色々と立て込んでおつてのう。まあ、その事は置いといて、儂がいない間に何があつたのか教えてくれんかのう？」

そう聞いてくる学園長に、こうなつた　一触即発の状況になつた経緯を事細かに教える。

学園長だつて無駄に長年を生きてる訳ではない、年の功を發揮してこの状況をどうにかしてくれる。そう小さな希望を持つて説明したが、説明を聞いて一瞬考える素振りを見せた学園長が下した判断は、決して僕が望んでいたものではなかつた。

「ふむ……、そんな事があつたのじゃな」

「それで、学園長の判断は？」

「好きなだけ暴れさせれば良いじゃろう」

「なっ！？　本気ですか学園長！」

学園長の無責任な言葉に驚愕する。

学園長だつてわかつてるはずだ。もしこの地　麻帆良学園で紅葉君が重傷を負えば西がどんな反応をするのか。それをわからない程学園長は馬鹿でも呑気でもない。

なのに何故、紅葉君が傷付く要因となるであろうこの状況を容認するんだ……？

「歓迎会はラジル君を他の警備員達に紹介する事の他に、『金色の精霊王』の力を皆に教えるために模擬戦をする予定があったじゃろ？ その模擬戦の相手にあの娘が立候補しておつてのう……」

何故か青褪めながらそう言った学園長。その言葉を聞き、考える。立候補したのが紅葉君自身であっても、だからと言って抗争の要因となるこの状況を容認する訳がない。……他にもまだ理由があるのか？

「まあ、それはどうでも良い事なんじゃがのう。本音を言うと、ここで紅葉に負けというものを知ってもらいたくての。あの娘は慢心し過ぎじゃ。あのままだとこれから先に必ず無惨な目に会う。そんな事になる前に負けを知り、慢心がなくなれば良いと思ったんじゃ」

なるほど……、納得は出来る。だがそれでも、西と東の間にある亀裂をより一層深くする事を容認出来る程の理由では断じてない。

そう思い批難するような目付きを学園長に送ると、その視線から僕が何を考えているのか気が付いたのか、学園長は沈痛な顔付きで口を開いた。

「死ななければどうとでもごまかせるじゃろう（タカミチ君とてわかっておるじゃろう？ 昨夜の悪魔（少女）は危険じゃ。危険過ぎるのじゃ。それこそいつ儂等に毒牙を突き立てても可笑しくない程に。そうなった時に少しでも抵抗出来るよう、紅葉には慢心など捨ててもらわなくてはならない）」

無責任とも取れる言葉を言いながらも、言葉と同時に念話で伝えてきた内容は孫娘を思う故だと言外に示していた。

その無責任な言動の側面に気付き、言葉が詰まる。

悪魔（彼女）がいつ毒牙を突き立てても可笑しくないと僕自身も思ってしまった事も相乗して、この状況を容認する事に否定しづらくなる。

「っ、今回だけですよ。こんな事を容認するのは！」

「感謝するぞい、タカミチ君」

僕の言葉を聞き、柔らかく微笑む学園長。その笑顔の裏には、きつと溢れんばかりの苦渋があるのだろっ。そう考えると、その要因とも言える悪魔（少女）に沸々と怒りが込み上げてくる。

「では皆の者！ これよりラジル・アルファードと近衛紅葉の模擬戦を開始する！ 二人の戦闘に巻き込まれない位置まで離れるのじや！」

第八話：二つの歓迎会。欠落神童の力と精霊王の暴力。（中編）（後書き）

第八話を見てラジルがキリアに恐怖を抱いた事に違和感を覚えた方への補足説明。

大戦時にラジルの自我が壊れた要因は『戦場』そのものであって、自らに迫る『死の気配』ではない。

大体、大戦時のラジル（壊）は”チート能力”全開で自重などせずに”俺TUEEEEE”状態だったから『死の気配』なんてキリアに会うまで知らなかったっていう……、ラジル……なんて駄目な子なんですよ！

ラジル「おいつ！ そうさせたのはてめえだろ！」

霧唾「あれ……、空耳かな？ やけに裸人っぽい声が聞こえる……」

ラジル「空耳じゃねえよ！ ってか、裸人っぽい声ってどんな声だよ！？」

霧唾「そんな声だよ！」

ラジル「どんだけラジル」裸人の方程式を定着してえんだよ！？」

霧唾「数値で表すとこれくらい……かな？」（全ての指を立てる）

ラジル「十万なのか！？ いや、十億だな！」

霧唾「残念。足の指も合わせて二十兆だよ！」

ラジル「足の指もカウントすんのかよ！？ ってか、二十兆って高

すぎるだろ！？ そんなに俺を裸人に仕立てあげたいのか！？」

霧唾「ふっ、愚問だね。当たり前さ！」

ラジル「胸を張って言うんじゃないー！」

霧唾「だが断る」

ラジル「もう良い……。ん？ そっいえばキリアと紅葉がいねえな？ どこ言っただ？」

霧唾「それは自分もわからないな。気になってキリアと紅葉の部屋に行ってみたら『お持ち帰りー！ー！ー！』はあはあ『みたいなの邪気が漂ってたし、もしかしたら誘拐でもされたんじゃない？』

ラジル「やけに鈍女チックな邪気だな、おい。っつか、あの二人が誘拐されるなんてありえねえーだろ」

霧唾「それもそうだねー」

この時はまだ知らなかった……。この油断がああ残劇を引き起こすきっかけになる事を……。

ラジル「おいっ！ 変なフラグ立ててんじゃないやねえよ！」

霧唾「むしゃくしゃしてやった。反省も後悔もしていない」

ラジル「……で、霧唾には何もなかったのか？」

霧唾「あつたと言えばあつたし、なかったと言えばなかったよ」

ラジル「曖昧だな、おい。で、何があつたんだ？」

霧唾「キリアの部屋に行く途中、廊下でやけに息が荒い人に襲われたんだよねー」

ラジル「おいおいおい、大丈夫だったのか？」

霧唾「見ればわかるよー。じゃあ、その時の映像を見ようか」(リ
モコンを操作)

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「ん？ 何やってんだあの入？」

「はあはあはあはあはあはあ」

「何やってんですかこんな所で？」

「はあはあ……お持ち帰り……」

「うわっ何するやめっ」

「お持ち帰り……」

「HA! NA! SE!」

「君が、泣くまで、俺は抱き着くのをやめない」

「ちよっ、きめえ。やめっ、本当に離っ」

「だが断る」

「くっ、使いたくはなかったが……。『邪気眼！ 発動！』」(ぴ
きーん)

「目があああ！ 目がああああああ！」

「ふっ、見たか！ これが邪気眼にある108個の能力の一つ、直
視した生物の目からタバスコを噴射させる力だ！」

「くっ、覚えてるよ！」

ラジル「いやいやいやいや！ 可笑しいだろ！ 目からタバスコっ

「何だよ！」

霧唾「邪気が成せる業だ」

ラジル「かつこよく言っただってかつこよくはねえからな!？」

霧唾「さてさて、皆さんお待ちかねお便りコーナー！ どんどんば
ふばふ」

ラジル「話し逸らすの下手だなおい！ っつか、そんなコーナーあ
ったのかよ!？」

霧唾「まず一枚目のお便りいってみよー！」

ラジル「シカトか!？ 無視なのか!？」

霧唾「一枚目は『マンゴープリン』さんからのお便りでーす」

ラジル「っ！ マンゴープリンって言えば、龍夜の産みの親じ
やねえか！ 何でそんな奴がここにお便りなんかしてんだよ!！」

霧唾「そうそう。何でここにお便りしたのかは、お便りを見ればわ
かるところだよ。では早速……、ふむふむ」

ラジル「……何て書いてあんだよ?」

霧唾「『ラジルを抹殺せよッ!』だってさー」

ラジル「突然抹殺命令!？」

霧唾「お便りありがとうございましたー！　じゃあ、二枚目のお便りいって見ましょー」

ラジル「おいっ！　何事もなかったように進めるんじゃねえ！」

霧唾「二枚目のお便りは又しても『マンゴープリン』さんからです。二枚も投稿してくれるとは……、御礼に紅葉（巫女服用）の寝顔写真を進呈しますねー！」

ラジル「またなのか！？　またマンゴープリンなのか！？」

霧唾「ええつと、何々？　……『ラジルを抹殺せよッ！』だってさー」

ラジル「また！？　また抹殺命令！？」

霧唾「ラジル……、マンゴーさんに恨まれるような事したの？」

ラジル「断じてしてねえからな！」

霧唾「ふ〜ん……。まあ、良いか。じゃあ、三枚目のお便りー！」

ラジル「何だよその疑わしげな目は！？」

霧唾「別にー……。ふむ、又しても『マンゴープリン』さんからのお便りですー！」

ラジル「二度ある事は三度あるって良く言っよなー！」

霧唾「先程と同様『ラジルを抹殺せよッ！』だってさー。マンゴー

さん、三枚もお便りありがとうございます！ 御礼に戦闘していたら際どい服装になったキリアの写真を進呈しますね！」

ラジル「そこ御礼言う所なのかい！ つか、どんだけ俺に殺意を抱いてるんだよ！」

霧唾「御礼は大切だよ。さてさて、ラジルが何か気になってるよ。うなので、御本人に聞いてみましょう！」

ラジル「おっ、おい！ まさか、呼ぶ気なのか！？ 今呼んだりしたら俺がどうなるかわかってんのか！？」

霧唾「当たり前さ！ と言うことでトラップカード発動！ 『強制召喚』！ 刮目しろ！ これが自分の切り札だあああつ！」

マンゴー「ラジルの抹殺せよッ！」

ラジル「本当に現れやがったあああああつ！？」

マンゴー「ラジルの抹殺せよッ！」

霧唾「マンゴーさんに質問です！ ラジルにどれだけの殺意を抱いてるんでしょうか！？」

マンゴー「ラジルの抹殺せよッ！」

霧唾「ふむふむ、言葉で表現出来ない程にですね！」

ラジル「何で通じてんだよ！？ 明らかに可笑しいだろ！？」

霧唾「作者（神）の必須スキルの御蔭さ！ さて、聞きたい事もなくなつたし、もう殺っちゃって良いですよ」

マンゴー「

ッ！

ラジル「どこのバーサーカーだよ！？ っておいっ、うわっ何するやめっアッ-----

「！

第九話：二つの歓迎会。欠落神童の力と精霊王の暴力。(後編)(前書き)

言い訳(?)は後書きで!

第九話：二つの歓迎会。欠落神童の力と精霊王の暴力。（後編）

見る者を圧倒させる程の壮大な樹木 『神木・蟠桃』。

世界樹とも言われるその木の下で、一言も話さずに睨み合う一組の男女 ラジル・アルファードと近衛紅葉。

沈黙を保ちながら互いを射竦めるように視線を交差させる二人。しばらく続くかと思われたその光景は、痺れを切らした近衛紅葉があげた声によって変化する。

「貴様が来ないのなら、私が行ってやるのだ！」

声と同時に体中に気を送る事で一時的な身体強化を施し、続けざまに足裏に気を送る。そして、足裏に溜まった気を爆発させる。

『瞬動術』や『縮地法』と言われる移動法を用いた事により、放たれた弾丸の如く加速した紅葉は瞬く間にラジルの目前に迫り、移動の勢いを殺さずに握り締めた右拳をラジルの顔面に向けて突き出す。

「口だけの奴かと思ったら、どうやらそうじゃねえらしいな」

紅葉が突き出した右拳を首を動かす事で避けたラジルは、つい先程の瞬動や突き出された右拳を見て、その完成度の高さに認識を改める。と言っても単に速度から威力を予想し、それらのレベルの高さを考えて言っただけなのだ。

「ふんっ、当たり前、なのだ！ 何故なら私は主人公だからなのだ！」

突き出した右拳の勢いに身を任せ、そのまま左足で後ろ回し蹴り。

そこから左手での裏拳。

流れるような動作で放たれたそれらは、又しても空を切る。

「てめえが主人公だあ？ 何だ？ ジョークなのか？ だとしたら、つまんねえジョークだな」

踊るような軽快さで絶え間無く繰り出される拳や蹴りを避けながら、皮肉げに口端を吊り上げるラジル。

それに対して、心外だと言わんばかりに顔を顰めた紅葉は、心底不愉快そうな声をあげる。

「むっ、ジョークなどではない、のだ！」

徐々に速度を上げる攻撃ダンスに、言葉を放つと同時に力を込める。それによって加速した右拳はラジルの胸部に突き刺さる。かと思われたが、ラジルが腰を落とした事により頭上を通り過ぎる。

「ぬっう、何故、当たらんのだ！」

先程から攻撃の悉くが避けられ、それに対して苛々と疑問を感じた紅葉はそう叫ぶ。

勿論、攻撃は続けたままだ。

「てめえの実力が足りねえからだろ？」

「そんな訳がないのだ！ ええいつ、貴様っ、何か狡スルをしているな！？」

呆れた目を向けられながら放たれた言葉に、そう返す紅葉。

だが、そう言ってしまうのも仕方ないと言えよう。何故なら、ラジルの足運びや避け方、防ぎ方などその他諸々がどう見ても素人だったからだ。

それに対して紅葉は一時的とは言え京都神鳴流に手を付け、その他にも様々な武術を馬鹿げた才能で完璧……とまでは行かないが、それなりに扱えるようになってる。

しかも、ある程度扱えるようになった多種多様の武術を加速だけに特化させ、統合した事により出来た、身体を回転させ続ける事で発生する遠心力を用い、徐々に攻撃速度を上げる戦闘技巧 『鬼姫円舞』。それをフルに使って尚、一撃も当たらない。

紅葉を遥かに越える武術の達人、若しくは百戦練磨の戦闘者やそれに類する者に当たらないのなら何も可笑しくはない。だが、どう見ても素人にしか見えない奴に当たらないなど、可笑し過ぎる。

異様な存在感を放ってはいえるが、だからと言って避けられる理由にはならない。そもそも、その存在自体が可笑しい。素人がこれ程の存在感を醸し出せるなんて可笑しい。

可笑しな点はそれだけではない。まず、英雄と言われている分際で全くの素人にしか見えない事事態可笑しい。

武術の達人特有の雰囲気を持ってない事はまだ許容出来る。魔法だけに特化したと言われれば納得出来るからだ。

だが、魔法のスペシャリストだとしても強者特有の雰囲気すら持たないなど可笑しい。

そもそも、ラジルから感じる魔力はそれ程強大ではなく、平均の魔法使いよりちょっと魔力が多いぐらいだ。

可笑しい、可笑しい、可笑しい。可笑し過ぎる。

考えてみればそんな人物が英雄などと持て囃され、『金色の精霊王』なんて大層な通り名で呼ばれている事も可笑しい。

そこまで考えて行き着くのは、ラジルが何か狡スルをしていると予想する事だ。

「んなもんでめえに教える訳ねえだろ」

手札をそう易々と教えるなど、愚者や余程自分に自信がある者でなければしない。そのどちらにも属さないラジルがそう返したのは、当然の事と言えよう。

「ぬう……」

ラジルの言葉を聞き、呻き声をあげる紅葉。

見れば彼女の顔に徐々に焦りが浮かんでいる。当たり前だ。彼女は武術の達人や百戦練磨の強者とも戦えるだけの技術と身体能力を持っている。

だが、あくまでも技術と身体能力だけだ。それに見合う戦闘経験がない。それは馬鹿げた才能で力を得るまでの過程を短縮してしまつたが故であつたり、同格や格上、自らより格下との戦闘経験すら僅か故であつたり、その他にも要因はあるが、特に大きい要因は今述べた二つだろう。

そんな実力と経験が釣り合わない人物が、どう見ても素人にしか見えない人物に攻撃の悉くを避けられて焦らない訳がない。

そして、焦つたが故に攻撃が大振りになり、『鬼姫円舞』のリズムが狂つた。

「っ！？」

狂つたりリズムに付け入る隙を見出したラジルは右脚を紅葉に向けて突き出す。

ヤクザキックとも言われるそれは、徐々に冷静さを失い始めた紅葉の腹部に直撃し、その衝撃で紅葉は吹っ飛ぶ。

だが、すんでの所で自ら後ろに飛んで衝撃を緩和したのだろう。特に痛がる様子を見せない。

「ええいつ、埒がないのだ！ 『符術、大車輪！』」

着地と同時に巫女服の袖から何か書かれた紙 符と呼ばれる物を取り出し、それをラジルに向けて投げ付ける

紅葉の手から離れた八枚の符は言葉と同時に一メートル程の燃え上がる車輪となり、地を駆ける。

「『風よ、我が声が聞こえるならば、空を翔ける刃となりて、迫る牙を切り刻め』」

向かいくる八つの車輪を迎撃するために、ラジルは早口で精霊達に命じる。

王の命令を聞いた風達は数にして十六の風の刃となり、その内の八枚は八つの車輪に向かい、残り全ては紅葉に向けて突き進む。

刃と車輪はぶつかり合い、その衝撃で衝突地点を中心に砂埃が舞う。

「くっ」

砂埃の中から現れた風の刃を察知し、紅葉は刃を避けるために空目掛けて跳ぶ。

「なにい！？ 追尾してくるのだ！」

空中に跳んだ紅葉を追うように風の刃は軌道を変える。

それを見て驚愕の声をあげた紅葉は、避けるだけでは延々と追ってくるだろうと予想し、迎撃する事に決めた。

「『符術、千羽鶴！』」

袖から百にも及ぶ符を取り出し、それらを眼下にある刃に向けて投げる。

その符は紅葉の手から離れていくばかりかも経たない内に燃え上がり、火の塊　否、火で構成された手の平に収まる程度の鶴になる。一枚の符は十羽の鶴に変化し、百枚の符は千羽の鶴になる。

そして千羽の鶴は八つの刃を掻き消し、その数を減らしながらもラジルに殺到する。

「『光よ、我が声が聞こえるならば、輝く千の射手となりて、近付く害悪を討ち滅ぼせ』」

膨大な量の鶴を迎撃するためにラジルの命じる。

すると、ラジルの背後に突如光り輝く千の矢が現れる。

空に浮かぶ無数の星と見間違う程に綺麗な光は、流れ星の如く輝きながら王^{ラシル}を害する鶴に飛ぶ。

瞬きの間すらなく千の矢と膨大な量の鶴は衝突して、数多の閃光や爆発音を撒き散らす。

絶え間無く続く閃光と爆発音。永遠に続くとも思える程に延々と続くそれらは徐々に激しさをなくし、最終的には消えた。

そして、静かになった所で地面に足を付いた紅葉。何の偶然かその場所は二人が戦闘を開始した時と同じ場所。

そこに着地した紅葉は、戦闘開始から一歩たりとも歩いていないラジルに険しい顔を向け、疑心的な瞳で睨み付ける。

「……貴様、何をした？」

抑えようがない程の疑念が込められた問いを聞き、ラジルの怪訝な表情になる。

「何を、だあ？ 何に対してそう言ってたんだよ？」

「そんな事は貴様もわかってるのだろう。何故、素人にしか見えない貴様が私の攻撃を避け続けられるのだ？ 何故、気で強化した私と何の強化もしない貴様が渡り合っているのだ？ 何故、魔力も気も一切使わずに神秘を発動出来るのだ？ あまりにも不可解が多い、多過ぎる。そして、不可解過ぎるのだ」

ラジルの言葉に疑問を提示する紅葉。他にも色々と疑問はあるだろうが、今最も紅葉が聞きたい事は先程言った三つなんだろう。

「ああ、そんな事か……。んなもん」

自虐的で嗜虐的な、矛盾した嘲笑を顔に浮かべたラジルは言葉を一旦区切り、嘲笑をより一層悲惨なものにしながら口を開く。

「俺が化け物だからに決まってるだろう！」

言葉を放つと同時に身体中に魔力を流し、簡易的な身体強化を施す。それと同時に足裏に魔力を溜め、爆発させる。

それによる急激な加速で残像すら残して紅葉に迫ったラジルは、自らの攻撃範囲に紅葉が入ると同時に右脚を紅葉の横っ腹目掛けて振るつ。

「っ！？」

ラジルの急激な加速に反応が遅れた紅葉は、鎌の如き足蹴を防御すら出来ずに食らう。

瞬間、突如襲った衝撃に為す術なく飛ばされる。

「ぐつ、うう……」

強制的な空中浮遊を壁と衝突した事で中断した紅葉は、横っ腹と壁と衝突した箇所　右片と右腕からじんじんと広がる激痛につい呻き声をあげる。

この状態では二つある切り札の内一つは反動が大きくて使えないと言うより、使っても役に立たないだろう。もう一つの切り札は使えて一度、ならば、切り札をより確実に当てるために今は機を待つのが一番確実だろう。

そう考えた紅葉は、痛む腕を巫女服の袖に突っ込む。

「『符術、風車！』」

袖から数枚の符を取り出した紅葉は、それに気を送ると目の地面目掛けて投げ付ける。

符は二メートル程の火で構成された風車になり、それが回転すると渦巻く炎が発生する。

「まだまだなのだ！　『符術、紅蓮地獄』」

渦巻く炎がラジルに直撃するより先に、紅葉は大量の符を取り出し、それらをラジルの周囲に向けて投げ付ける。

それらの符は紅葉の言葉と同時に燃え上がり、世界樹広場を火の海にする。

そのさまは『紅蓮地獄』に相応しい悲惨な光景だ。一つ足りないとなれば、地獄で喚く人々だろう。

「まだまだまだあ！　『符術、千羽鶴　』」

先程と同様百の符を袖から取り出し、それらをラジルに向けて投

げる。

再び姿を現した千羽の鶴は、ラジル目掛け飛翔すると思われたが

「『集束、朱雀！』」

一度空中で静止した千羽の鶴は紅葉の言葉と同時に集束を始め、最終的に一つに束ねられた千羽の鶴は一羽の強大な火の鳥となる。朱雀の名に劣らぬ強大な火の鳥は、火の海の中にいるであろう今は『風車』により見えないラジル目掛けて飛翔した。

「飛べえ！ 朱雀！」

羽撃く毎に火の羽を撒き散らし、火の海をより激しくさせる『朱雀』は激しい爆音とともにラジルに着弾し、その身を爆発させた。

「これでえ、最後なのだあつ！ 『相剋球』」

『風車』から始まり、『紅蓮地獄』、『朱雀』。

切り札を確実に当てるための牽制としては充分過ぎるコンボだ。否、やり過ぎと言っても過言ではない。

だが、これだけの符術を使ったのだ。足止めは成功しているだろう。もしかしたら既にラジルは灰になっているかもしれない。そう考えるのも仕方ないだろう。このコンボにはそれだけの力があるのだから。

だが、所詮人の力。化け物（王）には敵かなわない。

「『鬼神』ころ 『え？』」

切り札 『鬼神殺し』を放とうとした紅葉は、突如激変した目

前の光景に唾然とする。

火の海を中心　ラジルがいるであろう場所から突如溢れ出した
勇ましく暴力的で、神々しい金色の極光が、業火を掻き消しながら
紅葉に迫る。

「　　」

紅葉は視界を占領する金色の光に一瞬呆然としたが、直ぐ様『鬼神殺し』を放とうと突き出していた手を袖に突っ込み、金色の光に
対抗するために大量の　千を易々と越えるであろう量の符を袖から
取り出す。

「なっ、馬鹿な!?!」

圧倒的な金色の極光に危機を感じて、大袈裟と紅葉自身が思う程
の量の符を防御に使用したのに、金色の極光はその防御を貫くどころ
か剩あまつえ紅葉の身を飲み込んだ。

だが、大量の符に威力の大部分を削がれたのだろうか。紅葉にこ
れと言った重傷はない。まあ、小さい傷は数え切れない程あるし、
金色の極光で巫女服の所々が破れ、中々に危ない格好をしている。

「『精霊達よ、王足る我が声の下に集い、ありとあらゆる害悪を跳
ね退ける絶対の鎧と化せ』」

未だ紅葉の驚愕が晴れない内に、何かを唱えたラジル。
その声は精霊に対する絶対命令。精霊を鎧こてだまと化すための言魂。

「『具現せよ。アーマー・オブ・スピリット（精霊の鎧）』」

王の命を受け、精霊達は喜々としてその身を鎧と化す。
閃光が輝き、精霊がラジルの纏うように集束する。

目映い閃光は直に消え、黄金の光に身を包んだラジルが紅葉の視界に入る、

「なっ、何なのだそれは！」

先程の極光に対する驚愕が未だに消えない紅葉の胸中に、更なる驚愕 否、恐怖が沸き起こる。

それはラジル（王）が放つ圧倒的な存在感に対してであり、ラジル（王）が纏う鎧の放つ神々しい光に対してもあった。

第九話：二つの歓迎会。欠落神童の力と精霊王の暴力。（後編）（後書き）

ラジル「何でだよおっ！」

霧唾「いきなりどうした？ 何かあったのかい？」

ラジル「何かあったか。じゃねえよ！ 何であんな中途半端な終わり方なんだ！」

紅葉「そうなのだ！ せめて私が『金色の精霊王』をぼこぼこにする所まで書くのだ！ 否、書けなのだ！」

霧唾「あそこで終わらすのが一番区切りが良いと思っただ！ 故に、仕方がない。ってか、紅葉がラジルをぼこぼこにするシーンなんて予定にないでござる」

紅葉「なっとなっとなっ、なん……だ、とおおおっ！？」

ラジル「驚き過ぎじゃねえ！？」

霧唾「次回は歓迎会の次の日の紅葉がメインです！ 『スターライトルイン（破滅の月光）』なんて厨臭い技を受けた紅葉はどうなるのやら……それは作者（神）のみぞ知る！」

キリア「……ねえ、一応主人公な僕が全然本編に出ないってどういう事なんだい？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ ってか、殺すよ？」

霧唾「なっ、……キリアが黒い！？ 髪の毛は白いのに！？」

ラジル「髪の毛は関係ねえだろ……」

霧唾「ですよー。後ちよっとでキリアの出番があるから、それまで待ってて下さい！」

キリア「……仕方ない。今回だけ待ってあげるよ」

霧唾「読者様方も待って下さい！」

紅葉「むっ、そういえば霧唾。あの企画の事を忘れていたのだ！」

霧唾「ああ、そういえばそうだったね。PV十万突破したら『転生者達のお悩み相談会』と言う企画をします！内容は読者様方の悩みに我が家のメンバーが解決……出来るかはわかりませんが、解決策を出す。って奴です」

キリア「解決策を出して欲しい人は感想に悩みとその解決策を誰に出して欲しいのか書いてね」

ラジル「重い悩みから軽い悩みまで、何でも募集するぜ！」

紅葉「ふっはっはっはっはっ！主人公たるこの私に悩みを打ち明けるチャンスを見逃すではないぞ！」

霧唾「勿論、自分を指定するのもOKですよ！」

キリア「……まあ、こんな企画に乗ってくれる読者なんて極僅かだろうけど。考えてみなよ？破綻者の僕と色々アレなラジル。自称主人公の紅葉にかなりの厨二病な霧唾……まともな奴が一人もいないじゃん。そもそも、ラジルと紅葉に関しては結構な不評があ

るし……」

一同「……………」

キリア「今思えば、僕達は悩みを打ち明け、読者がいるかすら疑問な程の変人集団じゃないか」

霧唾「そつ、それ以上は言うんじゃない！ ええいつ、次回予告だ
！」

~~~~~

「俺が言うのもなんやけど、非道やな」

「ネタのためなら何だつてするさ」

「何で声がどこぞのセルなんや！」

「なつ、何だてめえら！」

「五人揃ってクロガネナンジャー！」

「微妙な名前だなつ！ つつか、良く見たらてめえら」

「何で私が真ん中じゃないのだー！ー！」

「紅葉の仇や！ 死ねえええええ！」

「死んでねえからな！ 生きてるからな！」

「許せとは言わん。これもキリヤんの丸秘写真のためや！」

「物に釣られてんじゃねえええ！」

「体は邪気で出来ている。」

思いは厨二で願うは邪気眼。

幾度の妄想は無価値。

只の一度も成功はなく。

只の一度も理解されない。

彼の人形は常に独り、思考の海で邪気に酔う。

故に、その人形に意味は無く。

その思考はきつと”百八の邪気”に侵されていた。

『邪神心海』』

「何だよこのグロテスクな空間！」

「ペンタゴンアタック！」

「混沌とした光線を発射すんじゃないか！」

目があああ！ 目があああ

ああああああ！」

「あれ……、僕はいつたい何を？」

~~~~~

ラジル「全部嘘っぱちじゃねえかよ！」

第十話：次の日の欠落神童。近衛紅葉の願い。（前書き）

PV十万突破したけど、悩みが一つしか投稿されないのでしたら
くは記念企画はなしです。

と、言う訳で、まだまだお悩み募集中だよ！（殴

あつ、あと、次回は漸くキリアが出ます。

注*短いです。

第十話：次の日の欠落神童。近衛紅葉の願い。

歓迎会から一夜明け、次の日。学生にとっては一週間に二回の楽しみ 詰まりは土曜。

普通なら友達と遊んだり宿題をするであろう休日に主人公足るこの私が何をしているのかと言うと、龍宮神社の境内を箒で掃除してやってるのだ！ 勿論の事、巫女服でなのだ！ どうだ、素晴らし
いチヨイスだろう！？

「……………むう」

……………気を逸らそうと意味もなく胸中で叫んでも、気は逸れない。
代わりにと言っては何だが、苛々がマッハで加速するのだ。

「なあ、好い加減機嫌を治したらどうだい？」

私と同じく龍宮神社の掃除をしている巫女服を着た真名が何やら
言っているが、今はそんな事はどうでも良いのだ。
今はこの苛つきをどうにかする事が最優先なのだ。故に、無視す
るのは仕方ない。

「ぬう……………」

「そもそも、勝てないのが普通なんだ。だから、そこまで気を落と
さなくても良いじゃないか」

……………聞き捨てならん言葉を聞いたのだ。勝てないのが普通だと？
そこまで気を落とさなくても良いだと？

「主人公足るこの私に、負けの二文字はいらないのだ！……！
それなのに、負けてしまったのだ！ 気を落としても良いではない
か！……！」

両手を空に向けて伸ばし、叫ぶ。

そもそも何故私が苛ついているのかと言うと、昨夜の歓迎会で大
見特切おみえった主人公足るこの私が、『金色の精霊王（不埒な輩）』に
負けたからなのだ。

しかも、最初は私的には善戦したと思っていたのに、最後は為す
術なくやられたのだ。

……あれか？ あれなのだな！ 最初は手加減してやったぜ！
って事なのだな！？ ええいつ、思い出したらまた腹が立ってきた
のだ！ うが！……！……！……！……！

「言っちゃ何だけど、彼は本当の意味で化け物だ。だから、主人公
とか以前にただの人間が勝てる訳ないんだよ」

現在進行形で加速している苛々をどうしてくれようかと考えてい
ると、ふと耳に化け物という単語が入った。

……『金色の精霊王』が化け物なのは、否定しない。それが普通
だろう？ だって、昨夜の歓迎会で私の攻撃の悉くを避けたのは、
単純な身体能力の御蔭。魔力や気は一切を使わずに神秘を発動出来
たのは、生まれ付きの固有技能の御蔭。しかも、その固有技能は何
の代償もリスクもなく、ただ言葉を発するだけで使用可能らしい。

正直言えば疑わしい事この上ないが、真名がタカミチから聞いた
事らしいから、信憑性はあるだろう。まあ、信憑性は兎も角。

そんなとんでも人間が化け物と言われても、否定出来る要素がな
い。これっぽっちも。

話は変わるが、それならどこからどう見ても素人な事も納得出来
る。

詰まりは、あれなのだろう？ 技術などなくとも、生き残れるだけの力がある。だから、技術は必要ない、そういう事なのだろう。

「……むう」

だが、『金色の精霊王』が規格外の化け物だからと言っても、私が負けた事に納得が出来る訳がない。

何故なら、私が主人公だからなのだ。

……まあ、昨夜の歓迎会での私の言動が主人公らしくないと後で気付いて自己嫌悪したが、主人公だってそんな時もあるだろうから、気にしない。

主人公らしくないと言えば、歓迎会での私のやられっ振りも主人公らしくなかった。

昨夜の歓迎会で『ムーンライト・ルイン（破滅の月光）』が放たれた直後、私は気絶した。

恐らく要因は気の使い過ぎ。後先考えずに大技を連発したと私自身思える程だったし、それだけの大技を連発した揚句切り札の一つ

『相剋球・鬼神殺し』まで使ってしまったのだ。気の使い過ぎで気絶したと考える他ないだろう。

まあ、そんな訳で気絶した私に『ムーンライト・ルイン（破滅の月光）』は直撃しないで、軌道を大きく逸らしに逸らして空に向かつて飛んで行った、らしい。

閑話だが、空高くまで飛んだ『ムーンライト・ルイン（破滅の月光）』は空中で爆発し、その衝撃や爆音は爆発地点である上空からかなり下にある世界樹広場にまで届いた、らしい。

何故らしいなのかと言うと、私が自身の目で見た訳ではなくて、真名から聞いた事だからなのだ。

「はあ……」

そしてその真名はと言うと、何やら私に生暖かい視線を向けているのだ。

「むう、何なのだ？」

その視線に耐え切れずにそう問い掛けると、真名は再び溜め息を吐いた後に、口を開く。

「はあ……、何でもないよ。気にしないでくれ」

良くわからないのだが、気にしない事にするのだ。

「……久方振りに修業するのだ」

風の音に掻き消される程の小さな声で呟く。

主人公が負けっぱなしなど、格好が付かんだろう？
見ているのだ『金色の精霊王』。

次こそは私が貴様を妥当し、私こそが主人公だと証明してやるのだ。

「主人公じゃないと……この私が主人公じゃないと、木乃香は守れない。だから、主人公にならなければいけないのだ。私は……」

晴れ渡った青空を見つつ、願う。

どうか、木乃香は平和な世界で生きて下さい。それが偽りの平和だとしても構わない。

「ん？ 何か言ったかい？」

「……何でもないのだ」

マンガー「そうやぞ裸人。空気読まんこの先ずつと裸人のままやぞ？」

裸人「……もう良い、何も言わねえ……」

マンガー「裸人が黙った所で、『鉄の翼^{くろがね}』団員募集や！ 詳しくは『原作ブレイク？そんなの関係ねえ』第一章、原作はミンチになるまで砕きまSHOW』のだべりばを見て下さい！」

裸人「ちやつかり募集すんだな」

龍夜「奇人変人が多いけど、それでも入団したい物好きはマンガーに言つてや！」

裸人「……そういえば、霧唾達は？」

龍夜「さあ？ どうしたんやろな」

第十一話：ある日の真夜中の森での暗殺者との出会い。って言うより殺し合い。

いつも以上に駄文な気がしてならない……。

あっ、お待たせしました。漸くキリア視点です。

本文で疑問に思う所があるでしょうが、後書きで補足説明をするので最後まで読んでみて下さい（殴

第十一話：ある日の真夜中の森での暗殺者との出会い。って言うより殺し合い。

ここ　麻帆良に来てから一週間が経った。

勿論、それだけの時間があれば麻帆良学園の地形を把握する事なんて簡単な訳で、今では麻帆良の地形を完全に　ではないが、大体は把握出来た。

幸いな事にその一週間は暗殺者の襲撃もなく、特に何も起きずに平和に過ごせた。

あ、でも、変な予感を感じるんだよね。

麻帆良強制来訪から次の日の夜に、変な予感　って言うか悪寒みたいなものを感じて、それ以来ずっと悪寒を感じていたんだけど、今日になって突然その悪寒が強くなった。

今はその悪寒が無視出来ないレベルになったから、その悪寒の要因を確かめるために態々（わざわざ）真夜中に森まで来てやってるん？　何で森なんだって？　それは、もし悪寒の要因がぬらりひよんが雇った暗殺者なら、真夜中の森なんて暗殺者からすればこの上ない条件で姿を現さない訳がないから。

まあ、そんな所で暗殺者と殺し合いたくはないんだけど、どうにも姿を現さないんだよね……。まあ、気配は感じないからただの杞憂なのかもしれないけど、こういう時の悪寒って結構当たるしさ。兎に角、どのみち殺し合うんだったらさっさと終わらせようと思つて殺し合いの舞台を森に選んだって訳だよ。

まあ、森に入ってからしばらく経ったけど、暗殺者は姿を現さない。

暗殺者にとって都合が良い真つ暗闇の森なのに、何で出てこないんだろう？

ってか、態々ここ（森）を選んでやったんだから、さっさと出てこい。

良い加減寝たいんだ。殺し合いなんてさっさと終わらせて。

そう思つても、暗殺者なんて出てこない。だから、駄目元で出てくるように言つてみたんだけど

「ねえ、いるんだつたらさっさと出てきなよ」

「へえ……、気付いてたんですかー」

まさか、本当に出てくるとは……。や、出てくるように言ったのは僕なんだけど、態々出てくる馬鹿だとは思わなかつたんだ。暗殺者なら油断しきつている時に襲撃するのが常套だろう。

まあ、好都合なのは確かなんだけどね。

「や、気付いてはないよ？ あれだよあれ、勘つて奴だよ」

真つ黒闇を連想させるセミロングの髪を持った少女に視線を向ける。

見た目的に歳は十五前後。装備は真つ黒な外套だけ。恐らく外套には暗器が仕込んであるんだろう。

「……物凄く的確な勘ですねー」

どこか不満そうに少女は言う。

まあ、僕でも気付かない程に気配遮断能力が高い事から、それなりに暗殺者としてのプライドだつてあるんだろう。

それなのに、勘で言われた一言に反応して姿を現してしまった事が不快なんだろうね。

「で、君はこんな所で何をしてるんだい？」

今までの経験からくる危機察知能力が目前の少女は危険だと脳内

で警報を鳴らしている事から、恐らくはこの少女は暗殺者なんだろう。

立ち振る舞いも歴戦の強者然としているし、纏う雰囲気は研ぎ澄まされ続けた刃の如し、極め付けに何の感慨も悟らせない虚無的な表情。

恐らく、かなりの人数を殺したんだろう。それこそ作業のように。

「聞かなくてもわかってますよねー。貴女の予想通りの事をしに来ましたー」

少女が虚無的な表情と同じように虚無的な音色で言う。

「じゃあ、君は僕を殺しに来たって認識で良いよね？」

それに対してほんの少しの殺気を込めた言葉を返す。

まあ、そんな事は聞かなくてもわかってるんだけど。

「はい、それで良いですー」

返って来た言葉は予想通りのものだ。

さて、確認も済んだ事だし、さつさとこの少女を殺して暖かいベツドにダイブしよう。

「僕は早く寝たいんだ。だから、さつさと危険（君）を淘汰（殺）させてもらおうよ」

さつさと君を殺させてもらうなんて言ったけど、きつとかなり時間がかかるんだろうな。

恐らくは完全な気配の遮断の域に達したであろう厄介極まりない気配遮断能力に、立ち振る舞いなどでわかる戦闘技術の高さ、そこ

に至る過程からくる戦闘経験、その経験からくる数多の戦術。

ざっと考えただけでもこれだけの危険要素が思い付く。しかも、この世界には魔法なんてものがあるから予想外の事だってあるかもしれない。あの糞野郎との戦闘の時は、予想外な事が起きたせいでぼろぼろになっちゃったし。魔法などの予想外な事に対して警戒しておいて損はないだろう。

まあ、幸いとも言えば良いのか、戦闘技術や戦闘経験なら僕の方が上だ。……多分。

や、実際に殺し合っただけではないからまだ憶測の域を出ないんだよね。

「殺れるものなら殺ってみるです！。まあ、その前に貴女が殺られちゃうんですけどねー」

……大天使でも尻尾を巻いて逃げる程の天才ハンターである僕が、先に殺られるだって？

……どうやらこの糞餓鬼には懇切丁寧でわかりやすい教育が必要らしいね。

「僕が殺られるだって？ くくくっ、寝言は寝てから言いなよ。糞餓鬼」

そう言いながらどんどん殺気を強める。

それに反応してなのか、糞餓鬼が腰を深く落とし、両手を無造作に垂らし、物凄く前屈みになる。

恐らくは戦闘体勢なんだろうけど、あんなに前屈みになって転ばないのかな？

「まあ、長々とお喋りするような仲でもないですし、私達の関係に相応しい事をしましょー」

「うん、そうだね。それじゃ」

「殺し合いましょうか」

そう言ったと同時に、糞餓鬼が消えた。否、気配を完全に消した事で見え難くなったただけだ。

んー、困ったな。気配を完全に消してる状態で高速で動かれたら、どこにいるかさえわからなくなる。これならまだ羽音がない蠅はえや蚊かを捕まえる方が楽だ。

まあ、呑気に考えてる場合でもないし、早く対処法を考えなきゃ。

「よっ、と」

危機察知能力が警報を鳴らしたから、それに従って後ろに跳ぶ。

その直後、先程まで僕がいた場所に銀色に輝く刃物　メスが八本突き刺さった。

どうでも良いんだけど、何でメスなんだろう？

「そついえば、僕を殺すように依頼したのはぬらりひよんで間違いないよね？」

呑気に会話しながら殺り合える程この糞餓鬼は弱くはないけど、それでも確認しなきゃ今後の方針があやふやになるし、もしもぬらりひよんじゃないんだったら警戒しなきゃいけない対象が増える。

このまま聞かず終いで依頼人をぬらりひよんだと勘違いして、警戒しなきゃいけない対象を警戒しないなんて愚か過ぎる。

まあ、仮にも一流の暗殺者なら答える訳がないんだけどね。それでも、一応聞いておくくらいはした方が良いだろう。

「そんな事、答える訳がないじゃないですかー」

予想通りの言葉が聞こえた方向に視線を向けてみるが、そこには誰もいない。

や、困ったね。さっきは危機察知能力の御蔭でメスを避けられはしたけど、これからも避け続けられる訳がないし、避け続けられたとしても僕は糞餓鬼を目視すら出来てないから、攻撃なんて当てられる訳がない。

だから、まともな方法で殺り合ってもじり貧だ。

そんな事を考えていると、突如ひりひりとした感覚が首筋で発生する。

その要因は危機察知能力が危険を感知したからだと直ぐに気付く、瞬間的に後ろを向いて盾を首筋の前で構える。

直後、耳をつんざくような金属音。

「また、勘ですかー？」

両手に持ったメスを僕の首筋目掛けて突き出した糞餓鬼は、又してもどこか不満そうに言う。

完全に気配を遮断しながらの襲撃は、武術の達人だろうと気付く事すら不可能だ。買ひ被りなどではなく、根拠だつてある。

完全に気配を遮断した人間は、視覚や聴覚などの五感でしか認識出来ない。武術の達人などが持つ気配を感じる技術では認識は疎か気付く事すら出来ない。何故なら、完全な気配遮断は完全に気配を消す事と同義だからだ。

そんなとんでも技術と五感で認識出来るもの 足音や体臭などを消す技術を併用しての背後からの襲撃が、勘なんて不明確なもののでいで避けられたんだ。不愉快になるのも仕方ない。

「うん、勘だよ」

「本当に、ふざけてますねー」

僕の言葉にそう返す糞餓鬼。

糞餓鬼からすればふざけてると言いたくなるのも少しはわかる。

さてと、こつやつて呑気に思考するのはやめにして、そろそろ僕も反撃しないといけないかな。

「ふざけてなんかないさ。大真面だよ」

言葉を放ちながら気を体中に流して身体強化を施し、右手で持ったトキシックフアングに気を込める。

すると、刃の部分が毒々しい紫紺の光を発し、徐々にその光は刃を纏うように固定される。

無間矢鱈むげみやたらに攻撃しても奇跡でも起きない限りは直撃しない。それなら

「下手な鉄砲数撃ちや当たる、つてね。や、違うか」

逃げ場なんてない程の広範囲攻撃で淘汰してやる。

「『毒鎖蛇』どくくさへび」

言葉と同時に、紫紺に輝くトキシックフアングを腰部から振り抜く。

すると、トキシックフアングに注がれた気が毒で構成された数十メートルの長さの大蛇となり、まるで鞭の如くしなりながら周囲の木を薙ぎ払う。

だけど、糞餓鬼に当たってはいない。その証拠に、腕に響いた衝撃は木と毒鎖蛇が衝突した事により発生した衝撃だけだ。

だから、このまま次の攻撃をするためにトキシックフアングに更に気を注ぎ込む。

「『毒爆・連鎖』」
どくばつ・れんさつ

大量に注がれた気は毒鎖蛇の糧となり、その身を膨張させる。

そして、瞬間的に肥大した毒鎖蛇は刃と繋がっている部分から爆破し、最終的には毒鎖蛇の先端まで爆発した。

爆発によって発生した爆風が元は毒鎖蛇であった毒を辺り一面に撒き散らし、毒の風となった爆風は大地を腐食させる。

我ながら、何とも毒々しい森にしたと思う。木々は薙ぎ倒され、辺り一面が腐食し、空中には毒が漂う。

死の森なんて呼ばれても不思議じゃない有様だ。

これなら気配遮断など関係なしに、毒殺出来ただろう。

まあ、念には念を入れて、もう一発やっておくかな。

「『ヴェノム・レイン（毒の雨）』」

又してもトキシックフアングに気を込め、紫紺に輝くそれを真上に掲げる。

すると、トキシックフアングの先端から上空に向けて一筋の紫紺の光が伸びる。

その光はある程度高い位置で止まり、毒々しい紫紺の球体を形作る。

トキシックフアングに注がれた気を全て球体に注ぎ終わった瞬間、その球体は爆発し、地上に向けて毒の雨を降らす。

薙ぎ倒された木々、腐食した大地、漂う毒霧、毒の豪雨。

魔界の方がまだましな気がしてきた。……魔界なんて見た事ないけどね。

「それにしても、何で生きてるかなー？」

薙ぎ倒された木々の中から現れた人影　糞餓鬼に言う。

軽い感じで言いはしたけど、物凄く驚いた。それこそ世界を渡った事に気付いた時なんかよりも余程。

人間の分際で大形モンスターにだって通用する毒を受けて死なないとか、馬鹿げてる。

それを言えばあの金髪金目の糞野郎もなんだけど、今回は糞野郎が受けた毒なんて比べ物にならない量の毒を撒き散らしたのに死なないって……。

まあ、無傷ではなく、爆風で飛ばされでもしたのか所々傷付いてるし、視界の妨げになっていた木々も気にならない程度になったから、やった効かひはある……よね。そうじゃないと泣きたくなる。や、泣きはしないんだけど。

「こんな事もあるうかと、毒に対する抵抗力を一時的に上げる薬を常備してましたー」

「随分用意周到だね」

「まあ、暗殺者ですしー」

大型モンスターにだって通用する毒を無効出来るだけの効力がある薬って、そんなに安い物じゃないと思うんだけどね。

まあ、命より高いものはないとも言っし、使って正解だね。

使ってなかったら今頃はお陀仏してただろうし。

「それにしても……、うーん、困りましたねー。こちらの攻撃は勘なんてもので避けられますし、貴女は気配遮断なんて関係なく殺せるだけの技を持つてる。このままじゃ、いずれ私が負けちゃいそう

ですー」

「負けちゃいそうじゃなくて、負けるんだよ」

「それは嫌ですなー。じゃあ」

そこで糞餓鬼は言葉を区切り、今までは意図的に隠していただろ
う膨大な殺気を放つ。

そして、前髪で隠れていた血のように真っ赤な瞳を僕に向ける。

「数を増やしてみましょー」

糞餓鬼がそう言った直後、糞餓鬼が三十人に増えた。

え……、影分身って奴？ 一人だけでさえそれなりに苦労しないと倒せなさそうなのに、三十人って……。

明らかにオーバーキルじゃないかな。ってか、無理ゲーでしょ。

第十一話：ある日の真夜中の森での暗殺者との出会い。って言うより殺し合い。

補足説明を幾つか、

モンハン世界では気はモンスターの素材や紅蓮石や氷結晶などの特殊な物や、そういう物から作られた属性持ちの装備に込める過程をしなければ炎や氷に変換出来ない。

例・レウス原種の素材や装備に気を込める 込めた気を炎に変換する事が可能になる。

・レイア原種の素材や装備に気を込める 込めた気を炎と毒のどちらかに変換する事が可能になる。

ちなみに、素材や装備のレア度、属性との関わり、使用者との相性で変換率は変わる。

勿論、レア度は高ければ高い程良い、属性との関わりは深ければ深い程良い、使用者との相性は不明な点が多い。

レア度が高く属性との関わりも深い例をあげるなら、『瑠璃色の龍玉』などの○玉系。

ついでに言えば、『瑠璃色の龍玉』で属性変換すると天変地異を起こす事も可能。

理由は説明文にそんな事が書かれているような気がしたから。

勿論、それに伴って古龍種の○玉はチート性能になってしまった。

まあ、莫大な気を消費するハイリスクハイリターンなチートですけど。

それと、まだ名前すら出てない暗殺者をキリアが目視出来なかった件については、完全な気配の遮断がチート過ぎるからと言ってお

きます。

例え話ですけど、真夜中の森で何も聞こえなくなる程の廃スペース耳栓を装着した状態で、蠅や蚊を一匹足りとも見逃さないなんて事は普通なら出来ませんよね。

暗殺者は人間ですから、蠅や蚊よりかは目視しやすいですが、本文にも書いてあった通り高速で動いています。

もし視界に映ったとしても、気配が完全にないのでそれなりに意識しなければ認識出来ません。

そんな空気と同義な人が高速で動いていたら、幾らキリアであるうと目視出来なくなってしまうです。真つ暗闇だから、尚更。

まあ、補足説明はこのぐらいでお終いです。

ラジルの『精霊の』や紅葉の技などは、本文で詳しい説明をしようとは思ってましたがタイミングがわからず……。

その内設定集を作りますので、そこに書く予定であります。

あっ、あと、今回出たキリアの技の技名がそのまんまなのは、自分のネーミングセンスが可哀相だからです、悪しからず。……それを言うならラジルと紅葉の技の技名もだるうとかは、言わないで下さい。

暗殺者との戦闘が終われば、キリアの技……と言うか主なスキルが出尽くすので、漸くクロスオーバーしても恥ずかしくなくなりま

す。つと言つ事で、暗殺者との戦闘が終わったらどなたかクロスしませんかー！？ つと、リアルが忙しいのに言ってみたりします。

つて言うか暗殺者がぶっ飛んで強いから、キリアが生き残れるか自体が不明……。

きつと主人公補正や作者の陰謀がなければ、危機察能力が働く前に殺されますww。さすが暗殺者……。

そんなこんなで次回は、暗殺者が完全な気配の遮断を有効活用してキリアを虐める回です。

では、また次回に会いましょう。読んでくれて感謝です！ 感想には感激です！ 罵倒には恍惚します（ry …… すいません、取り乱しました。自分はマゾなんかじゃないですよ？ むしろサディストですよ？ や、要らないカミングアウトですね。

第十二話： ある日の真夜中の森での暗殺者との出会い。って言うより殺し合

お待たせしました！

リアルが忙しくて、執筆時間がなかなか取れずに……。

あつ、あと、この前に言ってた十万PV記念企画ですけど、あまりにもお悩みが少なかつたので凍結しようと思います。

お悩みを送ってくれた方々には申し訳ないです。

あとあと、前話の後書きで言っていた暗殺者無双ですが、諸事情により止める事にしました。

期待していた方々、すいません。……期待していた方なんていないと思いますけど。

そしてそして、同じく前話の後書きで言っていたクロスオーバーは、後書きにも度々出ていたマンガプリンさん作『原作ブレイク？そんなの関係ねえ』シリーズの主人公、藤山龍夜君（ちゃん？）と我が家とのバトル物に決定しました！

あまり期待しないで待って下さいw。

第十二話： ある日の真夜中の森での暗殺者との出会い。って言うより殺し合

暗闇に包まれた森の中 否、元は森であつた場所で、幾つもの風を切る音が静かに響いた。

「良いつ、加減、死んでつ、下さい、よ！」

風を切つた銀に輝く刃物 メスを持つ漆黒の髪を無造作に垂らした血のように真っ赤な瞳の少女。

裏とも言つべき世界で『影』と呼ばれ、恐れられている暗殺者は今現在、一人の少女を殺すために殺戮の道具メスを振るっていた。

「お断り、だよっ！」

本体も合わせて三十の『影』達が放つ斬撃を、所々傷を負いながらも避けている少女 キリア・ラウクルスは、何かを思案しているような顔で言葉を返す。

何を思案しているかはわからないが、恐らくはこの状況の打開策だろう。

「そう、です、か！」

口を動かしながらも凶器メスを動かす手は止めず、今も白髪紫紺目の少女を殺そうとメスを振るい続ける。

迫る幾多のメスを時には避け、時には軌道を逸らし、時には防ぎながら、決して余裕とは言えない状況でもキリア・ラウクルスは目の前の暗殺者を打破するための策を考え続ける。

果たして、『影』を打破出来る策を悪魔は見付ける事が出来るのだろうか？

Side キリア

「良いつ、加減、死んでつ、下さい、よ！」

声が耳に入ると同時に、それとは別の声 否、別の音が幾つ
も耳に入る。

「お断り、だよっ！」

別の音というのは、糞餓鬼の影分身達がメス振るった事で発生した風を切る音だ。

先程の糞餓鬼の言葉に当然とでも言えば良いのか、拒否の言葉を返しながら、防具に覆われていない、露出した肌に向けて迫るメスだけを対処する。

露出した肌に向けて迫ったメスは何とか対処出来たけど、防具に覆われている部分に向けて迫ったメスは何の障害も邪魔もないまま、僕の身体に 否、僕が装着している防具に直撃した。

だが、だからと言ってその刃は僕の身体には届かず、極僅かの衝撃を与えるだけで止まる。

まあ、至極当然の結果だろう。何故なら僕が身に付けているこの防具は、かつて僕がいた世界 弱肉強食の世界で頂点に君臨する『リュウ』から作られた防具だ。

『リュウ』という生物達は人と比べる事自体がおこがましいと思える程の硬度や強度を持つ外殻や皮膚を持っており、掠り傷を付ける事さえ並大抵の武器では難しい。

そんなとんでも生物である『リュウ』に名を連ねる、『ギギネブラ』から作られた防具を気で強度アップしたものを切り裂いて僕に

傷を付けるなんて、余程の名匠が作り出した至高の武器、若しくは現在着用している防具の素材　飛竜『ギギネブラ』と同格かそれ以上の力を持った『ナニカ』から作られた武器じゃないと不可能だ。そんな代物をメスなどで切り崩せる訳がない。……呑気にこんな事を考えるのはやめて、この状況の打開策でも考えましょう。

今は、防具がどうかかを考える必要はないしね。それにしても……、どうしようかな。

「そう、です、か！」

糞餓鬼の声が聞こえた直後、幾つもの斬撃が八方から連続で襲い掛かってくる。

それを先程と同様に、防具に覆われていない部分だけを対処する。戦闘技術に関してはこちらの方が上だけど、そんなに大きな差はないと思う。

それでも、こいつが気配遮断なんて使わなかったら苦戦するとは思えない。……まあ、時間は掛かるだろうけどさ。

兎に角、そんな力関係でも、一対三十ともなればこちらが圧倒的不利になるのは当然の事。

そんな状況の中、不幸中の幸いとも言えば良いのか、気というものを使わなければ作り出せない影分身だからこそ、影分身の（・・・）拳動は気を感じするだけで把握出来る。……大雑把にだけどね

勿論、気で感知出来る影分身の気配を完全に遮断しようと粗無意味だから、影分身達は気配遮断をしていない。

御蔭で気と気配を感知すると影分身達の拳動を完璧に近いレベルで把握出来る。

だから、ほんの少しの動きを感知して、次の手を予想する事が可能。

防具と拳動の把握。この二つの御蔭で今現在も僕が糞餓鬼に殺されずに生きてると言っても過言ではない。つと、またいらぬ事を

考えていた。今は糞餓鬼を撃退、若しくはぶつ殺す事を最優先にしなきゃいけないのに……。まあ、殺そうと思えば今すぐにも殺せる手札が　僕の切り札と言ってもいいものが幾つかあるんだけど、『アレ』はあんまり使いたくないんだよね。下手すれば一時的に『僕の』の性格や精神状態が今の僕とは全く違う、言うなれば『新しい僕』に変わるかもしれない　要は一時的な人格改変が起きるかもだからさ。

それとは別の『アレ』にしたって、あまり使いたくはない。『リミットオーバー（限界突破）』を長時間使用した時の反動なんて比べものにならない程、反動が大きい。大き過ぎる。

短時間の使用だけでも何時間が動けなくなるかもだし。『アレ』を使って暗殺者を打破出来たとしても、反動で動けない僕をぬらりひよん達が除去するだろうし。

そんな事になるのは避けたいし、後者は絶対に嫌だ。って言うか、後者なんて本末転倒も甚だし。

だから、今は『アレ』を使わずに糞餓鬼を打破する方法を考えなきゃ。

取り敢えず先程と同様に広範囲攻撃でもして、影分身の数を減らすかな。ついでに……と言っては何だけど、糞餓鬼本体も殺せたら万々歳だ。

「ふう……」

先程から止まない、僕を殺そうと襲い掛かる凶器クスを、致命傷になりそうなものだけを対処しながら右手に持ったトキシックファンクに気を注ぎ、それと同時に脚部の防具に気を溜める。

その気を感じてこれから僕が何かを行うと判断したからなのか、その何かを阻止するために影分身達の連撃がより一層激しく　それだけで鋭いもの変わる。

何とかそれらを対処したけど、防具に覆われていない部分に所々

掠り傷が出来る。

世紀末の拳王だって筋肉質な顔を綻ばせて見守る程に愛らしく、それでいて可憐な僕に傷を付けた事はム力つくけど、掠り傷なんて気にしていたら糞餓鬼との殺し合いに勝つ事は出来ない。

まあ、仕返しは必ずするけどね。つと、考えている間に気を送り終わったみたいだ。気を送り始めてから必要分送るまでを時間にする、大体一秒前後くらい。その間に影分身達が放った斬撃は百を越える。……そんなிரない考察は置いて、さっさと鬱々しい影分身共を淘汰するかな。

そう考えるのと同時に右足を地面に叩き付け、所謂技名を口に出す。

「『毒破』」

右足を叩き付けた箇所が爆発し、紫紺の煙 毒霧を撒き散らす。影分身達は爆発を逸早く感知し、爆発の余波が届かぬ範囲まで下がる。

そして僕は、爆発の衝撃を利用して空へと跳ぶ。

「『毒鎖蛇・八本』」

先程の『毒破』は影分身達から距離を取るために使用しただけだ。今から行う業は三十以上の人 影分身を人と読んで良いのかは定かではないが が密集した場所のど真ん中でやるには、大振り過ぎるし隙が多過ぎる。

だから『毒破』で距離を取り、空中に身を投げ出した と言うより、空中に飛び出した。

空中では身動きが出来ないというデメリットがあるけど、気を使えばそのデメリットだって解決出来る。

「『ヤマトノ
八俣』」

高度三十メートルぐらいに到達すると同時に空中で身を捻り、地面と身体を水平にしてからトキシックフアングを腰で構えていつでも振り抜けるようにする。

トキシックフアングに溜められた気は禍々しい紫紺色に輝き、凶刃が振るわれると同時に

「『オロチ
遠呂智』」

刃の軌道に描かれた紫紺の線となり、次の瞬間空に描かれた紫紺の線から、八体の大蛇が姿を現した。

「食い散らしな」

僕の言葉通り、っと言う訳でもないけど、毒で構成された八体の大蛇は大きく口を開けて眼下の影分身達に牙を突き立てようとする。そして発動からいくばくかの時間も経たずに轟音が響き、数体の影分身に大蛇は毒牙を突き立てた。気や気配を探してみると、影分身の数が十体減り、二十九体から十九体になっていた。

影分身の数を半分すら減らせてないけど、さすがの僕でも二十九もの影分身を八体の大蛇だけで全滅出来るとは思えなかったから、勿論次の手も考えている。

『毒鎖蛇・八本、八俣遠呂智』から派生する業だから、大した準備は必要ない。

「『毒破・連鎖』」

予め送っておいた余分な気と、新たに送った余分な気により、八体の大蛇がその身を膨張させる。これと似たような現象を見た事

がある糞餓鬼は、これから何が起こるのか理解したのだろう。影分身達が急いで大蛇達から距離を取ろうとする。

だが、距離を取ろうと離れても大蛇は執拗に追い掛ける。そして始まった異種鬼ごっこは数秒も続かず、大蛇が毒を撒き散らしながら爆発した事で終わる。

その爆発に巻き込まれた影分身は毒霧の中で消滅し、確認してみたら影分身は全滅していた。

だが、全滅したからと言って油断も安心も出来ない。何故なら本体がまだ残っているかもしれないからだ。

「よっ、と」

既に原形など留めていない、少し前までは深緑の森であり、現在は紫紺の毒が漂う魔境に降り立つ。

直後に、体中が総毛立ち、ひりひりするような感覚　悪寒を感じる。

その悪寒を何で感じたのかなんて考えるより先に、ただ本能に身を任せるままに背後を向き、トキシックファンクを左下から右上へと振り上げる。

すると、トキシックファンクを持っている右手に僅かな衝撃が走り、耳障りな金属音が響く。

衝撃と金属音はトキシックファンクと暗殺者が投擲したであろうメスが衝突したせいで発生したと理解すると同時に、視界の端に銀に輝く何か　恐らくメスが映った。

それが僕に向かって飛来していると瞬間的に理解し、メスを弾こうとタイミングを見計らっていると、突如感情の一切が抜け落ちたような、虚無的で機械的な声が聞こえた。

「『殺劇、ジャック・ザ・リッパー（切り裂きジャック）』」

瞬間、まるで何かに引き寄せられるように数多ものメスが、薙ぎ倒された森の中から飛来する。

「っ！」

そのありえない現実に一瞬動揺して、投擲されたメスが防具に覆われていない部分　右肩に突き刺さる。

右肩から強烈な痛みを感じたが、今はそんな事を気にするより先に四方を取り囲むメスの大群　と言って良いのかは定かではないけど　をどうにかしないといけない。

だけど、右肩に刺さるメスのせいで上手く右手に力が入らない状況で、これだけの数を捌ききれるとは思えない。

不幸にも僕の利き腕は右手だし、左手でもある程度ならトキシックファンクを使う事は出来るけど、隙間なく四方を囲んだメスを捌ききれ程でもない。

なら、避けてみるかな。

「　は？」

左右前後を隙間なく囲むメスを避けるために地を蹴り、真上に跳んでみたは良いけど、僕が空に跳んだと同時にメスの大群が軌道を変えて上昇してくる。

その事に驚いて呆然とした声を出してしまったけど、魔法があるんだしこんな事もありえるのだからと驚きを抑える。

っと言うか驚愕なんかしている暇があるんならメスの大群をどうにかする方が僕にとって建設的だ。

だけど、捌ききるなんて今の状態じゃ無理だし。避けてみたら追尾してくる。

何がどうなつて鉄の塊であるメスに追尾能力が付加されたなんてわからないけど、取り敢えず防いでみるかな。

捌ききる事は出来ないけど、防ぎきる事なら出来る。

「『毒鎖蛇・蝮局』」

僕がそう言った直後、右手に持ったままだったトキシックファン
グが気を燃料に光り始める。

そして、光り始めてからいくばくも経たずに紫紺の光はより一層
輝き、毒で構成された大蛇を作り出した。

その大蛇は僕を包むように蝮局を巻き、上下左右を隙間なく覆い
僕と外界を遮断する。

そうして『毒鎖蛇・蝮局』を完璧に発動してから瞬きの間すら経
たずに、僕を守護する大蛇にメスの大群が襲い掛かる。

先程確認したメスの数は、ざっと見ただけでも千を軽々と越える
馬鹿げた量だった。普通なら成す術なく体中を切り刻まれ、貫かれ、
死んでしまう程に桁外れな数。

だが、だからと言って一つの世界で『毒霧の悪魔』と老若男女問
わずに畏れられ、それと同時に圧倒的な力の象徴である『G級ハン
ター』の一人として英雄扱いまでされた僕をそう簡単に殺せる訳が
ない。っと言うか、簡単に殺されるなんて嫌だ。

僕のプライドが許さないって理由もあるけど、やっぱり一番大き
な理由は死にたくないから。

人として 否、生物として当たり前持っている生存本能が、簡
単とか関係なしに殺される事を容認しない。

まあ、生存本能以外にも、元いた世界に戻って、また皆と生温い
日常を過ごしたいって気持ちも生にしがみつくと要因だけだ。

そんな気持ちを抱くようになったという事は、僕もかなり変わっ
たって事かな。

言い方を変えれば、毒されたのかな。

毒使いが毒される……、全く以て間抜けな話だ。

……まあ、悪くはないんだけどね。

そんな事を考えながら、しばらく続いた衝突音が消えた事に気付
き、メスを全て防いだと予想してから『毒鎖蛇・蜷局』を解除する。
きっとこの時は曾ての仲間達を思い出して思考が緩くなっていた
のだろう。

だから

「　　っ!？」

周囲の確認もせずに『毒鎖蛇・蜷局』を解除し、結果『毒鎖蛇・
蜷局』に直撃したまま停止していたメスの軍勢が、油断していた僕
に襲い掛かった。

迫る数多の凶器^{メス}を視界に入れ、不可解な光景に驚愕しながらも本
能的な部分で身体が動き、瞬間的に気を放出する事でメスを弾き飛
ばそうとする。

だが、不可思議にも一度弾き飛ばしたメスは再び僕へ迫ってくる。

「ちっ!」

思わず舌打ちしてしまう。だが、今は舌打ちしてる暇なんかない。
早急にこのメスの大群をどうにかしなければ、僕が死ぬ。

だが、どうすれば良い? 避けても追尾してくるし、防いでも再
び襲い掛かってくる。揚句弾き飛ばしても再び襲い掛かってくる。
意味がわからない。不可解だ。不可思議だ。幾ら疑問の声をあげ
ても足りないくらい。

まあ、そんな悠長に思考してる暇など当然なく、気付けばメスの
大群はもう回避不可能の距離にまで迫っている。

「ぐっ……」

咄嗟に気で頭部と胸部を強化し、腕を×印に交差させて頭を守るようにする。

勿論、そんなお座なりの防御でメスの大群を防ぎきる事など不可能で、防具に覆われていない部分　頭部、両肩、胸の谷間、腹部、太股　に次々とメスが殺到する。

頭部と胸の谷間は気で強化したし、頭部は防具に覆われた腕で防御しているからメスは余り刺さらなかったし、刺さったとしても深くに刺さったりする事はないけど、気で強化してない　　っと言うより時間が足りずに出来なかった部分は、まるで釘が刺さりまくった藁人形の如くメスが大量に突き刺さっている。

正直言わなくても、かなり痛い。

ああ、何でこんな痛い思いをしてるんだらう。段々と、ムカついてきた。

「びつくりしましたかー？　びつくりしましたねー。何がどうなって何の魔力も気も感じないメスがあんな不可解な軌道を辿ったのか、疑問で疑問で仕方ないでしょー？」

どこかに隠れていたのだろう暗殺者が無用心にも姿を現し、この僕を馬鹿にしたような眼差しで見下してくる。

何か、後先なんか考えずにこの糞餓鬼をぶっ殺したくなってきた。

「種明かし、してあげましょうかー？」

その言葉を聞き、疑念が溢れる。

種明かしなんてしてもそっちにはリスクしかないのに、態々教える馬鹿ではないはず。

「不思議そうな顔ですねー。なに、私を相手にしてここまでもった方は久しぶりなので、ほんのちよっとの敬意ですよー」

顔に疑問が出てたのだろうと考える前に、憤怒だとか憎悪などの言っただけで黒い感情が胸中に溢れる。

……馬鹿にしてくれる。要はご褒美って事だろう。本当、馬鹿にしてくれる。

ああ、ムカついてきた。物凄く苛々する。今すぐにも目の前の糞餓鬼を殺したい。いや、殺すだけじゃ僕の鬱憤は晴れない。侮辱の限りを尽くして、糞餓鬼が泣き喚いて許しを乞うてもまだ止めず、屈服するまで侮辱を続けて、やがて屈服したならその時に、殺す。

うん、これが良い。これしかない。

大丈夫。後先なんて考えずに切り札を使えば、簡単にこんな糞餓鬼は戦闘不能に出来る。

そうと決まれば、切り札を使うために準備をしないと。

「先に投げられた一本のメスには、特殊な術式が込められてるんですよ。それで、その術式って言うのが、私が合図を出すと同時にそれなりに強力な特殊な磁場を作り出すものなんですー」

糞餓鬼の声が聞こえるけど、今はそんな事を気にする必要はない。だって、僕が『アレ』を使うと決めた時から既に糞餓鬼の死は確定しているから、今更種明かしなど必要ない。

「貴女に気付かれないよう森の至る所に配置しておいたメスが磁場に引き寄せられ、磁場発生術式が掛けられたメスが突き刺さった貴女を追尾する仕組みなのですよー」

さっきはあんな事を考えていたけど、意識の片隅が捉えた糞餓鬼の説明は、なるほどと納得させるものだった。

知ってしまった今では何故そんな事にも気付かなかったと過去の僕を罵りたくなる。

「ほら、こんな風にー」

そう言って糞餓鬼は懐から一本のメスを取り出す。

その行動を見て何をするのか瞬間的に予想し、それを止めようと身体を動かそうとするが、咄嗟だった事と身体に突き刺さるメスのせいで行動が遅れ、糞餓鬼に行動を許してしまう。

「『殺劇、ジャック・ザ・リッパー（切り裂きジャック）』」

「っ！」

糞餓鬼の機械的な声に反応し、僕に突き刺さっていたメス達が引き寄せられるように　　っと言うか、糞餓鬼の持つメスに文字通り引き寄せられて飛んでいく。

強烈な痛みに気を失いそうになるが、胸中に追加されたどす黒い感情に頭がどうにかなったのか、気を失わずに済んだ。

だが、危険は去ってなどなく、糞餓鬼が投げたメスによって僕の血で濡れたメス達は軌道を変え、再び襲い掛かってくる。

ああ、本当に

「調子に乗るなよ、糞餓鬼風情があああアアアアアアアアアアあああ嗚呼！」

準備の一つ　　防具に流した気を再び自分自身の気として貯蔵する事　　が完了し、その気を身に纏う事で『リュウ』と同質の気を身に纏った状態になる。

モンスターハンターではそれなりに有名な言葉で、「『リュウ』は死して君臨し続ける」という言葉がある。

この言葉は死んだ『リュウ』の素材を使って、「『リュウ』のよう

な現象を人為的に起こせるからって理由も含まれてはいるが、この言葉の本質ではない。

文字通り、『リュウ』は死んでも素材に魂として宿り続ける。これが本質だ。

まあ、それなりに格が高い『リュウ』じゃないと素材に宿る魂として現世に残る事は出来ないけどさ。

そして今、僕が何をしたかと言うと、防具に流した気とこの防具に眠る『リュウ』、『ギギネブラ』の魂を混合させ、その混合した気を纏う事で通常とは比べものにならない身体能力強化をした。

だが、これだけじゃ終わらない。まだまだ、まだまだだ。

辛うじて右手で持っているトキシックフアングの柄を両手で持ち、切っ先を自分の臍に向ける。

二つ目の準備　トキシックフアングに気を留める事　も既に完了しているから、後は発動させるだけだ。

「『竜魂装着』」

言葉と同時にトキシックフアングを臍に刺し、貯蔵された気

僕の気とトキシックフアングに宿る『ギギネブラ』の魂を混合させたもの　を体内に取り込む。

くくっ、これからあの糞餓鬼の表情が恐怖で歪むと思うと、興奮してきた。

「『ギギネブラ（毒纏う二面の悪魔）！』」

直後、不気味な輝きを放つ光が溢れて、近付いてくるメスの大群を彼方まで弾き飛ばす。

そして僕は、雷に撃たれたような衝撃が走ったかと思うと、次の瞬間には先程まで感じていた痛みは消え去り、重力などないのでは

ないかと疑ってしまいう程身体を軽く感じ、力が滾る。

いつも通りなら、今の僕は純白と深紅のラインが体中に走り、後頭部に悪趣味な仮面が付いているんだらう。

そんな異様な人間　今の僕は人間より竜に近いけど、スペック的に　を見たからなのか、糞餓鬼は顔を引き攣らせている。

切り札の一つ　『竜魂装着』を使った今の状態なら、僕と糞餓鬼までの距離を気配遮断などさせる暇もなく、一瞬の間すらなく詰めて殺す事も可能だ。

だが、それだと面白くない。糞餓鬼は嫌と言う程恐怖を感じてから、屈服してしまう程侮辱されて不様に死ななければいけない。

他の誰でもなく、僕が決めたんだ。これは既に確定事項だ。

だから、もっとと恐怖を感じる。もっともっと侮辱される。狂気と慈愛の狭間で踊れ。そしてやがて

「自己暗示コード666。合言葉は『狂気と慈愛』。『裏表の相違』スタート（開始）」

不様に地面を這い蹲りながら、死ね

第十三話：理解不能で把握不能。虐め開始まで後3秒。（前書き）

まず最初に、長らく放置してしまつて申し訳ないです！

言い訳とかするのも申し訳ないので、ジャンピング土下座で許して下s(ry

キリア「許さないからね駄目作者め」

ラジル「許さねえからぼけが」

紅葉「主人公たるこの私を放置するとは何事なのだ！ 貴様には地獄すら生温い！」

暗殺者「……ちょっと、酷い気がしなくもないんですけどー……」

「当然の末路だ」

「当然の末路なのだ」

「当然の末路だよ」

……何はともあれ、すいませんでした！

第十三話：理解不能で把握不能。虐め開始まで後3秒。

『……まずは、殺し合いの場所を変えるところでしょうか』

そう言ったのは荒れ果てた森に佇む悪魔のように不気味な人間
キリア・ラウクルス。

その姿は異様。その一言に尽きる。

どこが異様なのかと言うと、全てが異様だ。

露出した肌に現れた、先程まではなかった純白と真紅の模様。

今は防具に隠されて全体は見えないが、恐らく体全体にあの模様があるのだろう。

それだけではない。彼女の後頭部に突如現れた不気味で悪趣味な
仮面。それも異様だ。

純白をベースに真紅のラインが所々に走り、目と口を表している
のか三個所に穴が空いている。

まるで悪魔のように裂けた口部分と、どこまでも嗜虐的に歪んで
いる目部分。

見た者にトラウマさえ植え付けるだろう不気味な仮面がしかも、
まるでこの状況を楽しむかのように耳障りな嗤い声をあげているの
だ。

どこまでも異様。どこまでも不気味。

だが、何よりもこの場で異様な事は

『くくくっ……これが今から君にとっての悲劇の舞台となる場所だ
よ。』 ナイトメア・ゾーン 『展開』

彼女 キリア・ラウクルスが纏う、矛盾し過ぎた雰囲気。

聖母のように慈愛に満ちていると同時に、悪魔のように嗜虐的な
狂気に満ちている。

全てが異様。全てが不気味。

恐らく、今のキリア・ラウクルスを止める事は暗殺者の少女には不可能だ。

そう思わせる（・・・）程に、狂氣的だ。

Side 暗殺者の少女。

『……まずは、殺し合いの場所を変えるところでしょうか』

聞こえた悪魔の囁きに一瞬呆然としましたが、すぐにまた気を引き締める。

先程までは確実にこちらが優位だった。

ですが今は、どうでしょう？

私の全身を刺激する圧倒的な狂気。

彼女が纏う異様な雰囲気。

耳障りな嗤い声をあげる不気味な仮面。

その全てを私の危機感知能力は危険だと判断。

あちらが何かする前に迅速に気配を完全に遮断し、様子を見た方が良いですね。

……それにしても、場所を変えるとはいつたいどういう事でしょう？

『くくくつ……これが今から君にとっての悲劇の舞台となる場所だよ。』 ナイトメア・ゾーン 『展開』

悪魔が言葉を放った直後、紫紺の光が大地を駆け抜け、空へ飛び、大地を支配し、空を制覇した。

辺り一面紫紺に包まれた怪しげな空間。所々にある浮き出た血管

のように盛り上がった部分がその様相をさらに不気味なものへと変える。

「……」

口から出た疑問は明らかに言葉足らずですが、それでも悪魔は察してくれらしい。

困惑と驚愕に彩あやなされた私の顔を見てなのか満足気な表情でふんつと鼻笑いした後、私を嘲るように　それでいて私を慈しむような　矛盾した視線を向けた後、人を小馬鹿にした　それでいて人を褒め称えるような　笑みを浮かべながら、口を開いた。

『ここは僕の　否、僕達の気で指定した領域を覆い、領域内への侵入を不可能にした半球状の空間』

「……何ですか、たったそれだけですか」

彼女の説明を聞き、一瞬の呆然。だけど、すぐに呆然を心の奥底に押し込む。

こんなもの、ただの見掛け倒しでしかなかった。

助けを呼べなくしたつもりでしょうけど、元より助けなど

「ならばさつさと、死んで下さいー」

必要ない！

「『殺劇』」

コートコートの裏側から指と指の間で挟める程度の太さしかない5センチメートル程の長さを持つ棒状の物体を幾つも取り出し、それぞれ

に少しだけ気を込めながら悪魔に向けて投げ付ける。
それを何度も繰り返し返し投げた数が三桁に漸く届いた時に、『殺劇』の発動ワードを口にする。

「『ツエペシユ（串刺し公）の晩餐』」

直後、投げ付けた物体達が鈍く光を発し、先端から気で構成された槍状の刃を作り、刃とは逆側の先端から気を噴出して加速する。そして無数の杭は、悪魔に向けて高速で飛翔していく。
並大抵の戦闘者ならこれで終わるでしょう……ですが、

「貴女は決して、並大抵の戦闘者などではないですからねー」

言葉と同時にコートの裾に手を突っ込み、二丁の拳銃を取り出す。見掛けは何の変哲もないボルトアクション式の小型拳銃ですけど、あくまで見掛けだけ。

通常の拳銃と同じ機能も搭載してますが、性能はこちらの方が遙かに上。

しかもこれにはある機能が搭載されていて、今現在の私の切り札と言っても過言ではない。

こんなに簡単に使うのも何だか変な気分になりますけど、ただでさえ時間を掛け過ぎていますし、私の切り札以外の手札でそう簡単に殺せる程彼女は甘くないと先程痛感しましたし。

その上何やら得体の知れないものを発動しているようですので、何かやられる前に迅速に殺した方が良いに決まってる。

「『術式解放、魔法の射手、連弾、炎の500矢』」

両手に持った拳銃を悪魔に向けながら、発動ワードを口にする。

この拳銃は私と協力関係にある考古学者が発見した古代兵器。

元はボロボロで使い物にならなかったこれを過去の資料を元に原型を取り戻して、使えるようにした……らしいです。

魔法の貯蔵、使用者の言葉に反応して貯蔵された魔法の合成や、発射をフルオートでしてくれるとんでも機能を搭載した武器。

搭載出来る魔法の限界は一丁につき魔法の射手500本まで、本当にふざけた装備です。

さすがに発射後の反動がきついですが、それでもかなり軽減されてる。

そんなチート拳銃のトリガーに指を掛け、続いて口を動かす。

「『術式解放、魔法の射手、連弾、氷の500矢』」

ここまで言い終わった瞬間に、悪魔に向けられた銃口を軸に様々な魔法陣が現れ、膨大な魔力が銃口から溢れる。

その魔力を感じとったのか悪魔の引き攣ったような声が微かに聞こえましたが、この際無視する。

「『術式複合、及び術式収束。開始』」

赤と白の魔法陣は私の声と共に銃口と銃口の間に移動し、それに伴って膨大な魔力も徐々にだが収束されていく。

「術式複合と術式収束が終了するまで残り5秒。そして、終了から発射まで3秒のインターバルがあります。つまり、貴女の寿命も残り8秒です……。まあ、その前に、大量の杭に串刺しされて死にそうですけどねー」

直後、大量の杭が漸く悪魔に着弾し、轟音が連続で鳴り響く。

これで死ぬとは思ってはいませんが、安い挑発ぐらいしたくもありませんよ。

あくまで『殺劇、ツエペシユ（串刺し公）の晚餐』は複合と収束が終わるまでの時間稼ぎでしかない。

……『殺劇、ツエペシユ（串刺し公）の晚餐』を時間稼ぎで使うのは、そういえば初めてです。

並大抵の戦闘者なら使う前に殺してますし。

「つと、『複合及び収束、終了を確認。』発射まで残り3秒」

大量の杭の着弾により砂埃が舞い上がり、今ははつきりとは見えない悪魔により明確に狙いを付ける。

視界が不確かなので少しズレてるかも知れませんが、掠っただけでも半身を吹き飛ばす以上の威力がこれにはある。

「2……!？」

発射まで後僅か、そんな時に私は気付いてしまった。

絶望的状况に立たされて、死に直面しても、彼女は

「つ1」

狂った人間のように、壊れた人形のように、子を撫でる聖母のように、恋人と過ごす少女のように、さながら破綻した悪魔のように 嗤っていた。

砂埃の隙間から見えたその笑顔に、何故か母に抱きしめられたような安心感を感じたと同時に、悪魔に捕まったような危機感を感じた。

そして、言い知れぬ安心感と危機感。相入れない感情を同時に感じてしまった私自身に底知れぬ疑心が生まれた。

だから

「0！ 死ねっ。壊れた狂人めっ！」

いつも通りの冷静さなどなくして、今すぐにも泣き始めた
くなった。

何が何だかわからない。

何で私はこんな可笑しすぎる感情を感じているんだ。

情緒不安定になるほど人間らしくはなかったはずなのに、何で…
…。

「凍て付く蒼炎、燃え上がる紅氷。矛盾した暴力！ 全てを燃や
して灰に変える。全てを凍て付かせ物言わぬ氷像に変える！ そし
て全てを破壊し尽くせ！」 蒼紅の閃光！』 発動！」

わからないわからないワカラナイ。

何もわからない 否、わからなくなった。

何がどうなってこうなったのかすらわからない。

もしか、キリア・ラウクルスが何かしたのか！？

そうだ。きつとそうに違いない。

ですけど、何をしたのかわからない。

まるで私が無知な子供になったと錯覚してしまう。

このままだと本当に、どうにかなりそうです。

一刻も早く何をしたのか聞き出して、その何かをやめさせないと
…。

そう思い、『蒼紅の閃光』が着弾した場所に視線を向ける。

「いない……？」

どうやら着弾にも気付かない程冷静さを失っていたらしくて、視
線を向けて見るがそこには『蒼紅の閃光』が残した破壊の跡しかな
い。

「まさか……死んだ？」

いや、彼女はまだ死んでいない。
肌にひりひりと刺激を与える狂気からそう判断する。
でも、どこに……。

「……？ あれは？」

紫紺の世界に聳え立つ炎を纏った大きな冰山。

私が放った『蒼紅の閃光』によって出来たその山の中に、不自然な紅いラインを見付けた。

……迂闊に近付くのは下策。

そうまだ残ってる冷静な部分が警報を鳴らすが、身体は一刻も早くこの言い知れぬ感覚を拭い去りたいらしくて、危険など二の次三の次に冰山へと駆け出す。

それを他人事のように思いながらも一步一步近付くたびに、新たな不安感が顔を出した。

もし、キリア・ラウクルスが死んでいたら。

そんな絶望的未来の可能性。それに気付いて、また不安になる。もう訳がわからない。

何故殺すべき相手が死んでいたら、なんて殺す側からしたら仕事が減って嬉しいはずの事なのに、こんなにも不安にならなければいけないんだ。

「あと、少し……」

考えている間に冰山までの距離が後少しに縮まり、紅いラインの正体も見えるようになった。

だけど、視界に入った情報からわかった事は、紅いラインの正体

私が求めたモノではなかった事だけだった。

「……仮、面？」

確かこれは、彼女が『竜魂装着』とやらをした時に現れたものだ。彼女の後頭部に付いていたのでどうゆう外観をしているのかは見えませんでした。氷の中から響く耳障りな嗤い声の御蔭でこれが彼女の付けていた仮面だと確認した。

……ん？　こお、りの、中、から……！？

『あひゃっ、あひゃひゃひゃひゃひゃっ！　ぐけっ！　げーひゃっはっはあっ！』

密閉された氷の中にいるはずなのに聞こえる仮面の嗤い声。

夢にでも出てきそうな程恐怖を感じさせるその嗤い声の発声元

仮面。

その仮面の目部分にある空洞から、紫紺の光が見えた。

「　　っ！？」

危機感を感じた同時に氷山に罅ひびが入り、硝子を盛大に割ったようなぱきいんっと言う音と共に砕けた　　否、砕かれた。

『あひゃひゃひゃひゃっ！　災難だなあ嬢ちゃん！　まだ若いのにあいつに目付けられちまってよおっ！　同情してやりてえが、そんな事したらあいつが嫉妬のあまり嬢ちゃんをぶっ殺しそうだから出来ねえや！』

氷山から出てきた仮面が嗤い声の後にそう喋り出す。理解出来ない。喋る仮面なんて聞いた事ないです！

『まあ、どのみち嬢ちゃんは殺されるだろうけどよおっ！ くけっ、くっつけっつけえっ！ って、おや？ 嬢ちゃん。おめえ』

まるで人間のように表情を歪めながら喋る仮面を前にして、体中に寒気が走った。

その仮面は私に空洞から覗く紫紺の光 恐らく目の役割を果たしているだろう部分 を向け、突如嗜虐的に歪んでいた顔を何の感慨もない無機質なものに変え、語りかけてくる。

『なあ、何で不思議そうな顔をしてるんだ？ そんなに仮面が喋る事は可笑しいのか？ なあ、おいっ！ 可笑しいのかよ！？』

「 え？ 」

突然の問い掛けに、間抜けな声が出てしまう。

そりゃあ、可笑しいに決まってるじゃないですか。そう言おうと口を開こうとした瞬間。

『ああっ！ おめえから見たら可笑しいのかもしれないねえよ！ だがよう、それってこの上なく残酷な差別じゃねえか！？ 家畜にだって感情はある！ 虫にだって涙がある！ 絶対強者である古龍にだって悩みは幾らでもある！ 見て呉れは全然ちげえけど、中身は人間と何等変わりねえ！ どういう形だろうとこの世に生まれちゃったからには全員平等なんだよ！ だからよおっ、人間が喋れるんならそれと平等に仮面が喋れても可笑しくねえだろ！？ それなのに可笑しいって言うなら、俺様はこう聞くね！』

「 ？ 」

狂気すら感じる程に鬼気迫る表情で今も尚放たれ続ける暴論に呆然として、それと同時に恐怖した。

意味がわからない。この空間に来てから、理解不能な事ばかりが起きる。

何が理解出来ないんだ？ 何で理解出来ないんだ？

『全部冗談に決まってるだろ！ そんなんもわからずに真剣に聞いてたのかあつ！？ あひゃひゃつ！ ひゃつひゃつひゃつひゃつひゃつあつ！』

わからないわからないワカラナイ。

私の全てが不明確なものへと変わっていく。

私は誰？ どんな人間？ 趣味は？ 特技は？ 職業は？

まるで壊し尽くされた人形にでもなったみたいに、何もわからない。

心なしか視界も不明確なものになっている気がするし、他の五感も同様。

仮面が放つ耳障りな嗤い声が遠退いていく。

「つ！？」

そんな曖昧な五感の一つ 聴覚が拾った音を察知し、その方向に視線を向ける。

『はあ……、そんなに虐めちゃ駄目だろう。この娘はもう本当に壊れかけなんだから。それに、君が誰に嫉妬しようとして僕は目くじらなんて立てないよ』

視線の先にはやはりとでも言えば良いのか、無傷のキリア・ラウ

クルスが立っていた。

その表情はどこまでも慈愛に満ち溢れていて、それと同時にどこまでも狂気に満ちていた。

そんな表情を見て何故かこの上ないと思える程に強力な安心感を感じてしまい、またしても私自身に疑心が芽生える。

『おっと、すまねえなあ！ 俺様を殺してくれた糞女アヌさんよう！

どうせならこのまま壊してやるのもおもしろかと思っよう！ ぎやはははははははっ！』

「っ！」

抹殺対象を目前にして今のままでは駄目だと必死に冷静さを装い、胸に蔓延る疑問を解消しようと口を開く。

「……キリア・ラウクルス。貴女に幾つか聞きたい事があります」

私の声を聞いて矛盾した表情を浮かべる顔をこちらへと向ける彼女。

まるで子を見守る母のように温かく、それと同時に虫けらを見るような冷たい眼差しを向けられ一瞬言葉が詰まる。

だがすぐに平静さを装って、口を動かす。

「まず一つ目。何故貴女は、無傷なんですか？」

『蒼紅の閃光』は、過去に魔法世界で起きた大戦で一躍『英雄』となった『紅き翼』のメンバー達にだって致命傷を与えると協力者からお墨付きをもらう程強力な破壊魔法。

幾ら彼女でもそれを無防備に受けて無傷だなんて、ありえない。必ず何か、絡繰りがあるはず。

『うん？ そんな事かい？ んー、どうしようかな……。教えてあげても良いんだけど、ただで教える程僕は善良でも馬鹿でないし』

腕を組みながらそう言い、意味深に私を見る彼女。

何か代価を寄越せと、そう言いたいんでしょうか。

……恐らく、今回の依頼の詳細な情報、それが欲しいんでしょう。ですが、情報を漏らしてしまう程私は馬鹿な暗殺者ではない。

仮に私が情報を渡したとして、それがばれてしまったら不幸な目に会うのは彼女ではなく私だ。

『ああ……情報を漏らした事がばれてしまった時の危険性を考えているようなら。良い事を教えてあげよう。この『ナイトメア・ゾーン』は外界からのありとあらゆる干渉を拒絶する。だから、この中で起こった事は僕達だけしか知らない、言うなれば二人だけの秘密になる訳だ』

『おいつ！ 何で二人だけなんだ！ この俺様を忘れてんじゃねえよ糞女あつ！』

『つまり、僕達が口外しなければばれる心配はないって事だよ』

『無視かよ！ 無視なんですかこの糞女があつ！』

なるほど。そんな機能もあつたんですか。

……っ！？ まさか、こうなる事を読んでこの『ナイトメア・ゾーン』を展開したのですか！？

『ああつ、別にこうなる事を読んでこれを展開した訳ではないよ。それで、代価を払ってくれるのかな』

『おいごら糞女あつ！ 好い加減にしねえと泣くぞこらあつ！ 涙なんて出ねえんだけどよ！ あひっ！ あっひゃっひゃっひゃっひゃあつ！』

私の心中を察したのかそう言った彼女。

仮面の耳障りな声はこの際無視です。

ふむ、断る通りはないんですけど、それだところちらの代価が大きすぎる。

っ、そつだ！

「契約の内容を、変えさせてもらっても良いですかー？」

『んー、内容次第だね』

「私が貴女に求める事を『貴女が無傷でいれた絡繰りの種明かし』ではなく。『今回の戦闘で出た貴女に対する疑問の解答』に変更する事です」

これなら、代価と釣り合うだけの報酬が手に入るでしょうし。彼女だつて了承してくれるでしょう。

つと、私はそう考えていたんですけど、どうやら

『うん。別にそれでも良いんだけど、それだと今度は代価が小さくなりすぎる。誰よりも優雅で可憐で素敵なこの僕に対する疑問の解答は、それっぽっちだけの代価じゃ99%OFになっても払えないよ。って言うか』

悪魔はそんなに甘くはなかったらしいです。

『元からそんな事する気なかつたし、必要もないんだよね。君を尋問でもして情報を吐かせれば良いだけだし』

『ぎゃはははっ！ おめえっ、ひでえよ！ この上なく残酷だぜっ！ 悪魔よりもよっほど悪魔らしいぜっ！ だがよう、そんな所が大好きだぜえっ！ あっひゃっひゃっひゃっひゃあっ！』

にっこりと聖母のように嗤いながら、悪魔のような言葉を、子に物事を言い聞かせる母のように話した彼女。

今までそんな余裕がなくなる程に冷静さを装う事に必死だったのか、気付かぬ間に消されていた狂気がまたしても充満する。

そしてまたしても、矛盾した表情を見て矛盾した感覚を覚えてしまった私自身への疑心。

ああ、また　ワカラナクナル。

第十三話：理解不能で把握不能。虐め開始まで後3秒。（後書き）

今回の後書きはちょっとした宣伝と報告です。

飛ばしても良いんですけど、出来るだけ見て下さいな w。

リハビリと言う名目で書き始めた『全て平等に殺します。』

どんなお話かと言うと、いきなり主人公が地獄に堕ちて性転換されて、周りに流されながらも頑張つて生きていく……つと、この先は『全て平等に殺します。』の本文でw。

まだまだ始まったばかりですけど、『転生者達は踊る。』に出て来るオリキヤラ達にも負けず劣らずの壊れっ振りを主人公が神やら魔王やら天使やらに向けて存分に振るうお話です！

興味がある方は見て下さいなw。

そしてもう一つ、なんと！

私が所属するなろうでの出会いがきっかけで出来た団体『鉄の翼』クロガネにホームページ？が出来ました！

『鉄の翼』に所属していない方も、暇なら入りしただって下さい！
いつでも大歓迎です

マンガープリンさんのページから飛べますけど、一応ここにもURL貼っておきますね。

<http://ironwing.mh7.mp7.jp/>
です！

まだ過疎ですけど、これから盛り上がる（予定）ですw。

第十四話：虐め開始の合図は種明かし。悪魔が見せる悪夢。（前書き）

はい。っと言う訳で種明かしと虐め始まり始まりなお話です。

『ナイトメア・ゾーン』や『裏表の相違』の効果も出ます。っと言つても、『ナイトメア・ゾーン』は応用が効き過ぎるので全て記載してはないんですけどね。

ん？ 投稿が遅れた理由？ そんなもの 感想が一つもなかったからに決まってるじゃないですかっ！

キリア「黙りな駄目作者。怠けていた君には調度良い罰だよ」

……はい。すみません。

第十四話：虐め開始の合図は種明かし。悪魔が見せる悪夢。

『ぎやははははっ！ 不様だっ！ 不様だぜえ嬢ちゃん！ まるでレイプされた哀れで馬鹿な女みたいに不様だぜえっ！ レイプされた女なんて見た事ねえけどなあっ！ あっひゃっひゃっひゃあっ！』

紫紺の光をこちらに向けて、心底愉快そうにそう言う仮面。

精一杯の抵抗でその仮面に殺意を籠めた眼光を向けてみましたけど、仮面はそれを嘲笑うかの如く 否、本当に嘲笑って、嗜虐心しかないのかと思う程に残酷に輝く紫紺の光で私をじーっと見詰める。

『ん？ 何だよ嬢ちゃん。そんなつぶらな瞳で俺様を見詰めて？ ああっ、あれだな！ あれなんだろっ！？ 嬢ちゃん俺に、惚れちまったんだろおっ！？』

突然何を言い出すのかと思えば、戯れ事を……。

いつもの私ならばただ無言で受け流すだけですが、何故か無性に腹が立つ。

今すぐにも襲い掛かって首を掻き切らんばかりの勢いで睨んでみても、仮面はただ嗤うだけ。

『いやあ、モテる仮面は辛いねえっ！ モテても何も出来ねえんだけどなあっ！ ぎやははははははっ！』

どこまでも人を馬鹿にした態度に、腹の底からぐつぐつと煮え滾ったマグマのように激しい怒りが込み上げる。

本当に絶対に確実に、今すぐにもこの仮面を切り壊さんと外套の裾に仕込んだナイフを取り出そうとするが、何故か身体が動かな

い。

どうする事も出来ずただ侮辱されるだけの現状について私も理性を失いかけたが、思わぬ人物からの助けに何とか踏み止まった。

『……や、絶対違うと思うんだけど』

思わぬ人物　　そう、今回のターゲット（抹殺対象）。キリア・ラウクルスだ。

彼女は心底不可解そうに不愉快そうに、それでいて慈愛に満ちた狂った表情で言葉を放ち、やれやれと大袈裟に首と手を振る。

その仕種がムカついたのか、将又いつもこんな掛け合いをしているのか、嗜虐的な光を彼女に向けてまたしてもどこまでも人を馬鹿にした態度で口部分に開いてある空洞を動かす仮面。

『ああっ!？　んな事わかってるよ糞女があっ!　全部ジョークだよばあかっ!　あっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃあっ!』

その言葉を聞いて、相変わらずの矛盾した表情や雰囲気でも口を開く彼女。

そして、口から溢れる罵倒。今の彼女には似合わないとも言えるし、似合うとも言える乱暴な言葉。

『……はあ、本当に君は、初めて会った時からこれっぽっちも変わらない。相変わらずの途轍もないゴミ屑だね』

『ったりめえ（当たり前）だあっ!　俺様はてめえの糞みてえな気と俺様の肉片から作られたんだからなあっ!　幾ら最高に最凶で最狂に最強な俺様の肉片から作られても、てめえの最低に最弱な劣等過ぎる気が混じったらあゴミ屑になって当然だろっよっ!　ぎゃはははははっ!』

それに返された侮辱の言葉。それを聞いた彼女は矛盾した表情に先程まではなかった苛立ちの色を浮かび上がらせ、こめかみをぴくぴくと痙攣させながら口を開いた。

「　　つ。だあれが最高に最凶で最狂に最強な俺様だつて？　君が言う最低に最弱な劣等過ぎる気の持ち主に負けた分際で、何をほざいてるんだか」

「　　つ」

そう言つて嘲笑を浮かべながらはつと鼻で嗤つた彼女を見ていたら、突如体が軽くなつたかのような違和感を感じた。

その事に驚いて目を見開く。

「ああっ！？　　うつせえぞ糞女あつ！　あんな卑怯な真似されちゃあ俺様だろうと誰だろうと不意を突かれておっちんじまうに決まってるだろうがよ！」

「あんな誰でもわかる小細工に引つ掛かるような奴じゃあ誰だろうと不意を突かれただけで死んじやうだろうね。確かに」

そんな私の変化に気付かないまま罵り合う彼女と仮面。

心なしか先程まで感じていた不安感や安心感。その他諸々の感情や感覚が通常通りいっつもになった気もします。

策を練つて、行動するには　　今が、ベスト……っ！

「一タム力つく女だなあ相変わらずよおっ！　大体てめえ　　」

罵倒をBGMにクリアになった思考を働かせる。浮かんでは消え

る幾つもの選択肢を一つ一つ迅速にどれが1番有効か判断する。

迂闊に飛び込むのはリスクが高過ぎる。却下。

『殺劇』の連発でこり押し。まず『殺劇』が今のターゲット（抹殺対象）に効くのか定かではない。確実性が少な過ぎる。却下。

『超古代級小型凡庸兵器、ミズガルズ・フレイ』（先程の二丁拳銃）による超火力攻撃。そもそも貯蔵されていた魔法は先程全て使った。だから、有効か否か以前の問題。却下。

大量の影分身達と一斉に襲撃。瞬く間に一掃されるのが落ち。却下。

となると、やはり気配を完全に遮断しながら様子見、及び襲撃が妥当。いざとなれば姿を暗まして逃げれば良いですし。

そうと決まれば

『 ああつ、糞野郎がつ。久しぶりにこの僕が態々具現してやったって言うのに、少しも感謝の意を示さないとね。呼び損だよ。これは詐欺だ。今すぐ死んで謝罪の意を示して欲しいよ。』

相変わらず続いている罵り合いを聞きながら体勢を前屈みにして、一瞬溜めを作って直ぐ様地を蹴る。同時に、気配を遮断。

ターゲット（抹殺対象）と仮面は視界から消えた私に気付いてないのか、依然として罵倒し合っている。

全く以て、舐めてくれますね……っ！

『ばあかつ！俺様はとつくの昔にてめえに殺されてんだから、もう死なねえよ！大体てめえ、馬鹿だろ？阿呆だろ？気付いてねえのか？気付けよっ！』

ターゲット（抹殺対象）が隙だらけだと判断して、上に跳ぶ。そこから空中で縮地を使用して高速でターゲット（抹殺対象）の背後に立ち、外套の裾からメスを取り出して両手に一本ずつ握り締め、

振り返る。

『二重の意味で気付かぬのなら、てめえはどうしようもない馬鹿女だぜえっ！ あっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃあっ！』

「ああもう本当に、うるさいなあ。そんなの」

そして両手に持った二つの凶器を、防具に覆われていない剥き出しの後頭部目掛けて×印を描くように振るう。

殺った。そう確信していた。仮面は何やら気付いていたようだが、今更何をしても遅い。そう思って口端を吊り上げる 否、正確に言えば意識せずに勝手に口端が吊り上がった。

普段はこんな事ないんですけど、まあ苦戦しただけターゲット（抹殺対象）を殺す未来が明確になって嬉しいのでしょうか。そう思って自己完結して、メスを握り締めた両手に力を込める。

「これでっ、終わりでっ」

これで終わりです。そう意識せずに言おうとした口は、予想外な事に止められる事になる。

『とっくの昔に気付いてるに決まってるじゃないか』

突如こちらに向けられた愉悦に染まって染まって染まり過ぎた、聖母のように優しい表情のキリア・ラウクルスが差し出した温かい手の平に握られた、妖しく輝く小型剣によって。

「っ」

体中を駆け巡った煮え滾るように熱いナニかに驚愕して、言いか

けた言葉が喉に詰まる。

そして、自分の身体に何が起こったのか理解出来ないまま今度は身体が温かいナニかに抱き締められて、動きが止まる。

「はっ？」

その温かいナニかが何なのかは、すぐにわかった。

鼻を擦るどこか淫靡な甘く妖しい香りに、視界の端に映ったくすんだ白色の髪の毛。私を包み込む聖母のように温かく、悪魔のように冷たい矛盾した感覚。

そう、キリア・ラウクルスに抱き締められた

間抜けな声を出してしまうのも仕方ないでしょう。

『くくっ、そんなに意外かな？ 僕が君を抱き締める事が』

耳に入った聖母のように優しい声に、心の中で意外に決まってるでしょうと呟く。

本当に、意味がわからない。

『まあ、意外だろうね。この上なく果てしなく。これが意外じゃないなんて言う奴は頭がどうにかなってるよ』

『そういうお前も余程頭がどうにかしてるぜえっ！ ぎゃはははははっ！』

仮面の言葉に全く以てその通りだと内心で叫ぶ。

その意外な行動をした本人が何を言っているのか。

『くくくっ、そうだね。きつと頭がどうかしてるよ僕は』

どうやら自覚はあったらしくて、相変わらず矛盾した表情でそう言った彼女。

そして、聖母のような温かさで私を包む少女は、嗜虐的に吊り上がった口を続けて動かす。

『まあそろそろ僕は眠いし、無駄に長引かせていたら反動が凄い事になりそうだから無駄な話はやめて本題に移らせてもらおうよ』

そう言って一旦口を止める彼女。だが、彼女は何の反動かすら考えさせてくれないらしく息継ぐ間もなく口を動かし始める。

『ああでも、本題と言っても戯れ事をただ言い続けるだけなんだけどね』

後になって思った

『そういえば君は何で僕が無傷なのか不思議がっていたよね。今の僕は聖母のように優しいから特別にただで答えてあげるよ』

この時何が何でもどうなっても、キリア・ラウクルス（悪魔）の口を閉じていれば

『あれは単純に簡単に言葉の通りに、この『ナイトメア・ゾーン』は『悪夢の領域』だからだよ。誰にとつての悪夢だった？ そんなの勿論君にとつての悪夢に決まってるでしょうに』

私は壊れず（狂わずに）に済んだのに

『君にしてみればあれを 何だっけ？ 『蒼紅の閃光』だっけ？ を食らって僕が無傷で済む事は最悪の悪夢だろう？ だからこそ

「悪夢が現実になる領域」であるここではそれが現実になった。詰まり、そういう事」

耳に入った理不尽な暴力チカラの存在を聞き、自らの耳を疑う。知らぬ間に否定の声が喉から出てしまう。

「そんな馬鹿げた暴力チカラがある訳ないでしょうっ！ 戯言をほざかないで下さい！」

そんな私の声を聞いてか舞台に立つ道化（役者）のように胡散臭く大袈裟に、私を抱きしめていた腕を離して一歩下がり、両手を空に向けて嘆くように口を動かす悪魔。

『そうだよ。戯言だよ。僕にはそんな出鱈目な暴力チカラはない。さてここで問題です。なら何故僕は無傷なんでしょうっか？』

嘆くような動作とはまるで噛み合っていない途轍もなく愉快そうに歪んだ笑みを浮かべて、大罪人の嘆きのように罪悪感に満ち溢れた音色で喋る悪魔。

やっぱり戯言だったんですかと安心半分、ふざけてるとしか見えない彼女に苛立ちが募る。

「わからないから貴女に聞いたんでしょうがっ！ ふざけるのも大概にしなさい！」

苛立ちを乗せて言葉を放つ。その声を聞いて更に笑みを深める悪魔。

『うん。そうだね。その通りだね。でも一言だけ言っておくと、僕はふざけてなんかいないよ。至極真面目さ。大真面目だ。どちらか

と言つとふざけてるのは、君の方なんじゃない？』

ふざけてるのはそちらの方でしょうと叫ぼうと口を開こうとする。だが、開きかけた口は悪魔の囁きによって途中で動きが固まってしまつ。

『何だいその格好は。君の性癖に僕がアレコレ口にするのもどうかと思つけど、それでも言わせてもらうよ。何で殺し合いの場に何の武装も服装も付けずに、全裸なんかで来たんだい？ 阿呆だろう。馬鹿だろう。変態だろう。幾ら痴女だつて殺し合いの場に全裸で来るなんてどうにかしてるだろう。大体、そんなふざけた奴にふざけるのも大概にしるなんて言われる程僕はふざけてなんかいないよ』

表情が一変、子供を怒鳴る父のように厳しい顔で聖母のように優しくそう言つた悪魔。

天に掲げていた手の平はいつの間にか私を指差していて、まるで親に叱られた子供にでもなつたかのように錯覚する。

つて、え？ 全裸？

「　　つ！」

・ 所詮悪魔の戯言なのに何故か本当に私が全裸になつた気がして（・
・）、急いで私自身に目を向ける。

「　　え？」

所詮戯言のはず。そう、戯言のはず。だがどうでしょう？ 視界に入った私は、確かに全裸だった。

驚愕、困惑、羞恥、その他にも諸々。色々な感情が混ざり合つて出た言葉は茫然自失とした声。何が何だかわからない。正にそんな

感じの。

『まあ君が全裸なんて戯言は、所詮ただの戯言なんだけどね』

「　　っ、戯言なんかじゃないじゃないですかっ！　　一体私に何を
した！　キリア・ラウクルス！」

もう半狂乱だった。当然でしょう。ただでさえ訳がわからないのに突然全裸になっていて、何かしたとしか思えない悪魔は戯言を言っただけと暗に示している。本当に訳がわからない。そんな思いも言葉に乗せて、喉が張り裂けんばかりの勢いで叫ぶ。

それに返ってきた悪魔の言葉は

『戯言だよ。僕が言った事は、ね。何をしたと聞かれても戯言を言ったとしか返せないね。ああそうだ。そういえばまだ『ナイトメア・ゾーン』の本当の効果を教えてなかったね。出血大サービスだ。ついでに『裏表の相違』がどういう人格を自己暗示で再現して、どういう狂気を撒き散らしてどういう作用を与えるか教えてあげよう。まずは『ナイトメア・ゾーン』。あれは指定範囲内を僕とこの仮面野郎の気で覆って、僕達以外の生命エネルギー　　この世界だと気の他にも魔力もその枠組みに入るのかな。まあ兎に角、生命エネルギーを吸収して僕達の養分ものにする事が出来る空間を作る事が出来るんだよ。他にもおまけ効果があるけど、今は割合しておくよ。

『裏表の相違』は裏と表の関係にある全く違う雰囲気、表情、感情、声、思考を行き過ぎた自己暗示で同時に再現。周囲に『矛盾した僕』を見せ付け『矛盾した思い』を抱かせて、精神錯乱を及ぼすもの。それで錯乱し切ったら後は簡単、錯乱している生物というものは単純だね。自分を保つために無意識下で『絶対的なナニか』に縋り付く。ここまで言えばわかるかな？　そう。『絶対的狂者』である僕

の戯言に縋り付き、その言葉が真実だと思い込む。まあ本当は幻覚が見える程は思い込まないけど、今回は君に幻覚を見てもらわなきゃいけないからね。

吸収した生命エネルギーや僕達の気を使って無味無臭で強力な精神錯乱効果を持つ透明な霧状の毒を生成して撒き散らす。それで念のためにトキシック・ファンクを介してより強力な精神錯乱効果を持つ毒を生成して、抱き着く前にさりげなく君に付着させた。そうすれば案の定、君が全裸だなんて戯言を信じて、本当に全裸だと思い込んで幻覚を見ていたらしいじゃないか！ 傑作過ぎて感嘆しちゃうよ！

つと、余計な事まで言っちゃったね。でも良いか。これで 』

正に私にとっての悪夢の前兆と言える言葉だった。

『 よりリアルな幻覚を見せれる。もう君は、そうだと認識（思い込んで）しまったからね 』

一言毎に雰囲気も表情も感情も声も思考も変えながら、まるで何もかもが違う別人を無理矢理くっ付けたように不自然な態度で吐き出され続けた言葉は、私にそう認識さ（思い込ま）せるのに充分過ぎる程絶対で（狂っていて）、私を誰かに縋らなければいけない状態にする程矛盾してい（錯乱させ）た。

第十四話：虐め開始の合図は種明かし。悪魔が見せる悪夢。（後書き）

霧唾「はい。っと、言う訳で後書きと言う建前の雑談が始まるよー
っ
」

キリア「……………空気も読まずに、君っていう人は……………」

霧唾「良いじゃない！感想返信ではっっちゃけれないから色々た
まってるんだよー！」

キリア「そういう、さりげない感想クレクレは読者達に呆られる原
因だよ？」

霧唾「うぎゅっ、そういうえばそうだった……………」

キリア「はあ……………、相変わらず、馬鹿だねえ君は」（呆れ顔）

霧唾「うっ、うるさいうるさいうるさーい！良いよ！キリアが
そういう事言うんならこっちだって考えがある！物好きな読者に
侮辱されちゃえ！見せてやるっ。これが進化した我が邪気の塊！
『邪気眼！ HATUDDOU！』」

キリア「……………何も起こらないじゃないか。滑稽過ぎてもはや何も感
じないよ」（無表情）

霧唾「ふっ、キリアには直接的には何も無い能力を108個ある能
力の中から”二つ”選んで使ったからね」（ニタニタニタニタ）

キリア「っ、待て、もしかして……………っ！」

霧唾「そう、そのもしかしてだよ。『透視』と『視覚で得た情報を共有』する能力を同時に行使して、キリアの恥ずかしい姿を全国の皆様に無差別に送り付けたのさ！ ふっはっはっはっはっ！ どうだい？ 私の邪気眼の力h」「竜魂装着」って、え？」

キリア「『ギギネブラ（毒霧纏う二面の悪魔）！』次いで、自己暗示コード4444。合言葉は『毒霧の悪魔』リミットオーバー（限界突破）・スタート（開始）」

霧唾「ちよっ、『竜魂装着』とリミットオーバーの重ね掛けはさすがに駄m」

キリア「細切れになりな！ 『連s（ネタバレになるので以下略）』

霧唾「我が邪心はっ！ 永遠に不滅なりiiiiiiiiっ！」

第十五話：漸くの終わり。漸くの始まり。（前書き）

風邪なのに頑張って書いた十五話です。

肩透かしで駆け足な気がしなくもなかったり。

まあ、これで漸くキリアと暗殺者の戦いは一応の終了を迎えます。
次回は記念すべき急展開の回。今からワクワクが止まりません（笑）

あれ、でもその前にクロスオーバー小説書かないといけないんだ
った（殴殺）

第十五話：漸くの終わり。漸くの始まり。

あれからどれだけの時間が経過したんでしょう？ 一時間？ 十分？ 一分？ どれだろうと考えてみても、私の意識はそんな事もわからない程に混乱していきうら考えてもそんな事はわからない。延々と繰り返される悪夢が、そんな事を考えさせる余裕をなくす。それでも目前の悪夢から逃れたくて目覚めたくて、意味もなくどうでも良い事を考える。

昨日は何を食べたんだろう？ 明日の朝ご飯は何だろう？ 今何時だろう？ そう自問自答して考えて、それでもやっぱり答えは出なくて悪夢（現実）に再び囚われる。その事に半ば諦めを感じて先程から悲鳴が鳴り止まない場所へ視線を送る。

視界に映る忌まわしい『アイツ』が殺しては嗤って、愛しき皆が殺されては嗤われる。そんな幻覚がずっと繰り返されてる。現実逃避しても可笑しくはないでしょう。そう考えながら、先程から繰り返される悪夢をどうする事も出来ずにただ見るだけしか出来ない私自身に腹が立っている事を認識して、こんな最悪の過去（悪夢）を何度も何度も私に見せる悪魔をどうしようもない程に憎く感じていると自覚して、それでもやっぱりどうする事も出来ない私自身に腹が立っていると再認識。

極光が煌めいては大切な友人が死んで、大好きな家族が殺される。そんな幻覚を見ながら涙すら出ない冷酷な私に気付き、心底嫌気がさした。でも、それで良いのかもしれない。私には涙なんて必要ないのかもしれない。あの日、あの時、『アイツ』が私の全てを奪ってから、私は復讐（目標）を完遂するためだけに生きる冷酷な人間になると決めたから。

そう思っても、やっぱり幻覚と言えど大切に大事な人達が殺される姿を何度も何度も見るのは辛いものがあった、つい何度も悲鳴をあげてしまう。もうやめてください。誰も殺さないでください。こ

んな幻覚見せないでください。と、喉が張り裂けんばかりの勢いで叫ぶ。

ですが勿論、悪魔は勿論の事『アイツ』も私の声なんて無関心にスルーして、忌まわしきあの目を何度も私に見せ付ける。こんな過去はもう見たくはない。そう思うもやっぱりどうする事も出来ない。憎い、無力な私が。妬ましい、強者である悪魔が。殺したい、私から全てを奪った虐殺者を。繰り返される悪夢を見ていると、どんどんとそんな気持ちが強くなっていく。

殺したい程に憎い。無力な私を。

奪いたい程に妬ましい。強者である悪魔を。

そして

生かしたい程に殺したい。憎き虐殺者を

ああ、やっぱり『アイツ』は生かさなきゃ。ただ殺すだけなんて、『アイツ』には生温い。

そう思って、まやかしの虐殺者を視界にいれる。

「待っていてくださいね。」
「。必ず私は、貴方を生かす(コロス)。どうかそれまで、死なないでくださいよ……」

何故だかとてもなく気分が良くなった。先程まで感じていた憎しみも嫉妬も無力感も、全てどうでも良く感じる。そうだ、感情なんていらなかった。私はただ、『アイツ』を生かす(コロス)ためだけに生きる殺人鬼。

『なあ、そろそろやめた方が良いんじゃないのか？』

不様に地べたに這い蹲って惨めに呻き声をあげているお馬鹿な糞
餓鬼を眺めていると、いつの間にか僕の後頭部に張り付いていた悪
趣味な仮面から声がかかる。

『ん？ ああ、『竜魂装着』の事かい？ それとも『裏表の相違』
？』

何をやめた方が良いのか一瞬考えてから、思い付いた事柄を言う。
『竜魂装着』は反動が洒落にならなさ過ぎるし、『裏表の相違』は
精神的なリスクが大きい。だから確かに、そろそろやめた方が良
いのかもしれない。

そう考えながら不様な糞餓鬼を眺める。可哀相だなと同情心が浮
上するが、それは自己暗示のせいで浮かんだ偽りの感情であって僕
の本心ではない。だから助けもやめもしない。

『その両方もだがよお。あの嬢ちゃんに見せてる幻覚もだぜえ。あ
んまり嫌な過去を見せ付け過ぎると、狂気とか関係なく狂っちゃう
ぜえ？ まあそれもそれで、良いんだけどなあっ！ ぎゃっはっは
っはっはあっ！』

家畜のように惨めに呻き声をあげる糞餓鬼の姿は見ていて愉快。
こんなに楽しい見世物はない。得体の知れない愉悦を感じて無意識
ににたあっと吊り上がっている口端に気付き、やっぱり悪魔みたい
に嗤ってる方が誰よりも素敵で不敵に狂气的な僕らしいと再認識。
そうして嗜虐的に嗤う口を直そうともしないまま、考える。

嫌な過去を見せ付け過ぎる。っと言うのは、僕が先程あの糞餓鬼

に言った戯言のせいで勝手に見始めた幻覚の事だろう。

まずは精神的な傷痕をガスバーナーで燃やした後に抉って、それから塩を塗り付けてやる。みたいな勢いで『そういえば君、思い出したくない過去ってあるかな？ ああ、あるんだね。あるんでしょ。うん。それじゃあその過去がどんなものか僕に教えてよ。間違えて教えないように何回も鮮明に思い出して、その時に感じた感覚を何度も感じてからね』なんて言ったら、案の定あの糞餓鬼は勝手に幻覚を見始めて今現在は地べたに這い蹲って呻いている。

時折悲哀が満ちた心からの叫びみたいなものが聞こえてくるけど、この際無視しておく。僕の偽りの部分が同情心に駆られてあの糞餓鬼を抱き締めて慰めてあげたそうにしているけど、それも無視だ。

『うーん……。僕としては糞餓鬼が反抗する気力もなくなる程絶望させてから、今まで殺してきた奴等に輪姦される悪夢をあいつに見せたいんだけどさあ』

まあでも確かに、あまり嫌な過去の事を穿り返すとあいつが狂う可能性もあるし、そうなってしまうえば折角ここまでやった錯乱が無意味になる。

狂人の狂気（自意識）は大体が行き過ぎた程に頑固なもので、狂人を前にして精神に作用を及ぼすものは大体が無意味になる。

狂気というものはそれ程に強力な自意識であり、感情だ。僕が過去に抱いた狂気足る恐怖も結局は未だ完全に消す事は出来ない訳だし、過去に『闘争の果て』を追い続け、求め続けた狂人 『血濡れの餓狼』を同じやり方で錯乱しようとしたが、何の効果も出なかったし……。

『うん。それじゃあそろそろ悪夢は止めにして、さっさと殺す事にしよう』

改めて考えると、このまま続けて糞餓鬼が狂ってしまうのは避けたい。そう思っただけで声を出すと、悪趣味な仮面は不満気にちえつと舌を打った後に口を動かす。

『あーあーそうかい。俺様としてはこのままあの嬢ちゃんを精神的にぶっ壊して、肉体的に凌辱してからぶっ殺す方が良かったんだけどよおっ！ まあ、良いぜえ。大っ嫌いな御主人様が決めやがった事だからなあっ！ ぎゃひっ、ぎゃあっはっはっはっはっはっはっ！』

そうと決めたら即座に実行。する前に、気色悪い嗤い声をBGMに自己暗示で付加された僕らしくない思考を削ぎ落とし、いつもの僕に戻る。

もう殺すだけだから、『裏表の相違』は発動してもあんまり意味がないし、殺すだけなら『竜魂装着』で十二分に事足りる。

そう考えて、目を閉じる。深呼吸を何度かした後に、心の中で強く描く。

いつもの僕を。優しくない僕を。悪魔らしい僕を。狂った僕を。

数秒間そうしているといつも僕が鮮明に脳裏に描かれ、僕は目を開ける。

『『裏表の相違』 解除』

ふう……つと一息付く。『裏表の相違』は解除に失敗したら、自己暗示で僕自身に張り付けたいつもとは違う僕がそのまま僕の本心に成り代わる可能性がある。

リミットオーバー（限界突破）の時は過去（元）の狂った僕に戻るって感じだし、今もまだ狂っているからこそ解除に失敗してもそれ程変わりはなく、精々いつもよりさらに鬼畜で狂った人格になるだけだけど、『裏表の相違』は僕とは違う他人を僕にプラスする訳だからね。

そんな事を考えて、再びあの糞餓鬼を見る。

「本当に、不様で惨めで哀れだねえ。まあ、同情はしないよ。僕に盾突いたんだから、これぐらいの報復は当然の事」

ぶつぶつと何かを呟いている糞餓鬼に声をかける。

現在進行系で夢の国旅行中だから聞こえてはいないだろうけどね。

『俺様的には、もっとぐちゃぐちゃに潰して壊して凌辱してからぶつ殺して欲しかったんだけどなあっ！ あひゃっ』

「僕的にもそうしたかったんだけど、まあ仕方ないだろう？ 『竜魂装着』の反動は出来るだけ軽くしたいし、あの糞餓鬼が狂ってしまつのも避けたいからね」

そう軽口を叩きながら、糞餓鬼に歩み寄る。

一歩一歩と近づく事に口端が徐々に吊り上がり、瞳が嗜虐的に煌めくのが自分でわかる。

本当はもつと虐めて弄んで凌辱してから殺したかったけど、それでもあの生意気な糞餓鬼を殺せるとなると嬉しくなるのも仕方ない。依頼主が誰だとか聞きたい事はあったけど、まあこの際仕方ないだろう。そう自分に言い聞かせて足を止める。気付けば足元に糞餓鬼がいたからだ。つと言つても、近付いたのは僕なただけ。

「の者。私は、を」

未だぶつぶつと何やら言ってる糞餓鬼の姿を数秒間じーっと眺めた後、トキシックファンクを振り上げる。

体中を駆け巡る嗜虐的な興奮を感じながら、口を開く。特に意味はないけど、お約束って奴だろう？

「愚かなその身に死の十字を……。『死爪十字』」

S i d e o u t

月の光が差し込む室内に佇む水晶。それに映っていた妖しい輝きを放つ紫紺のドームが崩れる。その中から現れた紫紺色を持つ蛇の形をした何か、そしてそれに乗っている白髪紫紺眼の少女。

水晶を囲むように陣取る四人の男女はその映像をじーっと見ている。

困惑、疑問、将又興味心、若しくは嫌悪、或いは恐怖^{ある}。誰もが様々な色を顔に出して、考えていた。

悪魔は一体何をした？ 悪魔は次に何をする？ 悪魔は一体何者だ？ この部屋にいる誰もがそう考えるがしかし、悪魔の事など何も知らないこの四人にはそんな事わかるはずもなく。結局は考えても正しい答えは出ない。

その事実に焦る者。怒る者。興味を抱く者。そして、決意をより一層頑固なものにする者。

様々な反応をするこの四人は何も知らない。知らないが故に愚かな役者として踊る。狂気が蔓延る舞台上で。

漸くだ。これで計画が動き出す

遠いどこかで、そんな声が響いた。

さあ、踊れ愚者達。私の手の平で、惨めに踊り抜いて見せる
定められた物語は悲劇か喜劇か。そんな事はわからない。
当然だろう？

これは、始まりの序曲だ！

物語は今漸く始まったのだから。

第十六話：打たれた杭。始まる計画。（前書き）

感想、批評、どしどし募集中ですよーっと。

今回は眠けと戦いながらの投稿。明日にすれば良いのとは言わないでね w。

だって、待つてくださる読者様達がいるんですもの！

……うわっ、眠さで変なキャラになっちゃってるよ。私。

クロスオーバーの件は、実は現在進行形で執筆中。遅くなって申し訳ないです。

だってね。だってさ。全員（キリア、ラジル、紅葉）と戦わせようとしたら長くなっちゃうんだもん！遅くなくても、仕方n。うわっ、何する龍夜、やめっ、アーアーッ！

っとまあ、そんなこんなで十六話です。お楽しみいただければ幸いです……。

感想をいただければさらに幸い（笑）

第十六話：打たれた杭。始まる計画。

灰色の世界と、そこに独りぼつんと疼くまる少女。何だこれとは疑問を抱いた直後に、漆黒の髪の間から見えた疑心暗鬼に染まった少女の眼を見て、すぐに理解した。

これは……夢なのだ

十年とちよつと前の独りぼつちだと思いついていた私、そしてその私から見た無機質な世界。その構図を客観的に見ているのだ。夢でない訳がない。

色々懐かしかったりする姿の少女を見て、思い出す。

あの頃は漫画（作り物）の世界に一人だけ存在する唯一の生者で、周りの風景も人物も私以外の何もかも誰もかもが作り物の虚像だと思っていて、夢が終われば簡単に壊れそうな作り物達をどうしようもなく不気味に感じていて、差し延べられた手を弾き続けていたんだっただか。

作り物の世界に蔓延る作り物達。その中にぼつんと独り佇む私。寂しくなかつたと言えは嘘になるが、まあそれでも不気味な作り物達の輪に入るよりかはマシだと私（生者）なりに意地を張って、周りからの誘いなんて断り続けていつつも独りで空を眺めていた。

綺麗で、雄々しくて、強大な、いつも光に満ちていた太陽。その背景である広大な青空。それらを見ていつも勝手に勇気付けられて、その反面この素晴らしい景色すらも作り物だと落ち込んで……滑稽だな。今思えば。

この世界は確かに作り物かも知れない。人も、建物も、海も、大地も、空も、太陽すらも。

それでも、確かに人々は精一杯に生きて、頑張っている。

そんな事にすら気付かず独りでノイローゼになっていたのだ。滑

稽としか言いようがないだろう？

ああそういえば、そんな滑稽な私にそんな事を教えてくれたあの娘は、あの時何と言っていたのだったか……。

ああ、そうだ

「ん、もう朝か」

カーテンの隙間から見える景色はまだ朝と言える程に明るくはなく、暗い。

懐かしい夢を見たから早起きした。とかではなく、最近はこちらが私の基本的な起床時間だからなのだ。いやはや、凄いものだ。アラームもなしに予定通り起きれるとは……さすが私！

「ふっふっふ、今日の私は機嫌が良いのだ！　そして調子も凄く良いのだ！　これなら今日こそ、あれが出来るかも知れぬ……っ！」

懐かしい夢を見て、あの娘の優しい言葉を思い出したからなのか、頗る機嫌すいぶんが良いのだ。良過ぎるのだ！

『金色の精霊王』との一戦以来、あ奴を倒すため……そして木乃香を守るために得ようとしている新たな力。今はまだ未完成で発動すら出来ないのだが、今日は発動どころか維持も出来そう　否、出来るのだ！　ならば今すぐにも、始めなければ！

「よしっ、思い立ったら即実行！　今すぐ修業開始なのだ！」

まあ、と言っても女子寮の一室であれをやってしまったら成功か否かなど関係なく危ない事になってしまうので、まずは朝飯を食べ、歯磨き、着替え、準備……等々をしてから、爺上にお強請り^{ねだ}して頂戴した麻帆良の一角　私の修業場に移動しなければいけないのだ。

「ふっふっふ……っ！　だが私に調理スキルなどと言うものはない……。故にっ、私は朝飯を抜くのだ！」

なあに、今日の私はいつもにも増して調子が良いのだ！　朝飯の一つや二つ抜いたって、何等問題はない！

それに、今ご飯を食べてしまったら、木乃香の手料理が食べれなくなってしまうからな！

「ん？　何なのだ。この有様は」

あれから寝間着から巫女装束に着替たり、認識障害の呪符や戦闘用の呪符諸々を準備したりした後、部屋を出て、ランニング代わりに猛ダッシュして現在の場所は女子寮の一室から変わって森の中

否、森だった場所と表現した方が良いのか。

だった。と言うのは、昨日まで使っていたはずの私の修業場である森が、何がどうなっただろうなつたのか木々や地面が腐敗したり、薙ぎ倒されたり、メスが刺さったり落ちてたり等々……。昨日とは打って変わってまるでつい先程まで殺し合いがあった地獄の一角のように毒々しく、血生臭い場所になっていたからなのだ。

よく見れば地面の所々が血で染まっているし、そこら中に落ちて
いるメスにも血が着いているものがちらほら。

疑問の声が出てしまうのも仕方あるまい。

「……むう」

脳裏を駆ける疑問を解消するべく、何でこんな有様になったのかを
考えてみる。

昨夜ここで外部からの侵入者と麻帆良に所属する魔法先生、若しくは魔法生徒の戦闘があったとか？ ……いやいや、そうならば一般人にこの場所を見られ、疑問を抱かれぬように後処理がされるはずなのだ。

故に、外部と内部の間で起こった戦闘の結果とは考え難い。

ならば外部と外部の戦闘か？ 敵対する組織、若しくは個人同士が偶然麻帆良の地で遭遇。そこから戦闘に発展とかは……。いや、これもしつくり来ない。確かにこの考えでも一応の納得は出来るが、それでも不自然な点が多いし。

「……うがーっ！」

しばらくそんなこんなで自問自答して考えてはみたものの、これだ！ っと納得出来るものはない。

その事に苛立ちつい叫ぶのは仕方ない事なのだ。

大体、ここをどこだと思っっているのだ！ 主人公足る私の修業場

なのだぞ！？　そこで勝手に戦って、後処理もしないとは……っ！
「ええいつ、どこの馬鹿者かは知らぬが、何様のつもりなのだあああああああっ！」

こんな場所ではおちおち修業も出来ないではないか！

……まあ、良い。今の私は気分が良いからな。これぐらいの事許容してやるのだっ！

ふははははっ、感謝するのだぞ。誰とも知らぬ馬鹿者めっ！

「っと、修業しにきたはずがこれでは集中出来ないのだ。ふむ、どうしようか……」

優しく広大な心で誰かは知らない馬鹿者が働いた無礼を許していると、ふと本題を思い出す。

どうすれば良いのだろうか。こんな毒々しい空間で修業に集中出来る程私は野蛮な心の持ち主ではないのだ。

……ん、いやいや、主人公足るものこんな場所でも修業出来なければいけない……のか？

……きつとそうなのだ。こんな場所でもどんな場所でも、主人公足るもの平常でなければいけないのだ！

ならば、主人公足る私がする行動は

「　只一つ！　いつも通りに修業なのだっ！　今日こそは成功させてみせよう。『符術、千羽鶴　』」

袖に仕込んだ大量の呪符を腕を振るう事で周囲に散時まじはき、必要な分だけ気を送る。

「『　集束、朱雀！　』」

私の声と共に火炎の鶴となった大量の呪符を集束、紅蓮の大鳥へと変化。そしてそれを背後に待機させて次のステップに進む。

「相剋球 』」

いつもとは違って両腕を頭上に掲げ、右手の平に膨大な量の気を集中、圧縮させる。

左手の平には何故か全くと言ってても可笑しくない程扱えない魔力を送る が、魔力の操作が上手くいかずに現在進行形で垂れ流す事になってしまう。

それを阻止するべく左手の周りを気で囲い、それを突き破って溢れ出ようとする膨大な魔力を閉じ込める。

魔力をその対にある力である気で無理矢理左手に圧縮する訳だから、左手への負荷は相当なもの。だが、だからと言ってやめる訳にはいかないのだ。今やめたら、主人公らしくはなれぬ！

「『 鬼神殺し！ 』」

左手に無理矢理集束された魔力と、右手に圧縮した気を無理矢理混合させる。

混合と言っても右手と左手にある魔力と気をさらに大きな気で圧縮するだけだから、混合とは言えないのだろうがな。

まあ、兎に角、これで準備は整った！

ばちばちと音を鳴らしてぶつかり合う気と魔力を無理矢理圧縮したエネルギー玉。それを背後に待機させている火の鳥と混合させる。いや、させようとしていると言った方が正しいのだな。

私が得ようとしている新たな力 それは言葉で表現するのは簡単な事で、私が持つ中でも特に高威力な二つの大技、『符術、朱雀』と『相剋球・鬼神殺し』を混合する事で完成する超高威力な業（力）

反発し合う魔力と気を無理矢理圧縮して出来る『相剋球・鬼神殺し』を”気を用いる術で”作り出した『朱雀』と混合させるのは、正直無謀だと私自身思う。だが、それでも新たな力を得なければ主人公に 木乃香を守る飛びっ切りな主人公には、なれないのだ！

「今日こそは成功してくれなのだ！ 朱雀を相剋球に付加、混合、圧縮！ 『天照の怒り！』」

Side out

空にまだ漆黒の帳が悠然と広がる時間帯 朝四時頃。本来ならまだ主婦すらも起きてないだろう朝と言って良いのかすら疑問なその時間に、闇の中に紛れて動く 影がいた。

こんな時間に野外にいた反社会的な非行少年や少女。それらを片っ端に誰にも悟られず気付かれず、瞬く間に気絶させては引き摺りどこかへ運ぶ。

それを何度か繰り返してその数が二桁に調度届いた時、影は動きを止めて自らが引き摺り運び、麻帆良の象徴とも言える世界樹に張り付けにされた”生贄”^{いけにえ}達を眺める。

ぼーっと、何も考えていないのかと疑問に思う程に呆けた瞳で数秒見詰め、影は突如口を開く。

「……悪く思わないで下さいね。私がこんな事するのは……『アイツ』のせいですから。怨むんだったら」

違和感に気付いたからなのか影の言葉を聞いたからなのか、”生贄”の一人が唸り声をあげながら目を開ける。

「 なっ、なんだよこれ！ どうなってるんだよ！ おっ、おいっ！ その女っ、早く俺を下ろしやがれっ！」

自分が置かれた状況が理解出来ずにそう叫ぶ”生贄”。だが、理解は出来ずとも自らに迫る危機を本能的に察知出来たのだろう。眼下に映る影にそう声をかける。

しかし、影にはそんな言葉聞こえていないのかただぼーっと、空虚的な眼で”生贄”を眺めるだけ。

その事に苛立ちを感じたのか、先程よりも大きな声で怒声をあげる”生贄”。

だが

「おいっ、聞いてんのかその女あつ！ 早く俺を下ろせて言っ
てんだ」

”生贄”の怒声は最後まで続かずに、自らの胸を貫いた杭に中断された。

「 は？ くっ、杭が！ 杭が俺のっ、俺の胸を……うっ、うわ
ああああ嗚呼アアアアアア嗚あああ呼ア
っ！」

麻帆良の空に響く獣染みた咆哮。決壊したダムから流れる濁流の
ように吹き出る鮮血。

それを先程から変わらない無機質な瞳で眺めていた影が、再び口
を動かす。

「怨むんだつたら……『アイツ』を怨んでください」

空虚なその声に隠された狂気^モは　憎しみ。

「……漸く、漸く始まります！ 私達の計画がつ、私の復讐劇が！
何時間待った？ 何日待った？ 何年待った？！？ 覚えてる？
覚えてますっ！ 十七年五月十四日と十二時間！ あの日、あの
時、大切な友達が殺されて大事な家族が殺されて私が殺されて！
皆々不様に何の抵抗も出来ずに殺され尽くされて！ その日からそ
の時からっ、私はこの復讐劇のためだけに……力を得たっ！」

言葉とともに腕を振るう。それと同時に放たれた九つの杭が未だ
息をしている”生贄”達の胸を貫く。

「簡単に殺せる！ 簡単に誰だつて殺せた！ ですが……」

吹き出る血を浴びて、それでも尚憎しみに染まった言葉を放ち続
ける影。

その瞳は先程とは打って変わって、ぎらぎらと燃える憎悪を秘め
ている。

「逆ですっ！ 簡単に殺された。殺されそうになった！ 私から全
てを奪ったくせに幸せを見付けてっ、掴んだ『アイツ』にも！ キ
リア・ラウクルスにもだ！」

一言一言に秘められた隠しようもない憎悪。狂気とも言える程に
強大で凶悪な刺々しい言葉は誰に向けられたものなのか

「何でだっ！？ 何ですかっ！？ 何が足りないんですか……っ
！」

それはまだ、語るべき事ではない。

「あはっ、あははははっ！　アーツハッハッハッ！　そうですよ。そうでしたね！　私には　憎しみ（狂気）が足りなかった！」

だが一つ言えよう

「ですが私は得た！　狂気を、より強大な憎しみを！」

狂った（壊れた）復讐者から逃れる事は、難しいぞ？

「ありがとうございますキリア・ラウクルス！　こんな素晴らしい狂気を抱かせてくれて！　お陰で今の私は　」

アイツだって殺せる

始まりの杭は　打たれた。

人々の喧騒に溢れる世界樹広場。それはいつもの話だ。
今、世界樹広場に溢れるのは

「……」

重苦しい程の、沈黙。

何十人もの人々が揃ってその沈黙を作り出した異常な光景を眺めている。誰も口を動かさそうとせずに、ただ目前の現実を認めたくない一心に何も考えずにいる。そんな重苦しい沈黙の中に、突如怒声が響く。

「退けえっ！ 退くのじゃ皆の者！」

この異常が発生した麻帆良学園の最高責任者 学園長、近衛近右衛門が発した怒声に、今まで呆然とその場に佇むだけだった人々が道を開ける。

中には怒声に我を取り戻して、目前の異常に対して嫌悪感を抱いたのだらう。その場に疼くまり嘔吐物を撒き散らす者もいる。

まあ、それも仕方ないだらう。この光景は

「何じゃ。これは……っ！」

刺激が強過ぎた。

「何故……っ、こんなに簡単につ、こんなにも理不尽に人を殺せるんじゃ……っ！」

太陽を背景に佇む血に濡れた世界樹。それに張り付けにされた十人の少年少女。

不様にも貫かれた胸から今も尚滴る血で書かれたのか、少年少女

の頭上にくつきりと存在する深紅のメツセージ。

Gifts from the devil (悪魔からの贈り物)

「……裏に関係のない一般人達を避難させるのじゃ。そして、裏に
関係のある者達に集合を掛ける！」

「あつ、あの、学園長……。一般人の避難はわかりますが、裏に関
係のある者達を集合させて何を……？」

「決まっているじゃろうて。儂等は……麻帆良のために、麻帆良に
住む人々のために」

悪魔を討たねばならんのじゃ

第一交差その1：歪んだ神童と狂った死神。（前書き）

ついに、初のクロスオーバーものを投稿。

クロスオーバーの相手はご存知マンガープリンさん作の『原作ブレイク？そんなの関係ねえ』シリーズ主人公、『藤山龍夜』君（ちゃん？）です。

うーむ、ちゃんと龍夜を書けてるか不安……。

あつ、ちなみに、龍夜君にはクロスオーバーの企画が出た時に既に主役格だったキャラクター（キリア。ラジル。紅葉）全員と戦ってもらうので長いです。

そんな訳で三部に別けての投稿。その二も今週中には投稿する予定です。

……始めに言って起きますけど、その一はその二その三の展開を不自然じゃなくするための布石っぽいものなので、龍夜君はそんなに活躍しなかったり。

マンガーさん。ごめんなさい……。

その二その三は龍夜っぽく狂わせるので、その一は大目に見てね
っ（殴

その一に関する注意

- ・ 12月1日投稿。
- ・ 本編のネタバレあり。
- ・ 本編の最新話で起きている事件が起こってから二ヶ月後の設定。
- ・ 本編でまだ出てない紅葉の狂気が出ます。狂気を抱いた経緯をまだ本編で出してないので疑問を抱くかもしれません。
- ・ 何故か龍夜よりも原作キャラが目立つ不測な事態が発生。

上記の事が無理な方はブラウザバックを推奨します。

許容出来る方は、どうぞご覧下さい。

……あっ、感想お待ちしております

キリア「愚かなその身に死の十字を……。『死爪十字』」

ばたり。

第一交差その1：歪んだ神童と狂った死神。

肌寒くなった風を浴びながら、夕暮れに染まった通学路を歩く。その隣には二ヶ月前と変わらない様子のあの娘が……。

「わあ。見てみ、お姉様！　綺麗な紅葉もみじやなあ」

そう、二ヶ月前と変わらない何の邪心も打算も感じない純粹な笑みで、守れなかった（・・・）私に声をかけてくる。

恐らくこの娘は何も覚えていない。あの時は気絶していたし、だからこそ変わらない笑顔でいられるのだろう。その様子を見て、自責の念や後悔がより一層膨らんで……気が滅入る。

「っ」

二ヶ月前からずっと脳裏にこびりついて離れない光景。後悔を感じる度に、鮮明に思い浮かぶ失態。

爺上もタカミチもどの魔法先生も魔法生徒も、そしてあの『金色の精霊王』や『闇の福音』でさえも手玉に取り、関東魔法協会本部であるここ麻帆良学園は勿論の事関西呪術協会にさえも激震を与えた由々しき事態。関東魔法協会の長と関西呪術協会長を肉親に持つ裏の重要人物　そう、木乃香が何者かに襲われた。

他にも色々と問題はあるが、私にしてみればそんな事は最終的にどうでも良い。最終的には木乃香が全てなのだ。故に、今私の脳内を埋め尽くす事は木乃香が襲われて　私が木乃香を守れなかった事。

元より私はそのためにだけに力を手に入れ、木乃香を守れる程の主人公になろうとしていたと言うのに、何の抵抗も反撃も出来ずに私は唯ナニかをされている木乃香を眺めながら、一方的にいたづら

ただけだった。

唯、その事が只管悔しくて悔しくて、あれだけ強く守りたいと思っ
ていたくせに力が足りずに守れなかった自分自身が憎かった。

自責の念や後悔、無力感や怒り、その他にも様々な負の感情が私
を責め立てる。

本当に 何が主人公なのだ。

「 ちょっと、お姉様！ ウチの話ちゃんと聞いてる？」

まあそんな感じで四苦八苦していると、襲われた当の本人である
木乃香が私を怒鳴り付けてきたのだ。

そちらに目を向ければ、頬を膨らませて拗ねている木乃香が視界
に入る。恐らく、思考に気を取られて無視してしまっていたのだろ
う。

むう、私とした事が木乃香を無視して、機嫌を悪くさせてしまっ
とは……。やはり、私は主人公失格なのかもしれないのだ。

そうやって内心ノイローゼになりながらも、主人公足る者弱さを
見せてはいけなさと出来る限りの全力で笑顔を浮かべながら、木乃
香に謝罪する。

「 ああ、すまんだ。少し考え事しておつてな」

ちゃんといつもの主人公（私）らしく笑っているか疑問に思いな
がら、そう口に出す。

決して、私が弱みを出す訳にはいかない。私は、木乃香を守る主
人公でなければいけないのだ。

弱みを見せて心配をかけるような主人公などに、私はなりたくな
い。

そんな事を考えていると、膨らんだ頬をそのままに木乃香が口を
開く。

「もー、今度から気い付けてなー。あつ、それでさっきの話なんやけど、キリヤん凄かったなー。ドッジボールでボール投げたら、ぎゅおおおん！ って音が鳴って次の瞬間にはボールが地面に減り込んでたんやもん！」

どうやら気付かれずに済んだようなのだ。そう安心して気が抜けそうになるが、すんでの所で気を引き締め直す。

今まで一緒に過ごした時は無駄ではないのか、この娘は私の事をよくわかつている。

少なくとも、父上や爺上よりかは。

だからなのか、言葉にせずともこの娘は私の胸中を察する事もある。つまりはまだ気を抜いてはいけない。

そう思つて、先程と同様に出来る限りの全力で笑顔を浮かべながら口を開く。

「ほう……、それは確かに凄いのだ。何かトリックでもあつたのか？」

「やるやる！ でもな。キリヤんは思いっきり投げただけ言つとるんや！ もう皆顔が引き攣つて、キリヤんはそれからコートに入ってもらえんかつたんやでー」

「……まあ、それが当然だろう。そんな何ちやつて人間とドッジボールなどしてたら命がいくつ有つても足りないのだ」

「……なあ、お姉様……。やっぱり何か、あつたん？」

「っ」

二ヶ月前とは違う。そんな考えが脳裏を駆ける。

今思えば、その違いにこの娘が気付かないはずがないだろう。

現に、この質問だって何度も受けた。……最近はなかったから忘れてしまっていた。いや、思い出さたくない故に思い出さなかった。つと言えば良いだろう。

当たり前だ。私はこの質問を受ける度に

「……いや、何もないのだ」

私に生きる意味を与えてくれた何よりも大好きで大切な娘に嘘を付かなければいけないのだから。

「……そっかあ。それなら良かったわ。ただの思い過ごしで……」

この娘はきつと気付いている。私が嘘を付いていると。

それでも、いつか本当の事を話すと信じてくれているのだろう。

無駄に双子の姉をしてきた訳ではない。この娘の考えてる事や思っている事。そんな事は言葉にせずともわかる。

だから、今だって……嘘を付かれて悲しくて淋しくて仕方ない癖に、私に心配をかけまいとそれを隠して笑顔を向けている。私を信じて……。

そうだとわかってしまう。わかってしまうからこそ

「　　」

余計に、辛い。

きつと私は泣きそうな顔をしているのだろう。泣きそうな顔をしているこの娘の潤んだ瞳に、泣きそうな顔をした私が映った。

気まずい空気に堪えられず、風に吹かれる紅葉もみじに視線を向ける。

視界に入ったどこか儂い印象を持つ紅葉を、ぼやけた視界で眺め

る。

「気まずい沈黙は変わらない。そう思っていた。だが

「っ！」

それは突如現れた暴力的な気配により反転、喧騒へと変わった。

「木乃香！ 私の後ろでじっとしているのだ！」

「えっ？ どないしたん？」

「良いからっ、大人しくしろなのだ！」

状況がわからず困惑する木乃香の前に立ち、そう怒鳴る。突如現れた　　っと言う事は、恐らく転移魔法でもしたのだろう。麻帆良学園を覆う強力な結界を越えて、だ。

感じた気配は余りにも強大。恐らくは人の身ではないだろう。そして尚且つ結界を潜り抜けてここに転移する程の知識や経験、魔力、技術の高さ。これはかなり……厄介なものと出会でくわってしまったかもしれないのだ。

全く、面倒な。

「ふう………」

先程までの苦悶を吐き出すように、溜息を吐く。そうして潤んだ瞳を腕で拭い、気配を感じた方向へと視線を向ける。

「何の目的があつてここに侵入し、私達の前に姿を現したのかはきかないのだ。そんな事はどうでも良いからな……。だが」

夕暮れを背に、長く伸びた綺麗な銀髪を風に靡なびかせる暴力的な気配の持ち主を精一杯の敵意を籠めて睨む。

「貴様は侵入者として木乃香の前に姿を現したのだ。要するに危険因子……。故に私は目的等度外視して、木乃香に危機を齎すかもしれない貴様を撃つのだ」

何よりも大事で誰よりも大切に、世界中で一番大好きな木乃香。そんな娘に危機を齎す”かも”しれない。木乃香を守るためだけに主人公へとなろうとした私が戦うには、それだけで十分 否、十二分なのだ。

「おっ、まさか転移早々の宣戦布告？ ややなあ。ただちよつと調査しに来ただけやのに」

「ほざけ！ 貴様の言い分等知らないのだ！」

もうあの時と同じ失態はしない。今度こそ 木乃香に危機を齎す危険因子なんて排除して、木乃香を守る！

「始めっから全力で行くのだ！ 『相剋鎧・鬼紀王』」
ソウコクガイ・キキオウ

S i d e o u t

夕暮れに染まる、普段は下校中の生徒が歩む紅葉の絨毯が敷かれ

たアスファルトの大地。珍しい事に下校中の一般生徒は近衛木乃香一人だけ　そう、”一般”生徒は、だ。

「いやあ、困った困った。調査しに来ただけやのに何でこないなちつこい嬢ちゃんと殺り合わなにかんのや」

「　はっ！　喋る暇があるのなら、反撃してみてはどうなのだった！？　調査と言うのも、どのみち私を倒さねば出来ないのだからなあ！」

神秘の隠蔽すら忘れて二ヶ月前と同じ失態を繰り返さぬよう、始めから切り札の一つ　『相剋鎧・鬼紀王』を駆使し残像すら見える速度で攻め立てる近衛紅葉。一般とは掛け離れたファンタジーの世界に身を置く、ここ麻帆良学園の生徒。そして近衛木乃香の実の姉だ。

勿論実際にファンタジーな世界があるとは知らずに、あくまでも一般人として生きてきた近衛木乃香が姉の否日常的な姿や行動を見れば呆然とするのは当然の事で

「お姉、様……？」

茫然自失とした表情で啞然とした声を出す事しか、彼女には出来なかった。

「え？　反撃してええの？　や、元からそうする積もりやったんやけどなあ。ほら、チート転生者つてのと一回戦たたこうてみたかったし」

まあそんな少女の事なんて今現在進行系で戦っている彼女達には気にならない　近衛紅葉は気にはなっているようだが、気にする余裕はないみたいである　のか、構わず闘争を続けている。っと

言っても今は近衛紅葉の一方的な攻撃を謎の人物が避けているだけ
乃、闘争と呼べるか定かではないものだが。

「ああ、やけど」

余裕があるのだろう。何の苦もない表情で喋り続ける謎の人物。
その人物が放った発言に気になる所でもあったのか、将又このまま
では撃てないとも思ったのか、近衛紅葉の攻撃の勢いが僅かに緩
む。

その様子を見て一瞬だけ愉快そうに口元を歪ませた後、すぐに心
底詰まらなさそうな表情を浮かべて口を開く謎の人物。

「そないな状態の娘とは戦うたたたくないな」

「っ」

凶星を指されたのか明らかな動揺を顔に浮かべ、攻撃の手を止め
る。だがしかし、すぐ様獣の咆哮のように勇ましい怒声をあげて攻
撃を再開。

その猛攻には、自分の状態など関係ないと言わんばかりの勢いが
あった。

「戦いたくない？ ならば尻尾を巻いて逃げ帰るか、不様にただ殴
られるのだっ！」

が、それでも身体の動きはぎこちない。普段の流れる水のように
しなやかで、踊るように軽快な攻撃ダンスは見る陰もない。

まるで傷付いた獣のように荒く、凶暴で、直線的な攻撃。まあ、
それも仕方ないだろう。彼女は日課となった修業により毎日己の身
を酷使し、それでいて精神状態も普段 二ヶ月前とは違い、余裕

がない。

そんな状態で『相剋鎧・鬼紀王』 彼女の切り札の一つであり、『相剋球・鬼神殺し』を上回る強大な反動を使用者に与える脆刃の剣を使用している。要は、元から肉体的にも精神的にもボロボロなくせて更に自分を痛め付けているんだ。本来なら既に倒れても不思議ではない。

「あー、それは嫌やなあ。……やけど、折角のチート転生者やしな」

だがそれでも、彼女は攻撃の手を止めない。

今も尚自らに降り懸かる反動に堪えながら、どこか狂気さえ垣間見える余裕のない瞳で自らの妹に危険を与える”かも”しれない人物を睨め付けて吠える。

「ぐっ、う……っ！ うだうだ言っていないで全力で来い！ 私は二ヶ月と約一週間前から、貴様のように全力を出さずにただ避ける事しかない奴が大っ嫌いになったのだ！ 反撃する気も退散する気もないなら、大人しく殴られる！」

そう言つて怒声と同時に、一旦縮地を用いて近衛木乃香の目前に戻り、懐から大量の呪符を取り出し当たり一帯に撒き散らす。

「それが嫌なら、全力で防いでみるのだ！ 見る。これが相剋の新たな形！ 完成した私の暴力！ 『符術』」

「おっ、お姉様……？」

突如目前に現れた姉に、またしても近衛木乃香が困惑した声を出す。そのどこか不安気な声を聞いてか、一度ちらっとそちらに目を向

けて、実の妹を見詰める近衛紅葉。

視線の交差。それが成立している時間は視線を謎の人物に戻した事により一秒も経たずに終わったが、それだけで近衛木乃香にはわかったのだろう。

今度こそ、今度こそ私は木乃香を守る

異常なまでの保護欲。それこそ自分の命に代えても指一本触れさせはしない。そんなレベルの、だ。

現に彼女はボロボロだ。肉体的にも精神的にも、それでも尚守ろうと脆刃を使おうとしている。

先程までは目の前の否日常に気を取られて忘れていたが、近衛木乃香から見た姉は精神的にボロボロだった。そして、今目前に立つ姉の後ろ姿は既に満身創痍。

それをわかってしまった。だからこそ、困惑など押し隠して近衛木乃香は全力を以って叫んだ。彼女にとって近衛紅葉はヒーローだ。いつだったからかは忘れたが傲慢になったり、意味のわからない事を言い出すようになっていたが、それでも、だ。

辛い時は隣に立って肩を抱き締めてくれた。苦しい時は真っ正面から抱き締めて、愚痴を延々と聴き続けてくれて、最後には慰めてくれた。嫌な事があつたら助けてくれた。どんな時だって、ウチを近衛木乃香として見てくれた。

近衛木乃香はそう思い返し、そうして再認識した。

お姉様はウチのヒーローで、一番大切な人

だからこそ、近衛木乃香は叫んだ。

「お姉様！ 何が何だかわからへんけど、もう無茶はやめてえな！ そら隠し事されるのは悲しいし、一人だけ蚊帳かやの外なのは淋しいけど……。それでもっ、大好きなお姉様のボロボロな姿見んのは、もっとなんや！」

悲痛な叫び声。聞いた人全てに涙を流させる程に物悲しく、痛々

しい。見れば近衛木乃香の頬を涙が伝っている。

その声を聞いて自らの妹に視線を向け、だが何故か、視線をすぐに戻す。その様子に危機感を煽られたのか、先程にも増して悲痛な声をあげる近衛木乃香。

「お姉様！　お願いやからっ、お願いやから！　もうやめてえなっ！　お姉様はもう十分頑張ったんやえ！　今までずうっと私を助けようって、私を守ろうって頑張ってくれた！　気付かないはずないやん。こんなにつ、あんなに一緒にいたんやから！　やからっ、やからっ……！」

お姉様はもう無茶してまで頑張らんでええ。そう言おうとした近衛木乃香の口は止まる　否、止まった。

他の誰でもない、自らの姉が発している狂気によって。

「頑張った……？　だが、だがっ！　結果はどうだった！？　私は不様にも自らの失態でっ、自らの愚かさで！　守るべき木乃香をあの影だとか言うふざけた奴の手に渡しっ、何の抵抗も出来ずにただナニかをされる木乃香を見る事しか出来なかった！　相手が悪かった？　仕方がなかった？　十分頑張った！？　だからっ、だからだからだかラダカラ！　どうしたと言うのだった！　相手が悪くてもっ、仕方がなかったとしてもっ、十分頑張ったとしてもっ、私は絶対に木乃香を守ると決めたっ！　絶対に守れる程の主人公（絶対）になると決めたっ！　だがどうだ？　私は守れなかった！　私はその事が

どこまでも独りよがりの狂人（愚者）は叫ぶ、独りよがりの保護欲（狂気）を乗せて。

「自分を殺したい程に恨めしく感じたのだっ！　もうあんな失

態は駄目だ。もう守れないなんて駄目だ。もう木乃香が傷付くのは嫌なのだあつ！」

そこまで言い終わり、荒い息遣いのままにさらに口を動かす狂人（愚者）。

「だからっ、だからこそっ！ 私は何が何だろうと誰がどうなるうとっ！ 木乃香に害を齎すのならそれがちっばけな可能性でさえっ

」

壊してやるのだ

深い闇を秘めた瞳が、謎の人物の姿を映した。

「『符術、千羽鶴！ 集束、朱雀！』続いて『相剋球・鬼神殺し！』

現れた朱雀。切られた切り札。それが狂気を以って、この場に具現した。

だが、だ。まだ止まらない。愚者の狂想曲は。

「朱雀を相剋球に付加！ 混合、圧縮！ 『天照の怒り！』」

『相剋球・鬼神殺し』と『相剋鎧・鬼紀王』が切り札ならば『天照の怒り』は隠し札。

威力の高さは勿論彼女自身知っているし、その反動もだ。

ただでさえボロボロなんだ。最悪植物人間になり生きる屍となる可能性もある いや、その可能性の方が圧倒的に高い。

だがだ。まだ止まらない。止まる訳にはいかない。脳裏を駆ける可能性。それを潰すためなら死んでやる。そう言わんばかりの狂気

的な表情で、彼女は最後の言の葉を口に出す。

「そして 加速！」

その言葉を待ち侘びたように、朱雀を纏い小さな太陽となった相剋球が宙に浮かび、肥大。

直径10メートルを軽々と越えた大きさへと変化した いや、よく見れば大きくなったのではない。互いを消そうと反発し合う魔力と気の衝突が加速したのか、先程までと比べる事すら阿呆らしいと思える程に衝突に生じて発生する暴力的な火花が拡大。肥大したように見えたのだ。

それ程までに激しい衝突を利用し、支配下に置く事がどれだけ難しい事か……。

文字通り、血の滲むような修業をこの二ヶ月繰り返したのだろう。

「おおっ、これは凄いなー。そんなもって、そんな身体でようやるわ。死んでも可笑しいっちゅうんに……。呆れたらええのか感心したらええのか、ようわからんわ」

謎の人物もその太陽と見紛う程に強大な力（暴力）を見て、半ば呆気にとられた顔をしている。

その様子を見る近衛紅葉の瞳はどこまでも狂氣的。先程と何も変わりはない愚者（狂人）っぷりだ。だが、その謎の人物が放った言葉を聞いて先程よりも更に、表情を歪ませる少女がいた。

「っ」

そう、近衛木乃香だ。

「お姉様！ やめ」

その少女は、聞いてしまった自分の姉ヒロイが死んでしまっても可笑しくはないと言う事実には、悲痛な顔をより一層悲痛に歪ませる。

大好きな姉が死ぬ。それは絶対に避けたい悪夢。本能でそう再認識して放とうとした制止の声は、哀れにも独りよがりの狂人（愚者）には届かずに中断させられる。

「ふんっ、わからないようなら教えてやろう。貴様はただ侵入者でありながらも木乃香の前に姿を現した過去を、悔やみながら壊れてしまえば良いのだ！」

「っ」

そうして守るべき妹の制止すら振り抜き放たれた神の名を冠する太陽は、轟音をあげながら空に浮遊する謎の人物に直撃し、強大な爆発を起こし、何メートルにも及ぶ高さの火柱を立てた。

後に残ったのは、『天照の怒り』が撒き散らした暴力（炎）の残骸と沈黙。そして

「あつ、ああ……。お、ね、えさま？」

力なく倒れた姉を茫然自失と見詰める、近衛木乃香と

「いやあ、あんなきつつい一撃久しぶりに喰うるた気がするわ。やけど、残念ながら俺を壊すには威力不足やったかな」

衣服が少し燃えただけの変化で、平然と火柱から出てきた謎の人物だけだった。

「お、おねっ　お姉様あああああああっ！」

燃えた事により灰へと変わった紅葉^{もみじ}が、熱風と化した風に吹かれて
儚く空を舞う。

沈黙を引き裂く、悲痛な叫び声が空虚な空に響いた。

第一交差その2：壊れた王と餓える死神。（前書き）

本当は金曜には投稿する予定だったその2。

遅れてごめんなさい。特にマンゴー様（笑）

何千文字も書いた所で違和感に気付き、削除。そんな事が三度ありまして……言い訳っぽいですね。

まあ兎に角、楽しんで読んでいただければ幸いです。

……このクロス企画の解説的なものをその3投稿後の本編の更新をした時に後書きでするので、まあ疑問点があっても一先ずスルーしていただければ幸い。

あっ、後ですね。ついこの間ちよつとした意見を頂きまして、曰「視点変更がわかり辛い」との事で。

私自身はわかり辛いとは思わず何か対処方を考える必要はないと思っただけですけど、「視点変更がわかり辛い」と感じる方がその他にも多数いるならばさすがに何か考えなければいけないでしょう。

つと言う事で、読者様方。よろしければこの駄目作者にわかり辛いか否か教えて頂ければ幸いです。

まあそんなこんなで、

その2に関する注意

- ・ 12月5日投稿。
- ・ ネタバレあるかも。
- ・ 龍夜の戦闘狂とか外道っぷりが三割増しかも。
- ・ 裸汁ぶっ壊れフラグあり。
- ・ その他諸々。

上記の事が無理な方はブラウザバックを推奨します。

許容出来る方は、どうぞご覧下さい。

第一交差その2：壊れた王と餓える死神。

Side ラジル

走る。走る。『精霊支配権』の所持によって転生前とは比べものにならない程に向上された身体能力をフル稼働して、只管走る。

向かう先は突如出現した強大な魔力反応の発生地点。出現した魔力はかなり強大なもので、それこそエヴァや近衛姉妹を軽々と越える総量だった。その上麻帆良に張られた強力な結界を強引に破壊して侵入したのではなく結界を”潜り抜けて”侵入したみてえだし、どうやら今回の侵入者は相当高位の魔法使い。

しかもその近くには近衛姉妹がいるって話だし、誘拐とかされねえように急がねえといけねえのに……。

「糞……っ！ 何で転移が無効化されんだよ！」

最速の移動手段。『精霊支配権』による転移が使えない。

原因は詳しくはわかんねえが、何故か精霊が魔力反応の出現付近に近づくのを拒んでいて、空間と空間を繋げるゲートを開けてくれねえ。

不測事態の連続。まるで二ヶ月前のあの事件みてえだ……。

「ちっ
「！」

このままだと、結末も二ヶ月前と一緒になっちまう。脳裏を過ぎつつその可能性に危機感を感じて、より一層地面を蹴り続ける脚に力を込める。

「間に合ってくれよ……っ！」

侵入者の実力は未知数だが、少なくとも魔法に関しては恐らくあのエヴァすら越える。

それに比べて近衛姉は日々の修業で体中ボロボロの上足枷 近衛妹もいるし、二ヶ月前のあの事件のせいで精神的に余裕がねえだろっ。

これだけでも勝敗は簡単に予想が出来るっつうのに、あいつの切り札級の業は全て反動がある。

つまり、最高に運が良くて共倒れだ。

しかもあいつは、近衛妹のためなら何の戸惑いも躊躇もなく共倒れ覚悟で捨て身の業を使用する。二ヶ月間あいつを見ていたら、そんな事は簡単にわかるし断言出来る。

そうならないよう全力で走っている訳だが

「だーっ！ こんな長い道程だったかこの野郎っ！？」

俺自身にも余裕がないのか、一向に距離が縮まらない気がする。

早く、速く行かねえといけねえのに！ 胸中に沸き上がったそんな苛々に堪えられず、つい怒鳴り声をあげてしまった俺は可笑しくねえはず。

っつて

「こんな阿呆な事考えてる場合じゃねえだろ……っ！」

今更な事に、大幅に自己嫌悪する。

この間にも近衛姉が自分の身体なんて二の次にして、妹のために戦ってるっつうのに！

そう思って、さらに加速。縮地を間髪入れずに連続でする。
一步。一步。先程までとは段違いの速さで駆ける。

数秒間そうして紅葉もみぢの絨毯が敷かれたアスファルトを蹴り続け、
また一步と踏み出して 直後の、悪寒。

「っ」

これ以上進んではいけない。生物本来の防衛本能が俺の理性にそ
う訴え掛けてくる。

この心の底から沸き上がるような恐怖。俺はそうさせているもの
が何なのか知っている。これは二ヶ月と約一週間前に対峙した『悪
魔』が放った異常。狂大な『ナニか』から来る 狂気。

やばい。これはやばい。魔力反応があつた地点とはまだ結構な距
離があるにも関わらず、こんなとこまで届くんだけだ。侵入者はあの『
悪魔』と同等に近い狂人と考えるのが打倒 っていや、まて、こ
れは、この狂気は

「ちっ、笑えねえぜ。近衛姉め……大切な妹の前で、狂気を出すん
じゃねえよ」

近衛紅葉のものだ。

異常なまでの保護欲。それが転じて狂気へと昇華 いや、退化
したんだろっ。

二ヶ月前のあの事件の時と同じだ。
なら、あいつが今からする事はきつと

「 『天照の怒り』……。あんな状態で使う気かよ。あの馬鹿…
…っ！」

魔力を探ってみれば、侵入者の魔力の近くに膨大な魔力が二つ。

近衛姉妹のものだろう。その片方が気との反発で徐々に暴力的なものへと変化している事に気付いて、焦りが胸中に沸き上がる。

「くそっ！ 先走りやがってっ！」

S i d e o u t

S i d e 侵入者

一歩一歩と倒れ伏す転生者っぽい幼女に近付きながら、この幼女が万全な状態ならと遣る瀬無さを感じる。

ポロポロのチート転生者と戦^{たたか}うて殺してしまうんは勿体ないと思つて反撃せんかつたんやけど、反撃せずとも勝手に自滅。

こうなるんやったらポロポロでも戦うとけば良かったわ。

殺り合うんなら全力の幼女が良かったんやけど、んな事思つたらこの有様やし。

その後悔をしながら、胸中に燻る不完全どころか一切燃焼してない戦闘欲求をどうしようかと考える。

この世界に来た二つの目的の内一つは既に終わっており、もう一つはこの世界の麻帆良で転生者達の調査 と言つ名目の興味本位

「愛ですなー」

「一步一步と近付く俺を潤んだ瞳で睨みながら、幼女の前に立って守るように両手を広げる近衛木乃香やと思われる少女。」

「こんな果敢な少女って今時珍しいんとちゃう？」

「見れば体中がガクガクブルブルと震えとるし、恐怖で顔が引き攣っている。」

「それやのに精一杯を俺を睨む様から、どれだけこの少女にとってこの幼女が大切なのが窺い知れる。」

「ちっ、近付かんといてっ！ これ以上お姉様に何かしたら、ウチ許さへんよっ！」

「何かしたらって、まだ何もしたらんのに俺が悪くなったらん？ 可笑しい話やわー」

「何だか自棄に理不尽な気がする引き攣った叫び声に当たり前の返事をして、この素晴らしい姉妹”愛”を見ていたらふとある事を思い付き、口端が釣り上がる。」

「おおっ、我ながらこれは面白い考えやっ！」

「むふふふ……っ！ 思い立ったら即実行 俺の愉しみのためにちっ手伝ってくれへんかな？」

「っ！？」

「ちなみに、拒否権はないからなー」

Side out

「見えた……っ！」

魔力反応の出現から10分前後。漸くその地点を一般人とは比べものにならない程高い視力でぎりぎり視認出来る距離まで近付いた。あまり魔力が多くもないくせに後先考えず縮地を連続使用したからか、魔力残量は後僅か。

その残り少ない魔力を使って、またしても縮地。地を蹴る度に魔力が減り、戦闘の痕跡がより明確に見えるようになる。

数秒間そうやって地を駆けていると、やがてその場の有様がくつきりと見えるようになる。

空を舞う灰。夕日に照らされた所々焦げている大地。轟々と燃える建造物。そして

「っ！？」

地面に倒れ伏すポロボロの近衛紅葉と、その側に座り込む茫然自失の近衛木乃香。

驚愕。困惑。疑問。それらが脳裏を駆け抜けて、俺を混乱させる。それは倒れ伏す近衛姉を見てでも茫然自失の近衛妹を見たからでもなく。いるはずの者がいねえ事に気付いたから。

どういう事だ？ 確かに魔力反応はあった。現に今も強大な魔力反応をその場から感知出来る。

遠目から見える近衛姉妹の様子からして、何かあったのは必然。侵入者に何かされた可能性しか考え付かない。

要するに、侵入者がその場にいなければ可笑的い。

それなのに侵入者の姿は見えねえ。……いや、考えるのは後にして、今は近衛姉妹に何があったのか事細かに聞く事が先決か。

そう思っ、あと一回縮地を使えば皆無になるであろう極僅かの魔力を使って再び縮地。近衛姉妹の近くに駆け寄る。

「近衛妹！　ここで何があつたか説明してくれ！」

「ラッ、ラジル先生……？」

俺の声を聞いて、呆然としたままこちらに視線を向ける近衛妹。その瞳が潤んでいる事に気付いて、その前にやるべき事に気付く。

「　っ。その前に、近衛姉の安否の確認か……」

そう言っ、倒れ伏した近衛姉に近付き、呼吸を確かめる。

「……呼吸はあるな。なら、今から急げば……」

呼吸がある事に気付いて気が抜けかけるが、まだ油断しちやいけねえ。

早く治療してやんねえとっ！

「『希望を与える光。安らぎを送る風。我が声が聞こえるならば傷付いた子羊を優しく包み、暖かな温もりを以って癒したまえ』」

『精霊支配権』を使って治癒を司る精霊に近衛妹の状態を回復するよう命令を下す。

すると風が近衛姉を中心に緩やかな渦を巻き、暖かい光がその身を包み込む。

これで一応は安心。そう思うと怒りが胸中に溢れ出す。その矛先は自分自身と侵入者。

こんな奴でも一応生徒だし、こいつが自分こそは主人公だと言いつ張る原因を知ってしまった今ではそれなりに情も移っている。……こいつはむしろ俺を毛嫌いしてるようだが、そんな事関係ねえ。

俺がもっと速くこの場に着いたら、近衛姉がああ業を使う前に侵入者が退いてくれたら、こいつの意地なんて無視してボロボロな身体を治していたら……。

罪悪感と後悔。そこから来る怒りが脳裏を駆け巡る。

そこで近衛妹が俺に何かを言いた気な視線を向けている事に気付いて、怒りを出来るだけ抑えて声を掛ける。

「……どうしたよ？ 何か言いたそうだけだよお」

それでも怒りを完全に抑える事が出来ず、意図せず威圧的な声を出してしまう。

それを聞いてびくつと肩を震わした近衛妹を見て、罪悪感を抱く。突然こんなファンタジーな出来事見せ付けられて、大事な姉がボロボロになって倒れる。今はそんな事があつた直後なのに、脅かしてどうすんだよ……っ！

そう思って、謝罪しようと口を開いて 気付く。

「……何だ？ その紙？」

近衛姉に気を取られて気付かなかった近衛妹が持つ紙から、”膨大な魔力”を感知した。

「えっ？ あれ、何やる。これ」

呆然とした声をあげた後放たれた言葉に、不信感が現れる。

何で何かわかんねえ紙を持つてるんだとか、何でその紙に魔力が籠められてるんだとか、聞きたい事があるだろ普通とか、そういえばあれだけ慕ってた近衛姉が倒れたのにリアクションが薄い　　つて、まさかっ！

「この近衛妹はダミー（偽物）かつ！？　だとしたら　」

「考えられる事はただ一つ。

「　時間稼ぎのためかつ！」

全て憶測だが、侵入者は俺がこの場に来る事を知っていた。十二分にありえる。

何らかの理由でこの場に俺を留まらせなければいけなかった。ありえない話ではない。その為に近衛妹のダミー（偽物）をここに置いて、事情説明や事情聴取。その他諸々の行動で俺をこの場に縛り付けようとしていた。道理には適っている。

ならば次、何故俺をこの場に留まらせねえといけねえんだ？

「……本物の近衛妹を誘拐。逃走の時間を稼ぐ為」

誘拐なら近衛妹が一人でいる時に実行するだろうし、痕跡となるこのよくわからない紙を残しておく必要はない。

近衛妹を人質に関東魔法協会や関西呪術協会に脅迫する為なら近衛姉も連れて行くだろう。動き辛くはなるが護身用の生かす人質と脅迫用の傷付ける人質。近衛姉妹双方の命の手綱を握る事によって逃亡や反抗を制限し、牽制にする。

脅迫目的で麻帆良の結界を潜り抜けたんなら、相当な高位の魔法使いであろう侵入者が思い付かないはずがない。

不自然な点が多い、力量から考えるとあまりにも愚かで軽率過ぎ

る。

恐らく違うものが要因だろう。

だとしたらその要因とは何だ？

そう考えるも、見当が付かない。全く、何でこんなダミー（偽物）を置いて時間稼ぎをしようとしたんだ？

最悪前提であるこのダミー（偽物）は時間稼ぎ目的で置かれた訳じゃねえとか、そもそもこれがダミー（偽物）じゃなくて本物で、近衛妹は突如降り懸かった否日常に放心しているだけかもしれないねえし、俺に渡せだとかで侵入者がこの紙を持たせた可能性が……。

考えながら、近衛妹（？）の手の内から紙を取り上げる。

いきなりの行動に近衛妹（？）は先程と変わらねえ呆然とした表情をこちらに向けて、口を開く。

「もー、びつくりしたやんかラジル先

」

開いた口から出た困惑した言葉を聞きながら取り上げた紙を見遣るが、言葉が途切れた事に不信感を感じて視線を近衛妹（？）に戻す。

そうして、驚愕。

「っ！？」

視界に入った近衛妹（？）は俺が視線を外した僅かな間に表情を一変。まるであの『悪魔』のように嗜虐的に口端を吊り上げらせ、嗤ってた。

「　　っと、準備完了したみたいやな。ほんじゃあ裸汁先生、”舞台”で”本体”が待ってるんではよ来てなー」

名前のニュアンスが違う気がするぜ　　っと突っ込む暇もなく、

徐々に姿を変貌させる人の形をしたナニかへの驚愕と疑問に脳内が埋め尽くされる。

「おいつ、準備だとか舞台とか意味わかんねえ事言ってるんじゃない。本物の近衛妹はどこに」

「以上。黄ばみイエロー44からの伝言でした」

俺の言葉を遮りそう言った後、ぼんつと言う軽い爆発音と共に黄色い煙が発生。その煙に視界を埋め尽くされて何も見えなくなる。

「って、どこ行つたてめえっ！ てめえにはまだ聞きたい事が」

怒声の最中に気付く、近衛妹のものだとばかり思っていた魔力反応が消失した。

「糞っ。分身を変化させてたってか！？ 魔法忍者くすみイエロー44？ ……はっ、笑えねえつつうのっ！」

相当高位な魔法のレベル。分身を変化させるなんて器用な真似が出来る技術。近衛妹じゃねえと疑問を抱かれねえように無駄に込められた魔力から考え尽くる魔力量。冗談じゃねえ。侵入者がなんちゃって超人とか笑えねえよ。

この調子だとまだ手札を隠し持つてる可能性もある訳だし……。

「本当につ、笑えねえよっ！ 『風よ。我が声が聞こえるならば吹き荒べ』」

取り敢えず、風の精霊に簡単な命令を下してこの鬱々しい煙を吹き飛ばしてもらおう。

舞台が何なのかとか何の準備なんだとか色々疑問はあるが、今はまず

「近衛姉を安全な場所に移動させるのが先か……」

そう思って開いた視界に映る倒れ伏した近衛姉に近付こうとして、くすみエラー44が変化していた近衛妹から取り上げた紙から魔力が放出された事に気付く。

「っ!?!」

独りでに俺の手から離れ、浮遊し始めた紙に驚愕と疑問が緋い混ぜになった視線を向ける。

どんな細工がされているつつうんだ？ その場には侵入者がいると遠くからでも確信出来るようにする為だけに大量の魔力を込めた訳ではねえだろう

広範囲のペーパーボムか？ ……いや、くすみエラー44が去り際に放った言葉を信じるなら本体はその舞台とやらで俺を待っているみてえだし、その俺の命を落とす危険性のあるものを態々残す必要はねえ。恐らくペーパーボムではないだろう。

なら何だ？ そう考える。が、見当が付かねえ
……取り敢えず、様子見だな。

「鬼が出るか蛇が出るか。ってか？ ……悪魔は出てくんじゃねえぞ」

そう言いながら、気絶して何もない近衛姉と紙の間に移動する。

その間にも謎の紙は魔力を放出し続け、嫌な緊迫感をこの場に齎す。

何が起きてもすぐに対応出来るように、いつでも『精霊支配権』
を使えるよう思い付く限りの”ナニか”を対処する為の言の葉を脳
内に思い描く。

恐らく魔力放出の臨界点に達したんだろう。やがて魔力の放出が
終わり、現れたものは

「　っ！」

気絶した状態で世界樹に張り付けにされているエヴァと、そ
の下で座り込み泣き喚く近衛妹。そして、僅かに離れた場所からニ
ヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべてその二人を眺める、侵入者らしき
白髪蒼眼の美女　の現像。

件の紙の上に立体で映し出されたその光景は、俺から冷静さを奪
うには十分どころか三十二分の精神的衝撃を与えた。

「……この糞女があ。エヴァに手え出しといて、易々と帰れるとは
思ってたんじゃないぞ……」

意識せずに言葉が乱暴なものになっていく。胸中からどす黒い感
情が沸き上がり、脳裏に虐殺の二文字が延々と過ぎり続ける。

正面まへもな思考が出来なくなる。体温が冷たくなっていくような錯覚
に陥る。眼が血走る。息が荒くなる。手を固く握り締める。歯を食
い縛る。

そんな危ない状態になった俺なんて気にせず、紙の上に描かれ
た侵入者らしき美女がこちらを向いて、口を開いた。

『ややつ、裸汁先生。調子は如何いかにかなー？』

「　最悪だぜ。てめえのせいであ……っ！」

突如映像だと思っていた侵入者に声をかけられ、一瞬驚愕したがすぐに言葉を返す。

憤怒や憎悪で頭が可笑しくなったのか、ニュアンスが違う事は気にならねえ。

『そりゃあ残念でしたなー　こんな愉快な日に、本当に残念やわ』

残念にした張本人が何をほざくんだ。大体、愉快なのはてめえだけだろうが。等々言いたい事は色々とあるが、先ず一番に聞きたい事を聞く事にする。

一人の神経を逆撫でるような物言いの侵入者（映像）に視線を向けて、口を開く。

「御託はいい……。一先ず聞いてえ事がある。エヴァに何をした？
今から何をする気だ？」

近衛姉妹の事もあるが、正直言ってそんな事気にする余裕はねえ。そんな俺の質問に侵入者が勿体振ったように返した言葉は

『最近の裸人はせっかちな。それにしても、うーん。何って言われても……。ただ気絶させて、運んだだけやぞ？　ちなみにこれからする事は、まだ未定やー』

余計に俺の神経を逆撫でる言葉だった。

「　っ。じゃあよおっ、何で気絶させたんだ……？」

『そりゃあ勿論、これから始まる楽しい楽しい殺し合いをもっと愉しくするために決まっとるやん』

戦闘狂の気があるのか、これから始まる虐殺劇が心底愉しみだと言つようにニヤニヤと嗤いながら、それだけの為にエヴァを気絶させた事を俺に言う侵入者。

それだけの為に、エヴァに危害を加えた

当然のように放たれたその言葉を脳内で反復。先程まで胸中に蔓延っていたどす黒い感情が急速に鳴りを潜めていく。臨界点を越えた憤怒が俺から俺を奪ってオレを表面化に押し上げようとする。脳裏を過ぎる虐殺の二文字は消えない。

俺がオレとして俺を奪い、俺がオレへと変わっていく　が、何とか踏み止まり、静かに、それでいて有りつ丈の怒りを乗せて言葉を放つ。

「……そこで大人しく待つてろ。どうやらてめえは、ぶつ殺さねえといけねえみてえだ」

『あんまり待たせ過ぎるとつい我慢出来んで何かするかもしれんから、はよ来てくれよー』

言葉を聞いた後、すぐに世界樹広場へと駆け出す。

魔力は底を突いた　だが、俺にはそんなもの必要としない『精霊支配権（暴力）』がある。

「『精霊達よ。王足る我が声の下に集い、血に塗れた大空を翔ける王の翼と化せ』」

言葉と共に世界の一部である精霊が俺の背後に集つ。

「『ウイング・オブ・スピリット（精霊の翼）』」

金色の翼へと姿を化えた”幾つもの精霊”が、俺の身体を加速させる。

「……………待ってるよ。エヴァ……………っ！」

その時 いや、この時俺は気付いてなかった。精霊達がナニかに怯え、世界樹広場へと近づく事を拒んでいるとは……………。
気付かなかったが故に、俺は再び虐殺者へと成り下がった。

第一交差その3：悪魔と死神。裏切りとオマケ（前書き）

何かもう、色々ごめんなさい（笑）

第一交差その3：悪魔と死神。裏切りとオマケ

Side キリア

おいおいおい。何であんな化け物がこんな世界にいるのさ
見ただけでわかる圧倒的な暴力チカラの持ち主である銀髪蒼眼の美女。
恐らく件の侵入者だろうそいつをこっそりと気配を隠して眺めなが
ら、心の中でそう愚痴る。

あんな化け物を時間内に撃退、または捕縛って、明らかな無理ゲ
ーじゃないかな？

ぬらりひよんめ……。こんなに化け物染みてるなんて聞いてない。

「はあ。何でこんな事になったんだっけ……」

まあ、いつまでもうじうじと不満を訴えるだけじゃあ何にもなら
ないし、やるしかない……か。

そうやって軽い決心を付けて、デートを前にした年頃の乙女のよ
うに無邪気に嗤う狂人（化け物）の隙を探す。

デートはデートでも、地獄逝きの片道切符が賭けられたデートな
んだろうね。とか、戦闘狂の気があるのかな？ 等と思いつながら、
気配を消したまま注視してみるけど……隙が見付からない。

嫌だよ本当。単純な戦闘能力が僕より下ならまだ殺ってやる気にも
なれるけど、どう見ても化け物で隙がない奴となんてよっぽどの
事情がなきゃやりたくはない。……まあ、それでもやらないと少し
面倒な事になるし、やるやらないじゃなくてやらなきゃいけないん
だけだよ。

全く本当に、面倒な事を押し付けてくれちゃって……。後で見て

なよ、ぬらりひよんめ。

なーにが「ラジル君の理性が崩壊間近でう。このままじゃと麻帆良が更地になる可能性があるのじゃ。お主はラジル君が侵入者と戦闘を開始する前に侵入者の撃退もしくは捕縛。及びエヴァンジェリンと木乃香の守護と奪還を頼まれてくれるかのう？」だ。疑問符なんてただの飾りじゃないか。

や、他にも色々と言われたんだけどさ。例えば「今回の侵入者は今までの有象無象とは比べものにならぬ程に手強いが、まあお主なら大丈夫じゃろう」なんて無責任な言葉とか色々。

……いやいやいや、大丈夫じゃないから。ぱつと見ただけでも”あの六人”と同じ、若しくはそれ以上の暴力の持ち主だからね。単純な戦闘能力なら明らかに僕が格段に下だからね。

……軽い決心は付けたものの、やっぱり”あの六人（企画外）”と同等若しくはそれ以上の戦闘者を前にすると腰が引ける。

まあ、それでもやっぱり、殺らないといけないんだけどさ

先程よりも重い決心を付ける　つと言つより半ば諦めて、世界樹に張り付けにされたマクダウエルと、その下に座り込み泣き喚く近衛木乃香を眺めながら「早く来んかなー」等とほざく侵入者に視線を向ける。

何かあつたらすぐに動けるように注意しながら、アルファードがこの場に来る前にあの侵入者を撃退若しくは捕縛する算段を考える。狂気を使って戦意喪失　無理だ。見ただけでわかる程に、侵入者は飛びっ切りの狂人だ。下手に狂気を放出なんかしたら、ただ刺激を与えるだけで終わる可能性が高い。却下。

なら強力な致死性を持つ無色無味無臭の毒霧を撒き散らして、知らぬ間にぼつくり逝かせる　正直言つて微妙。この世界に来てから毒が効かないor無効化されるなんて事が二度もある。二度ある事は二度あるとも言つし、正体不明の侵入者に使う気にはなれない。

……まあ、試す価値はあるだろうけどね。保留。

増援が来るまで待機　本末転倒だけど最悪そうしなきゃいけない可能性がある。保留。

無謀にも突っ込んでみる　阿呆か。却下。

無色無味無臭の毒霧をあゝの侵入者に気付かれぬように撒き散らし、『毒破』で爆殺　マクダウエルや近衛木乃香にも被害が出る可能性がある。そうだったらアルファードやぬらりひょん、その他諸々がうるさくなるから却下。……いや、保留にしておこう。

リミットオーバー限界突破と『竜魂装着』の並行使用で身体能力やその他諸々を大幅に強化して、特攻　隙を付けば行動不能に出来る可能性があるけど、失敗した時のリスクが高過ぎる。……リスクが高いけど、その見返りも期待出来るからこれは最後の手段として取って置く事にする。保留。

『竜魂装着』をして『ナイトメア・ゾーン』を展開。生命エネルギーを吸い尽くす。吸い尽くす前に『竜魂装着』の反動が致死レベル一本手前までなったら、吸収した生命エネルギーと僕”達の”の気をフルに使っての超高火力攻撃　いざとなったら奥の手もあるし一応の保険も効くし、これならマクダウエルや近衛木乃香にも被害が出ない。『ナイトメア・ゾーン』が壊される可能性もあるけど、まあそれはないだろう。リスクは高いけど一つ前の考えより低しいし、見返りはそれ以上のものを期待出来る。……だけど、反動を考えたらこれも安々と使う気にはなれないし、保留。

そこまで考えて、何故か嫌な予感を感じた。体中を駆ける悪寒。脳裏を過ぎる危機感。

視線の先にいた侵入者はいつの間にか消えている。気配も同様。ここまで来たら簡単に予想出来る。いつの間にか僕は

「やあやあ嬢ちゃん。こんな所で考え込むぐらいなら俺とちよっと遊ぼーや？」

侵入者に気付かれていたらしい。

「それはまた、お断りしたくて仕方ない提案だね……っ！」

背後から聞こえた凜とした声に咄嗟に振り向き、大きく後ろに跳躍する。

考えながらも視線は外してない。侵入者の挙動は注視していた。なのに、「気付いたら背後にいた」。……ご丁寧に気配まで消してこれは愈いよいよ、「キリア終了のお知らせ」が流れるのかな？ なーんて考えながら、さてどうやって撃退若しくは捕縛しようかなと思考する。

着地地点が調度近衛木乃香の真ん前で、突如目前に現れた僕に近衛木乃香が驚愕した気配が伺える。

「きっ、きーやん？ 何でここに……」

後ろから聞こえる涙声に、この場の打開策を考えながら返事をしようと言を聞く。

「妖怪からの頼み事でちょっとね。本当はこんな事する気にはなれないんだけどさ、こうでもしないと不都合が出るんだよね。だから、まあ、不本意だけど」

先程考えていた案を脳内で反復して、使えそうな案を頭の中で纏める。

「僕は君達を守りながら、あの銀髪をどうにかしなきゃいけないみたいだ」

パズルのピースを嵌める感覚で纏めた案の順序立てをして、一応

の保険の為に近衛木乃香に耳打ちをする。

「　　と、言う訳なんだけど、お願い出来るかな？」

「　　うん。そんならいならちゃん出来るえ」

困惑しながらも了承してくれたので、一応の御礼を言うておく。

「　　ありがとう。じゃあそついう訳で　　」

今まで黙って僕達の遣り取りを見ていた侵入者に殺気を籠めた視線を向けて、自己暗示を始める。

不確定な未来に対する恐怖。目前の侵入者に対する恐怖。傷付くかもしれない恐怖。死ぬかもしれない恐怖。そういったものをより明確に思い浮かべて、自らで自らに恐怖を感じさせる。

加速。加速。恐怖を加速させる。そうするとやがて、視界に入る全てが自らに牙を向けてると思える程に僕が臆病になっていく。

怖い。恐い。コワイ。何もかもが恐怖の対象。気付かない内に身体が震える。気付かない内に顔が引き攣る。気付かない内に　　恐怖が狂気に昇華した。

時間内に撃退とか捕縛とか、正直無理そうだけど

「　　そろそろ始めようか？」

今までにも格上相手との殺し合いは何度もあったし、その度に僕（悪魔）らしく殺して、生き長らえてるんだ。

なあに、簡単だ。今日だって今まで通り

「　　自己暗示コード4444。合言葉は『毒霧の悪魔』。リミットオーバー（限界突破）・スタート（開始）」

生きる為に、僕の為に他者を傷付けて、蹴落として、殺す。
ただそれだけの事。

「幸福ながら今日が君の命日だ。僕は聖徳太子もびっくりする程優しくして慈悲深いからね。斬殺と毒殺と撲殺と爆殺、どれが良いか選ばせてあげるよ。ああ、一応生き埋めの選択肢も用意してあげるさ。何てったって僕は優しいからね」

そう言った直後に、体中に気を駆け巡らして身体強化をする。

「あー、どれも遠慮したいもんやなあ　　つつか、嬢ちゃんそんな事出来るんかー？」

「　　勿論、出来るに決まってる、さ……っ！」

言葉を言い終わらない内に地を蹴り、加速。

錯乱目的で複雑な軌道を駆けながらトキシックファングを右手に握り、盾を左手で握る。

人間の限界を超え、更に気で身体能力の向上までした僕は一瞬の内に侵入者の背後に立つ事に成功して、勢いそのままに侵入者の首筋目掛けて”紫紺に輝く”片手剣を突き出す。

「おおっ、はっやいなー。順番が変わるけど、まあ良いで。まずは嬢ちゃんと」

視線を前に向けたまま危^{けい}な気無く背後からの高速の一突きを回避した侵入者。

言葉に耳を傾けながらもこれぐらいは想定してたので、既に準備を終了していた次の手を打つ。

「　　愉快的殺し合いでも始めよ　　」

「『毒鎖蛇・八本　　』」

言葉を遮り、先程の突きを首を僅かに捻る事で避けた侵入者に再び首を目掛けて今度はトキシックフアングを真横に一閃。

「　　ってちよつ、人の話は最後まで聞けって親から教えてもらってへんのかっ!？」

何やら侵入者が言ってるけど、無視。

悲しくもないけど、これって殺し合いなんだよね。

「『　　八俣遠呂智』」

やはりとでも言えば良いのか、またしても危ない気無く横一閃を避けた　　今度は僅かにしゃがんで　　侵入者に、刃の軌道に描かれた紫紺の線から姿を現した八体の蛇　　侵入者との距離が近い為、図体はいつもより格段に小さい　　が牙を向ける。

「って、ほんまに人の話聞かへんなあつ!」

予想外の攻撃に驚愕したのか、僕が作り出した蛇の毒牙にあつさりと捕まった侵入者の姿を確認。

未だこちらに背中を向けたまま、両手両足にそれぞれ二体の蛇に牙を突き立てられ巻き付かれている。

化け物染みた力があるからこそ、油断していたのだろう。

……拍子抜けではあるけど、侵入者の音色から考えるとまだまだ余裕があるんだろう。現に猛毒を持った蛇に噛まれても声は先程と

変わらないままだし、やっぱり化け物だ。

でも、まだまだ想定内

「『毒塊^{どっかい}。二十連』」

後退しながら、無防備な侵入者の背中に向けて気で作り出した直径十センチメートル程の毒の塊を短い間隙を空けながら二十発撃ち出す。

着弾と同時に小さな まともに当たれば一般人なら腕の一つ吹っ飛びぐらいの威力はあるけど 爆破を起こす『毒塊』を見ながら、十分距離を取った所でトキシックファンクに気を籠める。

その途中、『毒塊』の爆撃が終わりを迎えたので未だ侵入者に噛み付く蛇達に改めて送っていた余分な気に更に余分な気を注ぎ込み

「『毒破・連鎖』」

爆破。その直後にトキシックファンクに気を溜め終わった事を認識して、次の手を打つ為にトキシックファンクを逆手に持ち替えて、右手足を大きく後ろに捻る。

思い出すのは『あの六人』の暴力的な力。

思い描くのは『あの六人』が放った究極の暴力。

描く。只管描く。より鮮明に、より明確に、より頑固な暴力^{モノ}として脳裏に業を描く。

籠める。籠める。只管籠める。殺意を、恐怖を、狂気を、願望を

「君みたいな化け物に遠慮はしないよ。これで死ぬ、ここで死ぬ。不様に地面を這い蹲^こって麻帆^{まほ}良で僕に出会った事を後悔しな」

言葉と共に、先程の爆破の影響で立ち込める毒煙の中にある侵入者の気配に向けて 駆ける。

地を蹴る度に足裏で気を爆発させ、一步進む度に加速する。瞬間的に『竜魂装着』を発動する為に、防具と武器に気を送り、そこに眠る『ギギネブラ』の魂と混合。いつでも発動出来るようにする。

そこまでの所で、十分な助走のお陰でリミットオーバー（限界突破）と気での強化をした状態では最高の速度まで達する。

それと同時に、侵入者との距離もこれから行う業が届く距離に届く。

化け物の首は油断している内に刻み落とせて教わったもんでね

「『ヴェノム・フアング!』」

Side out

Side 侵入者

「って、ほんまに人の話聞かへんなあつ!」

喉から出るのは歓声。

言葉だけ聞けば怒声にしか聞こえないやろつけど、違う。怒声なんかやない。

だってこんなにも嬉しいんや。

だってこんなにも嬉しいんや。

この殺し合いが、向けられた狂気を孕んだ眼光が、油断してたとはいえこの俺を　藤崎龍夜を捉えた白髪紫紺眼の少女との闘争が、愉しくて嬉しくて仕方あらへん。

だから、俺が出した声は全部全部歓声や。

嗚呼愉快。順番が変わりはしたけど、それでも嬉しい事に変わりはあらへん。

願うなら　もっともっと、オレヲタノシマセテクレ。

「『毒塊。二十連』」

背後から何かが近付いて来るのがわかる。避けようと思えば両手両足に噛み付いて離れない毒蛇達を無視して避ける事も可能だし、防ぐ事も同じく可能。だが、避けたり防いだり、そんな勿体ない事はせん。

突き、一閃。その二つをフェイクに発動し、俺を捉えた八体の毒蛇。今まさに俺に降り注いだ毒の塊達。狂大な殺意と狂気が含まれた鋭い視線を向ける少女。

こんな事があつたら、こんなもんを見たら、俺の心の中に潜むお預け状態やった狂気（化け物）が興奮してしまうやん。

だから、どんな殺意も狂気も受け止めて、どんな攻撃も業も受け止めんな損やる？

「くっ　くくくっ。あはっ、あははははっ！」

毒の塊が背中当たり、着弾と同時に爆破する。

毒蛇達が両手両足に噛み付き肉を喰らう。

その痛みにどうしようもない愉悦を感じて、つい嗤い声が出てしまう。爆破音に邪魔をされて白髪紫紺眼の少女には聞こえていないだろうけど。

「『毒破・連鎖』」

白髪紫紺眼の少女の言葉と共に、俺に牙を突き立てていた毒蛇が爆発。肉がえぐり取られる。痛みが体中を駆け巡るが、直ぐ様快感に変わる。

「君みたいな化け物に遠慮はしないよ。これで死ぬ、ここで死ぬ。不様に地面を這い蹲って麻帆良で僕に出会った事を後悔しな」

これで死ぬなんて、ここで死ぬなんて、連れない事言わんでや。まだや。まだまだや。まだまだ続けんと、こんな愉しい殺し合いはそんなになんやで？

「あっ、あひゃっ、あはっ！ あひゃひゃひゃひゃっ！ あーっはっはっはっはっはっ！」

猛スピードで近づく死の気配を感じて、またしても歓声の嗤い声をあげてしまう。

狼の大群が獲物を狩る為に駆けるような、そんな激しく不気味な足音を聞きながら嗤う。

「『ヴェノム』」

真後ろから聞こえた声に、振り向く。

「『ファンゲ！』」

殺意と狂気が入り交じった紫紺の眼を見詰める。俺を殺さんと身体を動かす少女に恍惚とした視線を向ける。視界に入った紫紺の毒

牙に歓喜して 受け入れる。

「ぐっ、はぁ……っ！」

避ける素振りも見せず死の気配を受け入れた俺に驚愕したのか、困惑したのか、殺意と狂気が入り交じった紫紺の瞳に疑念が浮かんだ。

だがそれも一瞬。直ぐに疑念を瞳から消し去り、右脇下から左肩までを派手に 致命傷レベルまで 斬られて尚嗤う俺に向けて先程よりも濃い死の気配を向ける。

「『竜魂装着 ギギネブラ（毒霧纏う二面の悪魔）！』」

そう言った直後、少女の体中から膨大な力が溢れ出る。

見れば後頭部に悪趣味な仮面や、体中に紅と白のライン浮かび上がっている。

何をしたのは俺でもわからん が、これで更に愉しくなりそうだとわかった。

その証拠に先程よりも明確で鮮明で頑固な、狂大で狂烈な殺意と狂気が俺に向けられている。

視界に映るのは埃を被ったような儂い白。俺を貫くのはどこか危うい紫紺の眼光。俺に向けられたのは 死を呼ぶ爪。

「愚かなその身に死の十字を……。『死爪十字』」

言葉の直後に紫紺の閃光が二つ煌めき、”同時”に俺の身体を切り裂いた。

「……くっ、くくくっ。凄いなあ嬢ちゃん。人の身で並行二撃が出来る奴って、珍しいで？」

先程からの攻撃で見た目はボロボロ。その中には致命傷と言えるものもある。

右脇下から左肩までの深い裂傷。たった今付けられた胸を中心に描かれた十字型の裂傷。

体中が痛い。特に上記の二つが。

だが、その痛みは愉悦に変わり、この愉悦を俺に与えた張本人白髪紫紺眼の少女に対する興味へと変わる。

そんな痛みを物共しない俺を見て　むしろ痛みに歓喜している俺を見てなのか、剣を振り抜いたままの体勢で少女がこちらに引いたような視線を向ける。

「……いやいや、そんなにボロボロにされて喜んでる君の方が凄いつつと言つよりは気持ち悪いよ。もしかして並外れたマゾかな？」

「マゾやないから！　ただちょっと殺し合いが大好きなだけの健全な青年や！」

マゾ発言にムツとして、慌てて言い返す。

さすがにマゾなんて言われとうない。そんな気持ちを籠めて言うてみたんやけど、どういう訳か白髪紫紺眼の少女がフリーズした。

え？　何か変な事言つたか？

「……どうしたんや？」

心の内に現れた疑問を解消するべくそう尋ねる。

剣を振り抜いたままドン引きした表情をこちらに向けて固まる美少女。

「「……………」」

俺が疑問を尋ねてから数秒続いた沈黙。何だか、居た堪れん。
早う何か喋って！ お願いやから！

「
そんな俺の気持ちが届いたのか、完璧とは言えんけどフリーズか
ら立ち直る少女。」

鯉のように口をばくばくとさせ、何かを言おうとしている。

「ん？ 何やって？」

この居た堪れない空気を何とかしたくて、少女の声を聞こうと聴
力をフルに使う。

気付けばあれ程高まっていた狂気（化け物）が鎮静化しており、
俺と少女を包む空気は先程まで殺し合っていたとは思えない程のシ
ラけたもんになるとる。

何でこっとなったんや

そう心の中で嘆きながら、少女の掠れた声を聞く。
ええっと、何何

「
うん？ 君は？」

「
ふむふむ。女じゃなくて？」

「

「男だったのか？」

ええっと、繋げると。

「君は女じゃなくて男だったのか？　でおっけー？」

「」

今は「そっだよ」やな。
って

「　気付かんかったんかいっ！」

渾身の突っ込み。だがこの空気の中でそれはNGだったらしい。
あれ、何や何や。さっきよりもシラけた空気に……。

「……何かシラけたし、もう止めにしない……？」

見れば少女の表情は疲れ果てた老人のように疲労の色を表している。
る。

……たぶん、俺もそんな顔やろう。

「……そっやな」

何だかこれ以上殺る気にもなれんし、疲れた。
殺し合いは、また今度にするかね。

「あっ、そっいや嬢ちゃんの名前は？」

「……キリア。キリア・ラウクルスだよ。そっちは？」

「藤崎龍夜っちゅうもんや。また会った時はよろしゅうなー」

「僕はもう会いたくもないし、よろしくする気もないよ」

「またまたー。連れん事を」

この出会いからこの世界の麻帆良学園では、とあるクラスの金髪金眼の副担任から逃げる銀髪蒼眼の見掛け美女と、その美女に引き摺られるように走る白髪紫紺眼の美少女の姿が目撃される事が幾度もあつたらしい。

くくめでたしめでたしくく

ラジル「って、おい！ 何でこうなったんだよお！」

霧唾「や、それが私にも予想外でさ……」

龍夜「裸汁は活躍させちゃあかん。って脅迫観念でもあるからかもしれへんぞ？」

キリア「ああ、なるほど。だからこうゆう終わり方に……」

ラジル「なるほど。じゃねえ！ 大体、もし本当にそんなものがあ

ったとしても、こんな終わり方になる道理なんてねえだろおっ！」

霧唾「これ以上進むとラジルが出て来ちゃうから、あそこで無意識下に区切った可能性が高いね……」

ラジル「おいっ！ 無意識下で拒絶したいのかわつ、俺の活躍はあつ！？」

霧唾「正直言つと途中からトランス状態だったから、多分そうだと思う」

龍夜「裸汁の活躍が嫌な一心で無我ノ境地……。さすがやな！」

キリア「さすが僕を作り出した駄目作者。平然と自キャラにそんな仕打ちをするとは……。僕が言うのもあれだけど、鬼だね」

霧唾「そんな褒めないでよ。私は当然の事をしたまでだよ！」

ラジル「……酷過ぎだろ。俺の扱い……」

霧唾「……ラジル（壊）を期待していた読者様達へ。すいません。この場を借りて謝罪させてもらいます。お詫び　と言つては何ですが、当初の予定のまま進んだ場合の話の一部を下記に掲載させていただきます」

「何や？ こんなもんやつたんか……」

失望が込められた視線に射抜かれ、不様に地べたを這い蹲ったまま歯を噛み締める。

「どういふ事だ！？ 精霊が俺の命令に反発するなんて事、今までなかった。」

俺には『精霊支配権』がある。だからこそ世界中の精霊は無条件に俺に従う。反発も躊躇も嫌悪もせずだ。

それが今になって命令に反発し、躊躇し、嫌悪して、俺の命令を聞こうとしない。

「期待外れ。がっかり。呆れた。拍子抜け。どんなに言葉でも表現しても足りん程に失望したわ。あんちゃん、殺る気あんの？」

糞つ。糞つ。糞つ！ 精霊が俺の命令さえ聞けば、不様に地べたを這い蹲る事も、失望した表情のあいっにはこぼこにされる事も、張り付けにされたエヴァを助けられない事も、回避出来んのに！

焦り、疑問、憤怒。そんな俺の心中を察したのか、嘲笑を浮かべて俺を見下す侵入者。

そいつの顔に憎悪と憤怒を込めた視線を向けると、そいつは悪戯を思い付いた悪餓鬼のように無邪気で 悪意に染まった笑顔を俺に向けた後に、一言。

「あーもう、腹癒せに誰かぶつ殺さんといかへんかなー。これは」

その言葉を聞いて、思考がフリーズ。思考がフリーズから立ち直る頃には、最悪の可能性が脳裏を埋め尽くしていた。

「っ。やつ、めろ……っ！ そいつっ、だけはっ……。エ、ヴァっ、だけは……っ！」

侵入者との戦闘で傷付いた喉　　体中がボロボロだが　　を酷使して、最悪の可能性を潰す為に精一杯の声を絞り出す。

「んんー？　誰を殺すかなんて決めてへんかったんやけど、そうやね。そないに嫌なんならこの世界のエヴァを殺す事にするかな」

返ってきたのは俺にしてみれば死刑宣告なんかよりも余程残酷な一言。

胸中に溢れ出たのは焦り。

どうしたらエヴァを助けてもらえるか。ただその事だけを考えて、考えて、考える。

だが、俺の脳裏を過ぎったのはどうやってもエヴァを助ける事は出来ない絶望。

今の俺には侵入者からエヴァを助ける力なんてない。だから、諦める。そう囁くオレがいる事を否定して、諦めるなんて無理だとオレに言い聞かせる。

そうやってる間にも侵入者は一步一步エヴァに近付いている。諦める。諦めたくない。死を受け入れる。受け入れたくない。オレと俺が心の中で言い合ってる内に、エヴァに手が届く距離まで侵入者が近付いていた。それでもオレは止まらない。諦めると俺に囁き続ける。

諦める。駄目だ。受け入れる。駄目だ。許容しろ。無理だ。

ゆっくりと、侵入者がエヴァに向けて手を伸ばす。

「や……め、ろっ。駄、目だ……っ！　やめて、く……れっ」

痛む喉を酷使して、必死に声を張り上げる。

その声を聞いてか侵入者が一度こちらに振り返り　　嗤った。

「残念やったなー。あんちゃんがもつと強かったらこつはならんかったんに」

そ／して、最／愛の工／ヴ／アは侵／入者の手／から放た／れた閃／光に／呑／ま／れ／た／。

「 エヴァ嗚呼ああアアア

ッ！」

認め／たくな／い現／実が目／の前に／広が／る／。

認／めた／くな／い／現実／に俺／が壊され／てい／く。

壊れ／て出／来た隙／間に／オ／レが入／り込／んでい／く。

オレ／が俺／を奪い俺／をオレ／に変えて／いく／。

俺／の親愛／がオレの憎悪／に変わる／。

俺／の悲しみ／がオレ／の憤怒に／変わる／。

オレ／が俺／を喰／らい俺／を消して／いく／。

俺／の／全／て／が／狂／気／に／変／わ／つ／て／い／く／。

そ／し／て／、俺／が／オレ／へ／と／変／わ／つ／た／。

「 ツ！ ……」

視界がクリアになる。思考がクリアになる。聴覚がクリアになる。全てがクリアになる。

何も無い。何も感じなくなる。

俺がオレに奪われ、喰われて、オレに変わったから。

オレ？ オレって何だ？ オレって誰だ？ オレは、オレは、オレは、オレは

「 ギ／ヤ／ク／サ／ツ／シ／ヤ／」

そ／う／だ／。ギ／ヤ／ク／サ／ツ／シ／ヤ／だ／。

「な／ら／、殺／さ／ね／エ／と／イ／け／ね／エ／ヨ／な」

霧唾「つとまあ、こんな感じにラジルがぶっ壊れて、『精霊支配権』の”裏技”を使ったりするのが当初の予定だったり」

キリア&龍夜「……………」（どん引きした表情）

ラジル「…………なあ、こんなにぶっ壊れるとは俺自身知らなかったんだ。だから、明らかに目を反らしてんじゃねえよおおおおっ！」

キリア「だって、ねえ？」

龍夜「だって、なあ？」

ラジル「こんな時にシンクロしてんじゃねええええっ！」

霧唾「…………まあ何はともあれ、マンガーさん。龍夜を貸して頂きありがとうございました！ 何だか次に続きそうな終わり方になったので、いつかまたクロスさせて頂くかも（笑）」

キリア「その時は龍夜がアルフードと近衛紅葉に追われて、僕が巻き添い喰らうんだっけ？」

霧唾「そうそう。それで、今度こそ龍夜に『竜魂装着』させようかなってw」

龍夜「今度こそ　　って事は、本当はこの話で使わせる予定やった

ん？」

霧唾「それが……そうだったんだよね。まあ、予想を越えに越えて長くなり過ぎたから、仕方なく削った訳だけど……」

ラジル「けっ、さすが駄目作者だな。予定通りに動く事が出来てねえ」(先程のアウエーで不卓腐れてる)

龍夜「空耳は無視して、一つ質問。俺はどのモンスターの魂を装着する予定だったんや？」

霧唾「それは勿論、凶暴で有名な『イビルジョー』で、武器や坊具。当て字も考えてたんだよね。実は……」

キリア「へー。武器と坊具は、やっぱりオリジナル？」

霧唾「……まあ、そうだよ。G級イビルジョーの突然変異種から作られたって設定で、武器名は『狂暴大剣グラトニー』。見た目はアングイツシュをそのまま巨大化した感じ。坊具も同じイビルジョーから作られた奴で名称は龍夜のRから取って『バンギスR』。ちなみに女物」

龍夜「で、当て字は？」

ラジル「(女物のところに突っ込まねえのかよ……)」

霧唾「『竜魂装着 イビルジョー(貪り喰らう暴君)』にしようかなって」

龍夜「ほー。それはまた」

キリア「 厨二臭いねえ」

霧唾「……またシンクロ。まあ良いや。本編の方に一区切り付いたら龍夜の『竜魂装着習得イベント』をこっちで書こうかなって思っているので、マンゴーさん許可くださいーい！w」

龍夜「たぶん二つ返事で了承すると思うので」

霧唾「まあ、一応と言う事で。……長くなっただし、そろそろ終わらせようか」

一同（ラジルを覗く）「拝読して頂きありがとうございます！」

ラジル「……けっ」

ちなみに、タイトルの裏切りはフラグを裏切ったり、読者を裏切ったり、作者自身の予想を裏切ったりが由来です（殴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296/>

『転生者達は踊る』ネギま編

2010年12月10日22時32分発行